

Osaka Medical College Faculty of Nursing

大阪医科大学看護学部

年報 2012年度
an annual report



大阪医科大学 看護学部年報 目次

はじめに

I.	沿革	2
II.	看護学部及び教員組織	2
III.	年間事業	5
	事業計画と達成状況	7
	1. 学生在籍数	7
	2. 2012年度予算執行額	7
	3. 学事一覧	7
	4. 新研究科設置準備委員会設置	7
	5. 看護学部棟第I期工事	8
	6. 大阪医科大学看護学部 PA (Parent's Association) 会の発足	8
	7. その他	8
IV.	センター	11
	看護実践研究センター	13
	教育センター	22
	(卒業演習・総合実習 WG)	25
	学生生活支援センター	27
V.	委員会	35
	実習調整委員会	37
	ウェブサイト委員会	38
	国際交流推進委員会	39
	看護研究雑誌編集委員会	43
	備品管理委員会	44
	就職支援委員会	46
	国家試験対策委員会	47
	看護学部年報編集委員会	49
VI.	教育活動	51
VII.	研究活動	75
VIII.	社会活動	97

はじめに

大阪医科大学は、大正末期にアジアやブラジルへの海外移民政策が推進された社会背景の中で、昭和 2 年大阪高等医学専門学校として、国内のみならず海外移民団をも視野に入れた臨床に役立つ実用医を育成する目的のために開学された。看護師の育成は、昭和 4 年に大阪高等医学専門学校附属看護婦学校が設立されてから、大阪医科大学附属看護専門学校として平成 24 年 3 月に閉校するまで続けられた。

また、昭和 23 年頃に、松本信一初代学長が甲種看護師（正看護師）と保健師の養成機関として 4 年制大学構想（保健学科看護学講座）を鑑みていた。それは、松本初代学長直筆である「生物学部構想の大学概略」の貴重な資料に残されている。戦後間もない当時の状況から恐らく GHQ の影響だと推察されるが、この歴史的事実を知る教員は恐らく皆無に近いであろう。松本学長の構想案は夢と化したのが、大阪医科大学に高度な看護教育を熟考していた学長がおられたことを本学部在籍する教員に是非知っておいて欲しいと思う。

こうして本学は、前身の大阪高等医学専門学校が目指した「学を離れて医はない」を建学の精神として、「国内外問わず如何なる地域においても活躍できる医療従事者を養成する」を目標に、医療人養成の大学教育を実施してきた。平成 22 年 4 月に開設された看護学部は、本学の教育理念のもと、「生命の尊厳と人権の尊重を基本に、人々の健康問題の創造的な解決に向けて、柔軟な思考力や幅広い知識と視野をもち、保健・医療・福祉を統合した看護実践能力を有する人材を育成する」ことを目的に看護学教育を開始して、3 年が経過した。

社会はグローバル化が進み、医療の現場にもその影響が押し寄せている。超高齢社会や医療構造の変化に伴う医療のあり方が問われて久しいが、その時代に対応できる看護職の養成が教員に求められている。

一方、文部科学省は学士課程教育において、学生が幅広い教養を身につけ、高い公共性・倫理性を保持しつつ、時代の変化に合わせて積極的に社会を支え、社会を改善していく資質を有する「自立した 21 世紀型市民」を育成することを求めている（中央教育審議会答申平成 20 年）。

さらに、政府は平成 25～29 年を「大学改革実行集中期間」と位置づけ、大学の教育・研究機能を質・量ともに充実させるために“これからの大学教育等の在り方について” 5 項目を打ち出した。すなわち、①グローバル化に対応した教育環境づくり、②イノベーション創出のための教育・研究環境づくり、③教育機能の強化、④社会人の学び直し機能の強化、⑤経営基盤の強化、である。

上記のような大学教育の取り組みからすれば、看護職を養成する大学教員には、教育・研究の環境作りと教育の質を担保することが求められ、社会に期待される学士課程教育と並行させて、看護学教育を実施することの重責を伴っていることがわかる。

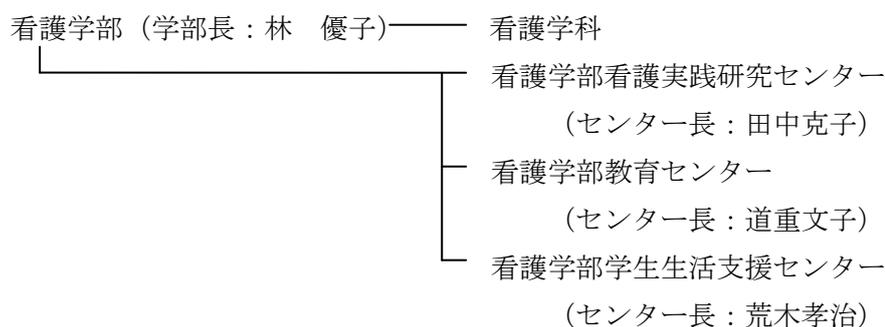
本学部において、全教員が教育研究者として大学教育の責務を担うために 1 年間実施してきたさまざまな事業（教育、研究、社会貢献）とその評価について、平成 24 年度年報としてここにまとめた。

I 沿革

1927（昭和2）年	2月	財団法人大阪高等医学専門学校設置認可
1927（昭和2）年	4月	大阪高等医学専門学校開校認可（修業年限5年）
1929（昭和4）年	3月	大阪高等医学専門学校附属看護婦学校設立認可
1946（昭和21）年	3月	大阪医科大学設置認可（旧制大学）
1946（昭和21）年	4月	大阪医科大学予科設置
1948（昭和23）年	2月	大阪医科大学医学部開学認可
1951（昭和26）年	3月	学校法人大阪医科大学認可（組織変更による）
1952（昭和27）年	2月	大阪医科大学設置認可（新制大学）現在に至る
1952（昭和27）年	3月	大阪高等医学専門学校廃校
1959（昭和34）年	3月	大阪医科大学大学院医学研究科設置認可
1965（昭和40）年	1月	大阪医科大学進学課程設置認可
1978（昭和53）年	4月	大阪医科大学附属看護専門学校設置認可
1982（昭和57）年	12月	大阪医科大学附属看護専門学校3年課程（全日制） 設置認可
2009（平成21）年	10月	大阪医科大学看護学部設置認可
2010（平成22）年	4月	大阪医科大学看護学部開設
2012（平成24）年	3月	大阪医科大学附属看護専門学校閉校

II 看護学部及び教員組織

1. 看護学部組織



2. 教員組織

職位別構成にみると、教授12名、准教授6名、講師5名、助教9名であり、全教員数は32名である（表1）。

表1 教員構成の現任教と定数

科目	領域	教員構成 現任教 (定数)
一般教養科目	哲学	講師 1(1)
専門基礎科目	精神医学、公衆衛生学 生化学、内科学	教授 4(4)
専門科目	基礎看護学	教授 1(1)・准教授 0(1)・講師 2(1)・ 助教 2(2)
	急性期成人看護学	教授 1(1)・准教授 1(1)・助教 1(1)
	慢性期成人看護学	教授 1(1)・准教授 0(0)・講師 1(0) 助教 1(1)
	小児看護学	教授 1(1)・准教授 1(1)・助教 1(1)
	母性看護学・助産学	教授 1(1)・准教授 1(1)・講師 0(1)・ 助教 1(1)
	精神看護学	教授 1(1)・講師 0(1)・助教 1(0)
	老年看護学	教授 1(1)・講師 0(1)・助教 2(1)
	在宅看護学	教授 0(1)・准教授 1(0)・講師 0(1)・ 助教 0(0)
地域看護学	教授 1(1)・准教授 1(1)・講師 1(1)・ 助教 1(1)	

Ⅲ. 年間事業

Ⅲ 年間事業

1. 事業計画と達成状況

1) 学生在籍数

1 年生：88 名（女性 80 名、男性 8 名）

2 年生：90 名（女性 85 名、男性 5 名）

3 年生：85 名（女性 81 名、男性 4 名）

2) 2012 年度予算執行額

予算執行額	137,927,089 円
【内訳】 設置経費	5,000,000 円
図書経費	4,999,667 円
学部共同研究費	3,313,552 円
その他看護学必要経費	124,613,870 円

3) 学事一覧

2012 年度学事予定表を表 2（9、10 p）に示した

4) 新研究科設置準備委員会設置

平成 23 年度の理事会（平成 24 年 2 月 14 日開催）において、大学院新研究科設置（平成 26 年 4 月開設予定）が決議・承認された。その後、新研究科設置準備委員会が設置され（平成 24 年 5 月 25 日）、委員会の下部組織として設置認可申請部会と寄付行為変更申請部会が設置され、作業が開始された。

委員会委員及び設置認可申請部会のメンバーは以下のとおりである。

【委員会委員】

委員長：佐野理事

委員：竹中学長、米田大学院委員会委員長、林看護学部長、鈴木図書館長、黒岩病院長、磯田事務局長、大槻学務部長、門田総務部長、中西財務部長代理、小野看護部長

【設置認可申請部会】

統括責任者（室長）：竹中学長、

室長補佐：林看護学部長、米田大学院委員会委員長

事務室：出坂部長代理（学務部）、前田課長補佐（学務部大学院課）

有友課長補佐（看護学部事務室）

ワーキングメンバー（看護学研究科）：林優子、泊祐子、荒木孝治、佐々木綾子
前田将昭（学務部大学院課）

5) 看護学部棟第Ⅰ期工事

看護学部棟3階の実習室（実習室1～5）及び実験室が整備された。

6) 大阪医科大学看護学部PA（Parent's Association）会の発足

大阪医科大学看護学部PA（Parent's Association）会が総会（平成24年9月29日開催）において決議・承認された。学生の教育と学生生活の発展に向けた支援活動を目指すPA会を看護学部は協力・支援する。

7) その他

第33回日本看護科学学会学術集会開催（平成25年12月6～7日：大阪国際会議場）のための準備を開始する。

表 2

2012年度学第予定表

神戸大学経済経営研究所

日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
日	月	水	木	金	土	日	月	水	木	金	土	日	月	水	木	金	土	日	月	水	木	金	土	日	月	水	木	金	土	日	
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	
水	木	金	土	日	月	水	木	金	土	日	月	水	木	金	土	日	月	水	木	金	土	日	月	水	木	金	土	日	月	水	
学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	
期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	
学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	
期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	
学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	
期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	
学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	
期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	

IV. センター

IV センター

看護実践研究センター

○田中克子、土手友太郎、吉田久美子、佐々木くみ子、山内栄子、瓜崎貴雄、北村有香

1. 現状の説明

看護実践研究センターは、本学部内、大学内をはじめ、外部機関との看護実践等の課題に関する研究の推進と研究成果を発信することを使命とする（大阪医科大学 看護学部 看護実践研究センター規程第2条）。

2012年度は、地域住民への研究成果の発信と、本学附属病院看護部及び地域の医療・保健施設との連携強化を方針に、①市民看護講座、②看護研究セミナー（研究継続支援を含む）、③学部共同研究、④看護部との連携（看護研究研修会）、⑤講演会の後援企画の活動を行った。それぞれの活動ごとに現状の説明をする。

1)市民看護講座

看護学部を開設して3年を迎え、今年度から市民に対し、健康増進および病気や障害をもちながらも、自分らしく生きることに通じるための看護や支援活動について継続的に発信することを使命とする大阪医科大学市民看護学講座を開催することになった。

第1回は、高槻市民および大阪医科大学生、医療従事者等を対象に、患者ががんとうまくつき合う方法や患者への看護および支援活動を紹介するとともに、がんと診断されたときから自分らしく生きるためのあり方を考えることを目的として、「がんとともに自分らしく生きる」をテーマに、2012年11月17日（土）10時から12時に開催した。本事業は、大阪医科大学附属病院看護部と共催し、看護部から講師派遣をしていただいた。

第一部は、大阪医科大学附属病院看護部がん看護専門看護師 上田育子氏に「がんになっても安心して治療を受けられるように」をテーマに、がんの予防法から、質の高い医療を提供するための大阪医科大学附属病院の取り組みを講演いただいた。

第二部は、名古屋大学大学院医学研究科看護学専攻がんプロフェッショナル養成プラン 特任講師／看護師 阿部まゆみ氏から「がんとともに生きる—緩和ケアとは—」をテーマに、がんと折り合って自分らしく生きるための新たな支援方法のひとつである緩和ケアアプローチについて、我が国の状況と名古屋大学の取り組みを講演していただいた。

参加者は、81名であった。そのうち、アンケートに51名（回収率62.9%）の回答があった。

性別は、男性17名(33%)、女性28名(55%)、年齢階層別では、70代14名(27%)、20代8名(15%)、60代7名(14%)、40代6名(12%)、50代6名(12%)であった。

2)看護研究セミナー（研究継続支援を含む）

近隣の医療施設の看護職者を対象にした看護研究セミナーを2回開催するとともに、研究継続支援を行った。また、今年度から、これらの活動について本学ホームページを通して情報提供を行った。

【第1回看護研究セミナー】

第1回看護研究セミナーは、2012年4月21日（土）9:30～13:00に開催した。第1部では、田中克子教授が「看護研究の進め方」というテーマの講演を行い、参加者は35名であった。第2部では、グループミーティングを希望された各施設に看護実践研究センター教員1名を配して研究に関する相談に対応をし、参加者は7施設、16グループ、30名であった。相談内容は、主に研究テーマの設定に関することであった。

参加者を対象に看護研究セミナーの開催内容に関するアンケートを実施し、32名（回収率91.4%）から回答があった。セミナー参加者の年齢は20代が21名（約66%）と最も多かった。平均看護経験年数は約6.6年、職位はスタッフが28名（約90%）であった。参加者の約86%（25名）が第I部、第II部の両方に参加していた。講演の良かった点は「研究の流れ、進め方、研究計画書の書き方、タイトルの付け方などがわかった。今後活用したい」、「具体例・経験談があったことや基礎的な内容であったことでわかりやすかった」などであった。講演の改善点は「講演内容、特に言葉が難しかった」、「具体例をもう少し挙げてほしい」、「研究の種類ごとにデータ収集や分析方法を説明してほしい」などであった。グループミーティングの良かった点は「研究について抱えていた問題点の解決策がわかった」、「研究をやってみようという気持ちになった」などであった。グループミーティングの改善点は、「グループミーティングの主旨や方法を知らなかったために十分な相談ができなかった」であった。第2回看護研究セミナーの希望内容は「研究成果のまとめ方や発表の仕方」、「分析方法」などであった。今後の看護研究セミナーの希望は「文献検索の仕方」、「統計処理や質的研究方法」などであった。

アンケートの結果から、①セミナーの開催の日程は概ね参加者の希望に合致していること、②参加者は平均看護経験年数が6.6年（中央値は4.0年）と比較的経験が少ない人が多く、研究初心者を対象にした内容や研究成果の発表方法・研究方法（分析方法）などの研究の各プロセスに特化した内容を希望していること、③研究継続支援の希望者が14グループ、24名と多く、個別の継続的な研究相談に対するニーズが高いことがわかった。また、グループミーティングの主旨や方法が参加者に十分に周知されていなかったことから、案内状やポスターでの周知徹底や、参加申し込み用紙への相談内容の記載などの対策が必要であるという今後の検討課題が明らかになった。

【第2回看護研究セミナー】

第2回看護研究セミナーは、第1回看護研究セミナーの課題を踏まえて企画し、2012年9月8日（土）9:30～13:00に開催した。第1部では、土手友太郎教授が「データの分析方法と発表方法－質問紙調査研究－」というテーマの講演を行い、参加者は47名であった。

第2部では、研究課題や研究方法が類似する6つのグループに分かれてグループミーティングを行い、参加者は6施設、18グループ、32名であった。相談内容は主に研究方法に関するものであった。また、全参加者のうち17名は、2012年度第1回看護研究セミナーに引き続いての参加であった。

参加者を対象に看護研究セミナーの開催内容に関するアンケートを実施し、アンケートは、44名（回収率93.6%）から回答があった。セミナー参加者の年齢は20代が30名（約68.2%）と最も多かった。看護経験年数の中央値は4年、職位はスタッフが36名（約85.7%）であった。参加者の約8割（30名）が第I部、第II部の両方に参加していた。講演の良かった点は「研究の要点、例、資料やスライドが分かりやすかった（16）」「量的研究の質問紙作成、データ分析、論文作成の方法について学ぶことができた（11）」「自己の検討課題が明らかになった（2）」等であった。講演の改善点は「講義時間を長くしてデータ収集・分析・図表の作成方法についてゆっくり講演してほしい（6）」「内容が難しかった（2）」「セミナー開催の連絡を早い時期にしてほしい（1）」等であった。グループミーティングの良かった点は「研究に関する自己の課題の明確化や疑問の解決ができた（9）」「具体的なアドバイスがもらえた（8）」「他の参加者へのアドバイスや他の参加者の意見が参考になった（6）」等であった。グループミーティングの改善点は、「個別に相談する時間がほしい（1）」であった。今後の看護研究セミナーの内容については、「研究方法をシリーズ化したセミナー（2）」「ミーティング中心のセミナー（2）」「経験の浅い看護師対象のセミナー（1）」等の希望があった。

アンケートの結果から、①セミナーの開催の日程は概ね参加者の希望に合致していること、②参加者は比較的経験が少ない人が多く、研究初心者を対象にした内容や研究成果の発表方法・研究方法（分析方法）等の研究の各プロセスに特化した内容を希望していること、③個別に相談する時間を希望する意見やミーティング中心のセミナーを希望する意見があり、研究相談のニーズが高いことがわかった。また、開催時期を早めに知らせてほしいといった意見や研究方法のシリーズ化の要望があることから、セミナーの年間計画（例えば量的研究に関する内容）を立案し、年度の初めに周知する必要があるという今後の検討課題が明らかになった。

【研究継続支援】

研究継続支援の希望者は14グループ、24名で、看護師経験数年の者から看護管理者まで多岐に渡っていた。研究継続支援申し込み時の支援希望内容は、院内看護研究発表や臨床での研究のためのテーマの設定から論文作成までの全般的な研究支援であった。支援は、看護実践研究センターの全教員がそれぞれ2グループずつ担当し、5月から3月までの期間、実施することとしたが、実際には数回のメールのやりとりで研究テーマの決定を支援した1つのグループ以外は、相談がなかった。しかし、研究継続支援者のうち12名については、第2回看護研究セミナーのグループミーティングにおいて研究テーマや方法についての相談があった。

3)学部共同研究

【研究助成】

2012 年度学部共同研究

2012 年度は、15 課題が助成対象として採択され、うち 2 課題が辞退した。最終的に 13 課題に対し、総額 2,521,470 円の研究費を助成した。以下に、13 課題の成果報告を行う。

研究課題 1) チーム医療を促進できる人材育成に関する研究	
申請者	真継和子, 竹村淳子, 山内栄子, 小林道太郎
研究の概要	目的はチーム医療に関する教育内容と方法を検討することである。看護学教科書の内容分析の結果、一般的理念的な事柄の説明が先行していることが明らかとなった。今年度はチーム医療の具体的現状を把握するため、質的調査により得られた臨床看護師の実践内容と留意している事柄について分析をすすめてきた。分析段階であるが、看護職はチーム医療の中で多職種間の橋渡しとともに、他職種との連携により家族-医療者間の関係性を調整する役割を担っている。
研究課題 2) 看護実践における動機づけ面接技法の検討	
申請者	元村直靖
研究の概要	ウェイトコントロールに有効とされている心理的介入方法の有効性は本邦では検証されていない。そこで、本研究では、動機づけ面接技法の看護実践への導入の在り方とともに、この技法がウェイトコントロールにどのような影響を与えるかについて検討を加えた。本年度は、3 例の被験者に動機づけ面接を行い、内 1 名の被験者では、ウェイトコントロールの成果が見られた。今後さらに症例を増やして検討を加えたい。
研究課題 3) 家族看護の浸透のために 家族看護実践力を培う方略の検討	
申請者	泊 祐子
研究の概要	本研究は初年度のため共同研究者が「家族看護」について共通理解を行うことを主眼として、8 月には長年遺伝相談に携わり、遺伝疾患を持つ家族への支援を行っている三矢早美氏から「遺伝相談における家族看護」の講義、10 月には家族支援専門看護師の星川理恵氏から「家族支援専門看護師の活動」の講義を受けた。並行して月 1 回研究会を開催し、実践に活かせるように家族エンパワーメントモデルを学習した。現在はモデルを用いて、自分たちの実践例を討論し日々の家族看護実践へ反映できるように取り組んでいる。
研究課題 4) 地域で生活する認知症の人とその家族への支援に関する研究	
申請者	北村 有香
研究の概要	地域で生活する認知症の人とその家族を支えることを目的に発足した医療・福祉・行政等の専門職による自主的な取り組み（以下、自主グループ A とする）の内容を明らかにするとともに、その取り組みの意義及び課題について検討することを目的に、自主グループ A のメンバーに半構成的質問紙を用いた面接調査を行った。対象者は 12 名（男性：5 名、女性：7 名）であり、職種は、医師、看護師、社会福祉士、ケアマネジャーなどであった。現在、面接内容を分析中であり、今後、取り組みの意義及び課題について考察する予定である。
研究課題 5) 看護師の問題解決能力を向上させるためのプログラム開発	
申請者	原 明子, 川北敬美, 松尾淳子, 西園貞子, 道重文子
研究の概要	前年度まで、看護師の問題解決能力向上には、クリティカルシンキングが重要であることから、クリティカルシンキング志向性と看護実践能力との関係について研究してきた。今年度は、最終年度で、看護部に所属する教育担当者が数カ月に渡り各病棟をラウンドし、看護師が実際に行っている看護ケアへのアドバイスを行った。介入を通して病院全体の看護実践能力がどのように変化したのか介入前後で比較検討した。看護ケアへのアドバイスという個人行動への刺激を行うことで、組織全体への影響をもたらすことが推測される。
研究課題 6) 看護における倫理概念の明確化	
申請者	小林道太郎, 真継和子, 山内栄子, 谷水名美, 元村直靖, 泊祐子
研究の概要	前年度までの研究により、看護倫理に複数の源泉があり、生命倫理に由来するやり方では、実践の中で生じる倫理的諸問題のうちの一部しか論じることができない、ということが示された。継続研究となる今年度は、より実践に即した枠組みを見出すことを目指し、ケア倫理を手がかりとして検討を行った。その結果、看護ケアの諸局面を整理し、その中で求められる倫理的要素を取り出すことで、看護における倫理的問題をより広く論じられることが明らかになった。
研究課題 7) 職域健診における内臓脂肪量および全身筋肉・脂肪量計測の併用によるメタボリックシンドローム (Mets) 予防対策への効果的な保健指導法の確立	
申請者	土手友太郎, 吉田久美子, 瀧井道明, 草野恵美子, 月野木ルミ, 黒川博史, 横山浩誉
研究の概要	メタボリックシンドローム (Mets) の診断には腹囲は必須基準であるが、内臓脂肪量を正確に反映しないことがあり、機器での内臓脂肪量の測定が推奨されている。また近年、腹囲は基準未満でも内臓脂肪量が多い「かくれ肥満者」の増加が危惧されている。そこで腹囲基準および内臓脂肪量の推測値による基準分類において、生活習慣の行動変容ステージおよび健診結果の状況を 2009 年度に引き続き、例数を増し調査した。
研究課題 9) 看護学初学者における自己学習力の向上を目指した教育方法の検討	
申請者	西園貞子
研究の概要	多様な視点から看護学初学者の自己学習力の志向性を検討することを目的とし、本校および他大学

	を対象として次の調査を実施した。 ①数名の教師に「主体性を育む教育」について、聞きとり調査を行い、自己教育力に影響している属性因子を検討した。 ②看護学専攻の大学生を対象とし、自己主導型学習の志向性尺度、キャリア・レディネス尺度を用いた質問紙調査を実施し、自己学習力の獲得状況を検討した。
研究課題 10)	精神疾患患者の身体合併症を早期に発見する看護師の看護実践技術について
申請者	荒木孝治, 瓜崎貴雄, 岡部英子, 正岡洋子, 伏見博之, 岩田和彦, 米田博
研究の概要	統合失調症患者の身体合併症を早期に発見する看護師の看護実践技術の開発を目的とした。研究協力の得られた1施設253名の看護師を対象とした。その内、10名の看護師が、全6回の身体合併症看護研修プログラムに参加した。研修プログラムは、看護師への面接調査や文献検討の結果に基づいて作成した。研修プログラムへの参加前後に、質問紙調査(看護師の自律性尺度、身体合併症看護への不安の程度等)や面接調査を行い、研修プログラムの効果を測定した。
研究課題 11)	看護実践能力を育成するための大阪医科大学看護学部における助産学教育方法の検討
申請者	佐々木くみ子, 西頭知子, 佐々木綾子
研究の概要	看護系大学助産師教育研究会への参加、学士課程での助産師教育担当教員からの情報収集、他大学の助産学関連科目の授業構成、授業概要等から、本学の助産学教育方法の重要な要素となる可能性のある複数の要素を抽出した。看護基礎教育の統合教育、地域周産期母子医療センターである附属病院・医学部医学科・学外実習施設との教育における強い連携、母性看護学からの段階的学習、自主学習の促進、教育設備の充実、実践的学内演習等が抽出された。
研究課題 12)	国立私立看護系大学における国際交流活動および留学生支援システムに関する実態調査
申請者	カルデナス暁東, 西頭知子, 月野木ルミ, 小林貴子
研究の概要	本研究は、わが国の私立看護系大学の看護学教育における国際交流の実態と課題を明確にし、今後の国際交流活動を検討するための基礎資料とすることを目的として実施された。私立看護系大学協会の加盟校129校を対象に郵送による自記式質問紙調査を行い、回収率は32.6%であった。8割弱の大学では様々な国際交流活動が実施されているが、「人的資源の限界」「資金の乏しさ」「言葉の問題」「カリキュラム上の制限」「不十分な体制づくり」「環境の限界」といった課題が存在していることが明らかになった。
研究課題 13)	糖尿病をもつ壮年期有職者の治療と仕事の両立に向けた援助に関する研究
申請者	西尾ゆかり
研究の概要	目的：壮年期の有職糖尿病患者の治療と仕事の両立に向けた支援の①実態と認識、②各職種役割を明らかにし、より効果的なチーム医療のあり方を検討する。 方法：看護師、薬剤師、管理栄養士など8名を対象に半構造化面接を行い、質的な分析を行った。 結果・考察：他職種から期待される看護師の役割として6つのカテゴリーが抽出された。看護師は、他職種への情報提供や患者のニーズに応じた他職種の調整に併せ、患者が療養生活を円滑に送れるように知識と実践を統合し、調整していく役割があると考えられる。支援の実態と認識、効果的なチームについては、現在分析中である。
研究課題 15)	肌の悩みをもつ女性の月経周期におけるスキンケアとメイクアップスキルの向上をもたらす看護支援の開発
申請者	カルデナス暁東, 西尾ゆかり, 田中克子, 福井奈央, 森脇真一
研究の概要	本研究の目的は、女性の生活の質(QOL)の向上につながる月経周期を考慮したメイクセラピー的看護支援の有効性を評価することである。2013年3月に閉経前女性を対象に、二部構成(①グループ教育講座;②個別メイクセラピー)のプログラムを展開する。グループ教育講座では、資料を用いながら、スキンケアとメイクアップスキルを高めるデモンストレーションを取入れる。その後、個別にメイクセラピーを1回行う。メイクセラピーの際に、メイクアップ前後に撮影し、写真を用いてメイクアップスキルについての指導を行う。

【看護実践研究センター活動報告・研究活動報告会】

2013年3月6日(水)、看護学部教育棟2階講義室1・2において、看護実践研究センター活動報告・研究活動報告会を開催した。プログラム内容は、研究発表(示説8演題)、学部長挨拶(林優子学部長)、実践活動紹介(新阿武山病院 真庭大典看護師)、活動報告、看護実践研究センター長挨拶であった。参加者は、本学部教員28名、実習施設をはじめとする学部外からの参加者4名、合計32名であった。

実践活動紹介および学部共同研究費研究発表の演題と発表者

実践活動紹介
「フットサルを通しての障がい者支援」真庭大典看護師(新阿武山病院)
学部共同研究費研究発表
1.「看護における倫理概念の明確化」小林道太郎
2.「縦断的調査による看護大学生における自己学習力の構成因子の変化」西菌貞子

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> 3. 「看護師の看護実践能力向上に対する取り組み後の変化」 原明子 4. 「看護職からみたチーム医療の実態－看護師のインタビューから－」 真継和子 5. 「メタボリックシンドロームのわが国と世界統一基準による該当者割合と内臓脂肪量等の比較検討」 土手友太郎 6. 「動機づけ面接によりウェイトコントロールの効果が認められた肥満症の一例」 元村直靖 7. 「糖尿病をもつ壮年期有職者の治療と仕事の両立に向けた援助に関する研究」 西尾ゆかり 8. 「私立看護系大学における国際交流活動に関する実態調査」 カルデナス暁東 |
|--|

④看護部との連携（看護研究研修会）

附属病院看護部から看護学部学生実習へ多大なご支援を頂いている現状において、当センターとしても病院看護部における研究と教育の支援という目的で、今年度から看護師の院内ラダー教育の一部を分担することになった。対象は卒後数年目の約 90 名であった。内容は看護部のリクエストにより、量的データの分析演習を土手が、質的データ解析の講義を山内が 9 月に各 2 コマ担当した。

⑤講演会後援の企画

Neonursing 研究会（代表：兵庫医療大学看護学部教授 末原紀美代）主催の 30 年に及ぶアメリカでの研究・教育の実践において、NIHをはじめとする数々の機関からの研究助成金を得て、その成果を多数の英語ピアレビュー雑誌に発表されているノースカロライナ大学チャペルヒル校 看護学部 准教授の余善愛 (SeonAe Yeo) 博士による「看護研究の来し方と行く末」について講演会の後援を企画した。2012 年 6 月 17 日(日) 13:00～16:00 に大阪医科大学歴史資料館において、講演が行われ 63 名の参加者があった。

2. 点検評価

1) 効果が上がっている事項

①市民看護講座

講演の内容について、第 1 部では、大変良かったと答えた者が 22 名(47%)、良かったと答えた者が 22 名(47%)であった。第 2 部の内容については、大変良かったと答えた者が 20 名(39%)、良かったと答えた者が 24 名(47%)であった。感想は、・市民に対してわかりやすく、がんの予防法や治療法、また大学病院の取り組みや様々な医療スタッフの関わりについて知ることができた。・ホスピスデイケアは、緩和ケアのイメージが変わり、前向きな方法として考えたい。・ホスピスはいかに生きるか考える場と知った。・他国と比較した緩和ケアの実際を知ることができた。・医大で治療したい等があった。

②看護研究セミナー（研究継続支援を含む）

第 1 回セミナーはテーマの見つけ方から研究の実施までの研究のプロセスを知ることができること、第 2 回セミナーはデータの分析から発表までの研究プロセスを知ることができること、及び第 1 回・第 2 回ともに自分の関心のある研究テーマについて自分と同様に関心のある人々と意見交換をすることを通して研究に関する自己の課題の解決の方向性を見出すことができることを目的に開催したが、アンケート結果から、概ねこれらの目的は達成できたと考える。また、セミナーの開催の日程は概ね参加者の希望に合致している。

③学部共同研究

学部共同研究に関する現状の説明において、研究成果の社会への発表の状況を示した。2012年度は、学会発表が10題あり、論文発表が10題あった。2011年度までに助成を受けた研究では、学会発表が8題、論文発表が2題あり、学部共同研究費助成による研究活動が活発に実施されていることが明らかである。

また、看護実践研究センター活動報告・研究活動報告会については、毎年度末に定期開催されており、本年度は外部施設の実践活動紹介を企画し、学外施設との研究における交流を深めた。

④看護部との連携（看護研究研修会）

統計演習に関しては、新講義実習棟医学部生用3階講義室のノートPCに配備されている統計処理ソフトJMP「ジャンプ」ver.9.0を用い、全員が各自のPCで解析した。約90名を2回に分け、演習に適したサイズにした。約4000名の実際の健診データ提供し、オリジナルマニュアルに従い、全員一緒に演習を進行した。よって全員が脱落せず、集中して、演習を完遂できた。

参加者は、質的研究及び質的データの分析の概要は理解できたと考える。また、本講義を通して、看護研究に対する本学附属病院中堅看護師の関心や理解状況を知ることができた。これらの情報は、今後、看護師との共同研究や学部学生の臨床実習指導の際に活用できると考える。

⑤講演会後援の企画

後援企画は初めてのことである。看護実践研究センターの任務である看護に関する研究情報の収集と内外への発信をねらい、企画した。特に本企画は、演者による日本語の講演で、アメリカで30年以上の研究生活の体験から「看護におけるもの見方考え方」から多くの示唆を与え、活発な意見交換も見られた。

2) 改善すべき事項

①市民看護講座

講座に関しては、大変興味があるので、今後も続けてほしい・情報を得ることによって不安が取り除かれるので、機会があるごとに受講したいという意見が多かった。希望するテーマについては、がん（医療制度や取り組み、食事療法など）・子宮頸がん・体がんについて（20.30代向けとして）・難病・生活習慣病・糖尿病・認知症予防、介護予防・パーキンソン病・骨そしょう症・精神、身体障害者支援等があった。

メールでの講座の案内がほしいという意見もあり、今後さらに、市民に参加していただくための広報活動や開催日等の工夫が課題となる。

②看護研究セミナー（研究継続支援を含む）

参加者の看護師経験年数や研究経験等にばらつきがある。そのため、本セミナーに希望する内容も研究初心者を対象にした内容から、研究成果の発表方法・研究方法（分析方法）等の研究の各プロセスに特化した内容まで多岐に渡っている。また、個別の研究相談の希

望は多いが、研究継続支援を申し込みながらもセミナー開催時以外に個別相談をする人は少なく、研究継続支援のシステムが十分に活用されていない状況である。一方、研究継続支援者の半数以上が 2 回のセミナーのグループミーティングに参加していたことから、セミナー等での個別相談が利用しやすいと考えられる。また、看護研究セミナーの開催には資料印刷代や飲み物代の費用がかかるが、再来年度以降、看護研究セミナーの予算化が難しいことが予想され、運用資金の獲得を検討する必要がある。

以上から、来年度の看護研究セミナーは、幅広い参加者の希望に沿うように、事例研究と量的研究の分析方法の 2 本立てとして参加するセッションを選択できるようにすること、及び個別相談の時間を設けることを検討している。また、来年度は看護研究セミナーの予算は確保できる予定であるが、再来年度に向けて、来年度から参加費として資料代と飲み物代を毎回 500 円徴収し、運用資金の獲得を試みる予定である。

③学部共同研究

看護実践研究センター活動報告・研究活動報告会において、研究活動における学外施設との交流を活発化する必要がある。

④看護部との連携（看護研究研修会）

新講義実習棟 3 階講義室は医学生用であるため、演習時間が課外時間の夕方以降でないと実施できなかった。疲労や夕食の観点から、できればもう少し早い時間帯が望ましい。PC の動作環境に不備が多く、ほぼ半数しか正常作動せず、事前確認と整備が必要であった。演習中は補助スタッフがいればタイムリーな個別指導が容易であった。

質的研究に関しては、講義は行ったが、その後の研究計画立案等は教育担当看護師に任せていることから、参加者の理解状況がわかりにくく、講義内容と実際の研究指導内容に違いが生じる可能性もある。今後、さらに看護部との連携を強化していくことが望まれる。

⑤講演会后援の企画

内外の情報発信に積極的に取り組むとともに、学生や臨床からも幅広く参加者を募ることができるように工夫したいと考える。

3. 将来に向けた発展方策

本センターの使命は、学内外はじめ外部機関及び地域社会における看護実践の課題に関する研究を推進するとともにその成果を発信することである。それを踏まえると、2012 年度の活動である、2012 年度の共同研究プロジェクトは 15 テーマで、2011 年度より 3 テーマ増え、内 2011 年度から継続しているテーマは 7 テーマであったこと、研究セミナーの内容を参加者のニーズに合わせて変更し 4 月と 9 月に行ったこと、高槻市の後援を得て地域住民を対象に企画した大阪医科大学市民看護講座、看護実践研究センターの看護活動・研究活動交流会で、共同研究プロジェクトの発表と地域施設間の看護実践交流をねらった看護実践の紹介、最後に広く情報発信に取り組むことを目的に後援企画を行ったこと、は昨年と比べ看護実践研究センターの使命を一層発展させてきていると考える。

しかし、看護実践研究活動がさらに発展するために、他職種、臨床の看護職者と共同研

究、実践活動ができるように意思疎通を図り連携を強化するとともに、看護実践研究活動が継続できるように体制を作っていきたい。将来的には卒業生の参加も視野に入れた活動に取り組みたい。

4. 今後の課題

学内はもとより地域との連携による看護実践に活かせる研究推進、情報発信をより強化するために、学内や地域の人々との長期的な関係の構築・強化を目指す。そのために、2012年度の活動を踏まえ継続的な活動を行うとともに、地域住民のニーズとグローバルな視点の双方を併せた課題に取り組んでいきたい。

教育センター

1. 現状の説明

1) 目的

教育センターは、本学部における学部教育課程を円滑に管理運営することを使命とし、大阪医科大学看護学部教育センター規程に定められた以下の事項を遂行した。但し、実習に関することは、別途実習検討委員会でも行われている。

- (1) シラバスの作成等カリキュラムに関する事項
- (2) 実習に関する事項
- (3) 学生の成績、進級、卒業の判定に関する事項
- (4) 「保健師助産師看護師学校養成所指定規則」に関する事項
- (5) ファカルティデベロップメントに関する事項
- (6) 教育研究上必要な校舎の運用に関する事項
- (7) 学長あるいは学部長から依頼を受けた事項
- (8) その他、センター長が必要と認める事項

2) メンバー

小林貴子、佐々木綾子、瀧井道明、○道重文子、草野恵美子、真継和子

3) 目標・方針、活動内容

(1) 目標・方針

2012年度は継続審議事項であった4年生の卒業演習・総合実習の進め方の検討、授業評価について、新規事項としては医看融合教育の進め方、FD活動の企画と運営のため4つのワーキングを立ち上げ検討を進めた。各ワーキングのメンバーは表内に示した。

ワーキング	メンバー (○リーダー)
総合実習、卒業演習の進め方	○真継 小林 ^貴 、佐々木 ^綾 、草野
授業評価に関すること	○道重、佐々木 ^綾 、瀧井
医看融合教育の進め方	○小林 ^貴 、瀧井、草野
FD活動	○佐々木 ^綾 、道重、真継

*各ワーキングの活動内容は、別途に示す。

(2) 活動内容

2012年度の委員会の開催は、毎月第4水曜日の13:00～を定例会とし12回開催した。記録係は輪番とした。以下に活動日と内容を示す。

活動日	活動内容
第1回 2012年	【審議事項】本年度の委員会の進め方、本年度の事業内容確認と役割、「医看融合教育ゼミI」(1年生対象)、教務関係物品購入伺

4月11日	<p>【報告事項】既修得単位認定希望者</p> <p>【その他】「学籍簿」、試験を実施しない必修科目で不合格となった場合の再履修方法、FD活動の予算</p>
第2回 4月25日	<p>【審議事項】医看融合教育(6/13実施)の計画、看護学部ホームページ掲載用の看護学部の教育の特徴、FD活動、地域看護学実習Iにおける高槻市・島本町2週間実習11名の選抜、教務関係物品購入伺</p> <p>【報告事項】授業評価</p> <p>【その他】看護学部案内パンフレットの配布、助産学実習履修者の選考、選択科目・自由科目履修者数</p>
第3回 5月23日	<p>【審議事項】医看融合教育(6/13実施)の計画、授業評価アンケート、看護学部の教育の特徴</p> <p>【報告事項】総合実習・卒業演習、FD活動</p>
第4回 6月27日	<p>【審議事項】前期試験日程に関連して、医看融合教育、助産師国家試験受験資格希望者の選考に関する申し合わせ事項(案)、総合実習・卒業演習、FD活動</p> <p>【報告事項】授業評価は紙媒体で実施</p>
第5回 7月25日	<p>【審議事項】平成25年度新入生オリエンテーション日程に、第3学年医看融合教育、履修規定の見直し(既修得単位について)</p> <p>【報告事項】総合実習・卒業演習、授業評価、FD</p> <p>【その他】3年生夏休み前実習オリエンテーション手順説明会、3年生9月5日(木)領域実習全体オリエンテーション、1年生の後期座席変更の掲示</p>
第6回 9月26日	<p>【審議事項】平成25年度学事予定表(案)、看護専門学校の授業科目の英文名、授業評価、解剖慰霊祭出席、総合実習・卒業演習</p> <p>【その他】教室予約、教育センター予算、講義室2にポータブルマイクの常時設置</p>
第7回 10月24日	<p>【審議事項】平成25年度学事予定表(案)、看護専門学校の授業科目の英文名、卒業演習、履修規定の見直し(既修得単位認定に関して)、2013年度時間割</p>
第8回 11月7日	<p>【審議事項】卒業演習(原稿依頼)、履修規定の見直し(既修得単位認定申し合わせ事項、総合実習の履修要件)、第2回FDワークショップ、助産師国家試験受験資格希望選考関係</p> <p>【報告事項】公開授業状況、2013年度時間割、次年度の医看融合教育</p>
第9回 12月26日	<p>【審議事項】総合実習などの履修要件、医看融合教育実施要領、後期試験日程調査及び試験監督依頼、平成25年度シラバス作成依頼、仮学生証の発行、情報処理室の印刷用紙、実習室の使用規定、管理、2013年度総合実習要項</p> <p>【報告事項】来年度の学生健康診断の予定について</p>
第10回 2013年 1月23日	<p>【審議事項】2015年度「公衆衛生看護学実習II」における遠隔地実習の予算、シラバス訂正、新学年ガイダンス、予算余剰金</p> <p>【報告事項】卒業演習要項、後期試験監督補助者、地域看護学実習I・II(4年</p>

	次対象) 全体オリエンテーションおよび事前講義日程、総合実習要項 (校正)
第 11 回 2 月 27 日	【審議事項】 総合実習・卒業演習 グループ分け、物品購入、後期試験成績不良者の対応、追試験・再試験 教授会審議事項 【報告事項】 後期授業評価、第 2 回 FD ワークショップの役割分担、3 年生の実習成績不良者
第 12 回 3 月 27 日	【審議事項】 次年度の事業計画、次年度の審議予定 【報告事項】 留年者の面談結果

2. 点検評価

1) 効果が上がっている事項

授業評価に関しては、ユニバーサルパスポートによる入力方式から、紙媒体によるアンケート方式に変更したことにより、回収率が向上した。

第 2 回目 FD 活動では、4 領域からの実習・演習に関する取り組みを報告してもらうことにより、各領域での今後の授業展開の連携に活用できる示唆を得ることができた。

2) 改善すべき事項

FD 活動に関しては、教員相互の教育力向上のために公開授業を行ったが、参加者が少なかったため、活動内容の検討が必要である。

学生の単位修得状況により、履修規定の見直しが必要となっているため、単位修得ができるように、学生への指導体制の検討が必要である。

3. 将来に向けた発展方策

学生への指導や教員個々の教育力向上のため、情報交換や共有できる機会を増やす。

4. 今後の課題

旧カリキュラムと新カリキュラムを展開しているが、3 年後には新カリキュラムでの卒業生をだすため、本学の教育目標の評価を行い、医看融合教育の充実を図るためにもカリキュラムを検討することが課題である。

(卒業演習・総合実習 WG)

1. 現状の説明

メンバー：○真継和子、小林貴子、佐々木綾子、草野恵美子

期 間：2012年4月～2013年3月

昨年度からの継続課題であった看護実践能力に関する自己評価表作成の検討、及び平成25年度から開講する「総合実習」、「卒業演習」の2科目について、これまでの確認事項を見直し実施に向けた最終的な調整を中心に活動した。以下に本年度活動計画と、活動内容についてまとめる。

1) 活動計画

- ① 看護実践能力に関する自己評価表の作成、自己評価の集計
- ② 卒業演習要項の作成、印刷取りまとめ
- ③ 総合実習要項の作成、印刷取りまとめ
- ④ 卒業演習及び総合実習の学生配置に関する調整
- ⑤ その他卒業演習、総合実習に関わる調整

2) 活動内容

主な活動内容及び審議事項は以下のとおりである。

- 4月；総合実習の実習目的・実習目標の最終確認及び総合評価基準案の作成
- 5・6月；看護実践能力に関する自己評価表作成に関する検討
- 7・8月；看護基本技術記録の作成、印刷
- 9月；看護基本技術記録についてのオリエンテーション、総合実習要項、卒業演習要項作成スケジュールの提示
- 10月；各領域の総合実習要項作成依頼と取りまとめ、卒業演習要項案の作成
- 11月；卒業演習要項案の修正と各領域の卒業演習概要の原稿依頼
- 1月；総合実習要項印刷部数の確認・印刷・配布、卒業演習要項最終確認・印刷
- 2月；卒業演習・総合実習オリエンテーション、卒業演習選択希望領域調査の実施と回収
卒業演習・総合実習学生配置に関する申し合わせ事項の検討、及び配置案の作成

2. 点検評価

1) 効果が上がっている事項

総合実習の評価基準、卒業演習の進め方及び評価基準等について、学部内での審議事項として取り上げ教員間でのコンセンサスを得ることができた。

2) 改善すべき事項

卒業演習学生配置に関し、全学生が可能な限り上位の希望領域に配置できるよう調整していくために、現行の卒業演習学生配置案作成手順（卒業演習学生配置申し合わせ事項）の検討を重ねていく必要がある。

3. 将来に向けた発展方策

看護基本技術記録の自己評価を参考にし、学部としての看護技術教育上の課題を明らかにしていく。また、自己評価の有用性を明確にし、有効に活用でき得るものに検討していく必要がある。

4. 今後の課題

次年度の卒業演習が円滑に進むようスケジュール管理等調整し、発表会に向けて具体的な計画を進めていく。また、看護基本技術記録に関しては、その有用性を明確にしていくことが課題である。

学生生活支援センター

1. 現状の説明

1) 学生生活支援センターの概要

(1) センターの目的

看護学部学生生活支援センターは、看護学部における円滑な学生生活を提供することを目的として開設年度（2010年度）から設置されている。学生の厚生・補導・福利、奨学金や生活上の問題、その他、学長あるいは学部長から依頼を受けた事柄について審議し、教授会の議を経て実施するのが任務である。

(2) メンバー

○荒木孝治、矢野貴人、竹村淳子、小林道太郎、西菌貞子、谷水名美、西尾ゆかり、横山浩誉

(3) 2012年度の目標

2012年度は、多様な活動を推進するため役割分担をした上で、各担当について次の事項を目標とした。

- ・チューターが活動しやすい、学生が相談しやすい環境づくり
- ・公共性のある奨学金の開示の促進
- ・意見箱の運用の開始、教員・学生懇談会の開催の恒常化
- ・保健管理室との連携の一層の緊密化
- ・新入生学外合宿参加者の安全、学生の課題達成を促進できる組織づくり
- ・学生が自ら話し合い学生生活の問題を解決していくことの支援

(4) 各月の活動概要

毎月定例会議を開催し、必要事項の確認と検討、意思決定を行った。会議については都度、議事録を作成している。各月の主な活動は次の通りである。

- 4月 新入生オリエンテーション、新入生学外合宿、センター員役割分担と目標設定、新規チューターグループへの移行
- 5月 奨学金応募者面接審査、意見箱・休養室・研究室の利用法について検討
- 6月 在学生オリエンテーション、意見箱運用開始、休養室オープン
- 7月 規程の一部改訂提案、夏休み前の注意喚起オリエンテーション
- 9月 学生の意見に対する回答検討、2013年度版学生便覧の検討
- 10月 2013年度チューターグループ顔合わせの提案、学生の意見に対する回答検討
- 11・12月 教員・学生懇談会の検討、感染症予防の注意喚起
- 1月 教員・学生懇談会回答案準備、2013年度新入生合宿在学生参加者募集
- 2月 教員・学生懇談会実施、新入生合宿準備と在学生ミーティング

2) 担当ごとの活動内容

(1) 奨学金関連

(i) 日本学生支援機構奨学金

日本学生支援機構による奨学金は、返済時利息のつかない第一種奨学金と利息のつく第二種奨学金がある。応募した学生の奨学生への採用は、2012年度は4つのパターンがあった。学生が高校在学時に既に申し込み大学入学時に採用の決まっている予約採用、4月に募集が行われた定期採用、7月に定期採用にて推薦外となった学生に対して募集が行われた追加採用、加えて11月に募集の行われた臨時採用の4つである。このうち、本学看護学部への推薦割当人数を上回って応募者の多かった定期採用については面接を行い、選考を行った。また、2012年度より第二種奨学金から第一種奨学金、または第一種奨学金から第二種奨学金へ貸与種別の変更が可能となった。

2012年度の日本学生支援機構奨学金奨学生数は以下のとおりである。予約採用で採用となったものは1年生24名※(第一種3名 / 第二種21名, ※1名臨時採用にて第二種→第一種移行)、定期採用で採用となったものは1年生16名※(第一種8名 / 第二種8名, ※1名追加採用にて第二種→第一種移行)・2年生4名(第一種1名 / 第二種3名)、追加採用で採用となったものは1年生4名(第一種2名 / 第二種2名)、臨時採用で採用となったものは1年生2名(第一種2名)・3年生1名※(第一種1名, ※第二種(2010年度採用)→第一種移行)である。

(ii) 看護学部独自の奨学金

看護学部の奨学金制度として、開設年度に制定された大阪医科大学看護学部入学時特待生、大阪医科大学看護学部貸与奨学金、大阪医科大学看護学部給付奨学金がある。

看護学部入学時特待生の制度は本学看護学部に入学者の学業、人物ともに極めて優秀な者に対して学費の一部を給付することにより、入学後の学業の励みとすることを目的とし、給付額は入学年度に納入する実習料及び施設拡充費相当額(50万円)である。本学看護学部一般入学試験(前期)合格者より選考し、看護学部教授会の承認を経て学長が決定する。

看護学部貸与奨学金の制度は相互扶助の精神から制定されたものであり、家計が急変し、意欲があるにもかかわらず修学が困難になった者を対象にしている。貸与額は50万円である。学生はその事由が発生した月から12ヶ月を越えない期間内に本奨学金への出願ができる。奨学生の決定は、当該学生から出願後2ヶ月以内に、教授会での議を経て、学長が行う。2012年度について該当者はいなかった。

一方、看護学部給付奨学金の制度は奨学金を給付して学業を奨励させることを目的としたものである。看護学部教授会にて成績、人物ともに優秀な候補者として推薦され、経済的事由があると本学が認める者に対して、当該年度における実習料および施設拡充費の年額合計50万円を給付するものであり、奨学生数は1年生を除く各学年4名である。

2012年度は教授会にて新3年生9名(1名辞退)、新2年生10名が推薦され、そのうち各学年4名、計8名の学生が教授会の議を経て、学長の決定により、給付奨学生となっ

た。

(iii) その他の奨学金

上記の奨学金以外について、2012年度に実績のあった各種団体からの奨学金は以下のとおりである。

奥村財団による奥村奨学金は、大阪府下の大学等に在学している学生を対象とし、奨学生には卒業まで月額3万円が給付される。2012年度の奥村奨学金への応募者数は4名（1年生）であったが、本学の看護学部への推薦割当人数は1名であったため面接および選考を行い、4人中1名を推薦した結果、奥村奨学会より採用となった。

小野奨学会による小野奨学金は、大阪府下の大学に在学して同会の家計基準を満たす学生を対象とし、奨学生には卒業まで月額3万円が給付される。2012年度の小野奨学金への応募者数は3名（1年生）であったが、看護学部への推薦割当人数は2名であったため面接および選考を行い、3人中2名を推薦した結果2名が小野奨学会より採用となった。

公益財団法人じゅうしん育英会による奨学金は、大阪府下の大学に在学する学生及び大阪府下に住所を有する大学生で、学資の支弁が困難と認められる者が対象となり、給付奨学金と貸与奨学金がある。給付額は2万円、貸与額は2万円である。本学看護学部より給付奨学金について3名（3年生1名、1年生2名）の申し込みがあった。3名を貴奨学会へ推薦した結果、1名（1年生）が採用となった。

大阪医科大学附属病院による奨学金制度として学校法人大阪医科大学看護奨学金が2012年度より施行された。本奨学金は看護師等を養成する大学を主として、または短期大学及び専門学校に在学する学生で、卒業後直ちに助産師、看護師、保健師として学校法人大阪医科大学が設置する医療機関に勤務しようとする者に対し、学業を奨励することを目的としている。貸与は3年次または4年次の学年の始めて、貸与期間は3年次採用の場合は2年間、4年次採用の場合は1年間である。貸与月額は5万円である。看護師免許取得後、奨学金の貸与を受けた期間、大阪医科大学附属病院に勤務した時、全額返済免除となる。受給者は14名である。

(2) チューター制度

チューター制度に関しては、2012年4月より教員・学生のグループ変更を行うことが前年度に決定されていた。このグループ変更は、2012年度より新たに数名の教員が着任すること、および担当学年が3学年に増えることを考慮したものであり、グループは2年間継続するものとされている。

これを受けて、4月にチューターグループの編成を行った。教員は2名ずつの16グループとし、2・3年生は、前年度とできるだけ重ならないようグループ分けを行った。新入生は学籍番号順によるグループ分けとした。

表 2012・2013年度チューターグループ

No.	担当教員	No.	担当教員
1	道重、黒川	9	瀧井、西菌

2	田中、瓜崎	10	吉田、松尾
3	泊、横山	11	佐々木綾、小林道
4	荒木	12	山内、山地
5	土手、原	13	竹村、川北
6	元村、西頭	14	佐々木く、西尾
7	矢野、北村	15	真継、月野木
8	小林貴、太田	16	草野、カルデナス

4月の新入生学外合宿では、学生はチューターグループ単位での活動を基本とし、研修等でチューター教員と学生の交流の機会をもった。4月以降、各グループごとに、学生との面談やミーティングを行う、学生の相談に応じるなどの活動が行われている。

2013年度以降は、新入生学外合宿に参加する教員数が少なくなるため、チューター教員と担当学生の顔合わせの機会を別途設けることが有意義であると考えられる。そのため1～3年生を含めた各グループの顔合わせを2013年4月に一斉に行うことを提案し、学科会議で承認された。

(3) 学生の意見箱、懇談会

学生生活支援センターでは、前年度より看護学部生からのさまざまな要望・意見に応えるための対応策について検討を重ねてきた。その一策として、今年度から意見箱の設置・運営を開始することとなった。また、今年度で2回目となる年1回の「看護学部教員と学生との懇談会・懇親会」も前年度と同じ時期に開催した。

(i) 意見箱

2011年度に作成していた「学生の声 投書用紙」を用い、6月より設置・運営を開始した。意見箱は定期的には開箱し、学生生活支援センター内で要望・意見の内容を検討後、掲示板に回答している。回答が困難であると判断した内容に関しては、懇談会まで検討を重ね、学生へ伝達をすることとした。

(ii) 看護学部教員と学生との懇談会・懇親会

今年度の概要について、下記に示す。

(1) 日時：2013年2月15日（金）14：40～16：10

(2) 場所：第一講義室

(3) 参加者：教員14名（学部長、学生生活支援センター長・委員、出席希望教員）
学生26名（3回生 25名、2回生 1名、1回生 0名）

(4) 主な要望・意見：

事前に各学年の総代・副総代に意見の取りまとめを依頼した。その後、提出された意見を全学年で集約し、内容によって分類した。また、これまでに意見箱に寄せられた意見も併せて、再度分類を行った。

- 施設・設備に関して（33件）
 - ゴミ箱の設置について

- 大学の教室の開放日・開放時間についての拡大について
- 売店の設置について
- 情報処理室のパソコンやプリンタについて
- その他（6件）
 - 事務に関連することについて
 - 授業や試験について
- これまでに意見箱に投函された意見（8件）
 - 就職活動の情報について
 - 図書館の蔵書について
 - 教室の音響について
 - 夏季休暇について
 - 電子レンジ・給湯ポットについて

（5）回答：

学生からの要望・意見に対して、学生生活支援センターで回答案を作成した。その後、回答案についてはさらに検討を重ね、最終案は看護学部長、学長の承認を得てから、懇談会内で学生へ口頭で伝達した。また、後日、掲示板にも伝達内容を示した。

（6）回答への質疑応答：

伝達した事項に対して、内容によっては、さらに学生からの強い要望や意見、疑問が寄せられた。それらに対して、今後の予定についても伝達し、可能な範囲で対応していくこととなった。

（4）健康管理

学生および教職員が体調がすぐれない等の理由により、一時的に休養を必要とする場合に利用できる休養室を学部棟に設置した。利用状況は、学生 18 名であった。利用理由は、腹痛などの体調不良であった（6月25日～2月末日）。

保健管理室より小児感染症ワクチン接種報告がない学生について連絡を受け、該当学生に接種および保健管理室への報告について指導を行った。

周辺地域や附属病院においてノロウイルスの流行があったことから、学部内の各教室・実習室（計 10 か所）に注意喚起のチラシを掲示した。また、吐瀉物の処理に必要な物品を事務室に設置した。

（5）学生生活への対応

学生生活に関して、次のことを行った。

- 大学北門から北キャンパスへの道路横断について、横断歩道を利用せずに横断していることに関して、学生への注意喚起を促す印刷物を作成・配布し対応した。
- 大学周辺における不審者について（学生からの相談）、全学生に対して注意喚起を促すと

ともに、総務および保安課に連絡し、見回り等の対策の依頼を行った。また、相談のあった学生の情報をもとに、学生生活支援センター委員が周囲の状況確認及び見回りを行った。

・演習室の利用について、状況把握を行ったのち、有効に利用できるように予約等を中心に規定を作成し、運用した（演習室の利用の際の予約は、その後ユニパによる運用へと変更となった）。

（6）規程、学生便覧

関連規程および学生便覧に関して、次のことを行った。

・6月に在学生オリエンテーションを行い、各学年の学生に対して、施設運用ルールの変更等の必要事項および不審者等に関する注意事項について伝達した。

・毎年4月に行われる新入生オリエンテーションについて、内容を見直し、2013年度は学生生活支援センター担当枠を、従来の135分から、60分に短縮することとした。

・2013年度入試・奨学金制度の変更に伴って必要となる規程改正（「入学時特待生規程」および「奨学金貸与規程」）を提案した。

・学生便覧の見直しを行い、上記変更等により必要な項目の追加修正を行うとともに、より見やすいものとなるよう目次・内容を修正した。

（7）新入生学外合宿

看護学部では、医学部の新入生学外合宿にあわせて、開設年度より看護学部新入生学外合宿を実施している。新入生学外合宿の企画及び運営は、2011年度（開設2年目）より学生生活支援センターが担っている。

2012年度は、2012年4月6～7日、VIPアルパインローズビレッジ（兵庫県篠山市）にて一泊二日の学外合宿を行った。参加人数は、新入生87人（欠席者1人）、教職員32人、ライフサポートクラブ部員（医学部生中心）7人、看護学部在学生13人、合計139人であった。研修内容は、①「からだと心を解きほぐそう！～信頼関係を築くアクティビティ～」②「在校生による大学生生活紹介及び交流会」③「救急蘇生とAED講習」（講師：医学部西本泰久准教授）であった。学外合宿終了後、新入生を対象に合宿に関するアンケートを実施し、振り返り及び来年度以降の課題を検討した。

2013年度に関しては、現在企画検討中であるが、2013年4月5～6日、VIPアルパインローズビレッジ（兵庫県篠山市）にて一泊二日で行う予定である。新入生学外合宿も4回目を迎えるにあたり、これまでと違って在学生中心の運営ができるよう企画、準備を進めている。合宿における課題としては、①新入生を中心に在学生・教職員との交流と理解を図る、②看護職としての心構えをもつことを理解する、③本学の特色を知る、である。研修内容としては、現在企画検討中であるが、主なものとして「アクティビティを通して相互関係を深める」、「本学の歴史と特徴」、「アルコールや交通安全に関する研修」、「在学生及び教職員との交流会」、「心肺蘇生法およびAED講習」等と考えている。参加予定人数は、新入生88人（予定）、教職員15人（昨年度より13人減）、在学生30人（昨年度より20

人増)、その他(講師等)、合計140人である。

2. 点検評価

1) 効果が上がっている事項

次に示す通り、期初に掲げた目標の多くを達成した。

- ・チューターに関しては、新グループへの移行を教員・学生に周知し、新グループでの活動が継続されている。
- ・奨学金関連では、各地の病院等施設からの奨学生募集を、確認の上で随時掲示することとし、学生への情報開示を進めた。また日本学生支援機構他の奨学生募集その他の事項に関しても都度対応した。
- ・意見箱の運用を開始し、学生からの意見の把握と対応の検討をより適切に行うことが可能となった。また昨年度に続き2回目となる教員・学生懇談会を開催することでこれを定例行事とした。懇談会では有意義な意見交換を行うことができた。
- ・保健管理室の協力を得て、新しい休養室を設置した。また感染症対策等について、連携して注意喚起を行った。
- ・2013年度新入生合宿は、これまでと違って在生中心の運営ができるよう準備を進めている。それに伴い、教員参加者は大幅に減らすこととした。
- ・学生からの意見の一部について、総代・副総代を中心に学生同士の話し合いを行ってもらいなど、自主的な改善の努力を求めた。

2) 改善すべき事項

看護学部教員と学生との懇談会・懇親会は、今年度は前年度にならって2月の開催としたが、参加学年が偏っていたことから、来年度以降、全学生が参加可能な開催時期について検討していく予定である。

3. 将来に向けた発展方策

チューター制度に関しては、2013年4月に全グループの顔合わせを計画中であり、これによってその後のチューター活動がより円滑になることを狙っている。

意見箱に関しては、引き続き学生からの意見に対する回答を示し、可能な対応をとってゆくことで、学生と教員との信頼関係を強化するとともに、学生生活の環境改善につなげてゆく。

健康管理については、今後も保健管理室との連携を密に行い、感染症の予防等の健康教育・啓発に努める。

これまでの準備をもとに、2013年度新入生合宿を在生中心で運営できるようにする。今後もこの方向性を押し進めてゆくことで、学年間の相互交流を促進する。また担当教員と在生との間にもよりよい協力体制が築かれるようにする。

4. 今後の課題

2013年度からは1~4学年がそろい、キャンパス人口が最大となる。そのため学習・生活環境の面で、学生にとってはこれまでと比べて厳しい状況になる部分が出てくると予想される。チューター制度や、学生との懇談会・懇親会等の機会を活用して教員・学生間の意見交換を積極的に行い、多くの学生が快適な学生生活を送ることができるようにすることが重要な課題である。

V. 委員会

V 委員会

実習調整委員会

1. 現状の説明

目的) 実習の調整にかかわる事項、実習に関わる予算、委員長が依頼または必要とした実習に関わる事項の検討及び調整

メンバー) ○小林貴子、佐々木綾子、吉田久美子、竹村淳子、真継和子、山内栄子、カルデナス暁東、松尾淳子、瓜崎貴雄、看護学部事務室 1 名

期間) 2012 年 4 月～2013 年 3 月

本年度は、学年進行に伴い前年の実習に関する事項の調整に加え、3 年生の各看護学実習にかかる調整、次年度 4 年次生「総合実習」の準備・調整を行うとともに、実習連絡協議会に関する事項、次年度予算、外部施設との調整等を含む事項を中心に 12 回の会議を開催し活動した。

1) 活動計画

- 1) 実習要綱（共通）の作成、各領域実習要項の4月分印刷取り纏め
- 2) 実習連絡協議会（6月6日）の運営
- 3) 領域実習のグループ編成及び実習全体にかかる調整
- 4) 附属病院との実習打合せ及び反省会、等の調整
- 5) 次年度実習計画の調整
- 6) 次年度連絡協議会の企画
- 7) 次年度実習関連予算のとりまとめ
- 8) その他実習全体に関わる調整

2) 活動内容

活動にあたり、実習調整委員を①実習要綱（共通）作成と各領域別要項の取り纏め、②領域別実習のグループ編成と調整、③次年度実習連絡協議会の企画、④次年度予算の4つのワーキンググループを編成し協働して実施した。尚、附属病院看護部との連絡窓口及び会議（附属病院との実習連絡会議とする）の計画・調整は委員長が担当した。

特筆すべき事項

・実習連絡協議会を 2 回開催した。昨年度までは年 1 回の開催であったが、3 年生の領域別実習を含めた実習の評価・報告の場が必要であること、次年度前期の総合実習の打合せの必要から 3 月に第 2 回を開催し参加施設の代表者及び実習指導者（計 57 名）との意見交換を行うことが出来た。

・「実習要綱（共通）」の見直しを行い、特に、本学附属病院感染対策マニュアルの改正に伴って、実習中の針刺し・切創・血液汚染事故における対処を実態に即し修正した。

・附属病院看護部との実習連絡会議を定期的に開催する事で合意しシステム化した。

- ・実習環境の改善を図った。実習先への自転車の配置、連絡手段の整備、附属病院の入館証準備等、必要な物品はレンタルを含め対応した。

2. 点検評価

1) 効果が上がっている事項

- ・附属病院との連絡会議をシステム化した事に、各看護学実習開始時期にあわせた打ち合わせを行う事ができた。連絡協議会を2回開催することにより、外部施設との交流・意見交換が出来た。

- ・実習の実態に合わせ必要な物品及び環境の改善が出来た。携帯電話の準備、附属病院のPHSの借用、病院入館証の借り出しや附属病院内に学生使用室（コート掛け、休憩可能）を整備した。

2) 改善すべき事項

- ・実習に必要な環境を更に改善する必要がある。外部施設の実習中に大学に戻って事務的手続きをする場合を含めた学生支援及び自主学習環境の整備。

3. 将来に向けた発展方策

各施設代表者・指導者との連携を強化し、学習効果の高い臨地実習を計画的に実施していくことにより、学生の看護実践能力の向上を図るとともに施設職員及び教員の協働により相互の能力開発を図る。

4. 今後の課題

- ・学年進行中であり、実習環境の整備を含め卒業時の実習記録の取り扱いについて検討中であるが、卒業までに結論を出し、必要な対応を行う必要がある。

- ・現在、旧カリキュラムと新カリキュラムの学生が同時に進行している。特に留年あるいは復学した学生への履修指導を確実にに行い、必要な実習が履修できる環境を準備する。

- ・遠隔地での実習時の交通費及び滞在費についての対応は検討中であり、実習開始までに結論を出し経済的環境の整備が課題である。

ウェブサイト委員会

1. 現状の説明：

目的：ホームページの作成と充実、情報開示の進展

メンバー：○元村、小林道、松尾、葉山（事務室）

2012年度は看護学部ウェブサイト委員会を、ほぼ一カ月に1回の頻度で、第2月曜日の

3時から委員会を開催している。本年は、10回開催された。現状から言うと、まだ、ホームページが未整備である。

2. 点検評価

1) 効果が上がっている事項：

看護学部ホームページの修正をおこない、さらに充実させた。

特に、新たに研究領域の紹介の稿を設け、教員紹介のページを充実させた。

さらに、実情に合わせて、内規の修正を行った。

2) 改善すべき事項

研究領域の紹介と教員紹介が完了していない。

3. 将来に向けた発展方策

学生生活に関することを追加する。

4. 今後の課題

各領域のホームページをさらに充実させ、学生生活に関することを追加する。

また、ホームページのアップは当面、小林道太郎が行うが、今後どうするか検討が必要である。また、各領域にアップできるようにするか、あるいは事務がアップすることが可能かは、大学ホームページ委員会との検討が必要である。

国際交流推進委員会

1. 現状の説明

メンバー：○小林貴子(中山国際医学医療交流センター運営委員を兼ねる)、

カルデナス暁東、月野木ルミ、西頭知子

2012年度は看護学部紹介スライド英語版の作成、ランチョンセミナーの定期開催、国際交流推進セミナーの実施、及び高槻市の後援を得た国際交流シンポジウムを企画・実施した。また、台北医学大学との国際交流に向けた準備を行った。さらに、国際的な視点をもった学生を育成する本学の国際交流活動を構築する基礎データを得ることを目的に、国内の私立看護系大学を対象にした質問紙調査を行った。

活動内容の詳細は以下の通りである。

1) 会議の開催

毎月1度の定例会議と数回の臨時会議を行った。

2) 医学部留学生の校内見学受け入れ

医学部の留学生に、看護学部の教育（方針、カリキュラム、ディプロマポリシー等）についてのプレゼンテーションを行い、学部内の講義室、実習室等の案内を行った。

- 2012年 7月 ハワイ大学 学生 4名
- 2012年 10月 台北医科大学 学生 4名
- 2013年 1月 マヒドン大学 学生 3名
- 2013年 2月 中国医科大学 学生 5名
- 2013年 3月 韓国カソリック大学 学生 4名

3) ランチョンセミナーの企画・実施

昨年度に引き続き、学生・教員を対象とした国際交流ランチョンセミナーを開催した。本年度の特色は、各領域の担当制とし、各領域の教員の海外経験（留学、看護活動、教育、研究、研修等）を紹介した。その結果、看護学部全体で国際交流活動を推進していくという目的を達成し一定の成果を挙げたといえる。

2012年度ランチョンセミナー（時間：12:25～12:55、場所：講義室1）

月日	テーマ、参加者人数	担当者
5月24日 (木)	「アメリカにおける大学教育の現状と病院の一例紹介（スタンフォード大学、ミルズ大学、メイヨークリニックの紹介）」学生10名、教員14名、計24名	基礎看護学 西園貞子
7月12日 (木)	「ドイツでの生活（在外研究の経験から）」 学生2名、教員9名、計11名	精神看護学 荒木孝治
10月12日 (金)	「私の国際交流」 学生6名、教員5名、計11名	基礎 元村直靖
11月21日 (水)	研究留学生活：アジアオセアニア地域における生活習慣病対策とシドニーでの生活 (国際交流推進セミナーの中で同時開催)	公衆衛生看護学 月野木ルミ

*1月17日開催予定であった、「急性看護学：谷水名美、山内栄子；マグネットホスピタル“MAYO CLINIC”」は、全学生の実習および講義の都合上、委員会判断により急きょ中止とした。

4) 第1回国際交流推進セミナーの開催

日時：11月21日（水）15時～17時

場所：講義室1

内容

- ・研究留学生活「アジアオセアニア地域における生活習慣病対策とシドニーでの生活」
看護学部 月野木ルミ（ランチョンセミナーと合同開催）
- ・学生生活・医療現場「助産師として学び働くということ」
シドニー工科大学 葭原智美

参加者：学生 9 名、教員 3 名、計 12 名

本セミナーの特徴は、開催に際し ESS 所属の看護学部生 2 名に企画段階から積極的に参加してもらい、セミナー当日の運営も学生主体で実施したことである。その結果、内容に関する満足度は高く、参加者は少なかったが、参加者全員が海外留学経験者、留学希望者や海外での就職希望者であった。未だ国際交流に関心があるが不参加の学生も数多くいると考えられるため、来年度以降は参加しやすいセミナーの企画や広報活動を検討したいと考えている。今後も本セミナーを定期的実施して国際交流に関する情報提供や交流の場としていくと共に、学生主体の国際交流活動の運営へ発展していくよう支援していきたい。

5) 第 1 回国際交流シンポジウムの開催

日時：2013 年 2 月 16 日（土）

場所：看護学部講堂

テーマ：『医療分野における異文化理解』

内容

(1) シンポジウム

シンポジスト①青年海外協力隊活動経験者（看護職）

『青年海外協力隊の活動経験から考える、アジアの医療～任地先の医療の課題、活動の場で期待されていたこと、活動中の自身の役割～』

シンポジスト②笹川医学奨学金進修生（大阪大学研修生、看護職）

『来日進修生の立場から考える、中国の医療』

シンポジスト③在日外国人市民

『在日外国人の立場から考える、日本の医療～日本の医療保健福祉の利用者としての意見、期待～』

シンポジスト④大阪医科大学看護学部講師 カルデナス暁東

『看護学教育における異文化理解のあり方』

(2) ディスカッション、質疑応答

参加者：37 名（高槻市民、国際交流活動経験者、看護学部学生、看護学部職員等）

今回のテーマは、グローバル化が進む中、臨床で外国人患者の看護を行うことが日常的になりつつあることや、国内外において外国人スタッフと（あるいは自分自身が外国人と呼ばれる環境において）仕事をする機会が増えてくることを鑑み、決定した。

内容は、シンポジストによる講演とディスカッションで構成し、シンポジストには、日本で生活されている在日外国人市民、海外での活動経験を持つ看護職者、日本で研修している外国人看護師、本学で「異文化看護入門」の科目を担当するカルデナス講師を選定した。広報活動では、高槻市広報への掲載、阪急電車コミュニティボードへの掲示を行い、看護学部学生にはユニバーサルパスポートを通してアナウンスを行った。当日の参加者は約 37 名（内看護学部学生 4 名）で、高槻市広報で情報を知った方が約 4 割で

あった。参加者からは、概ね好評を得られた。

国際交流活動の経験者や現在も活動されている方々の参加もあり、今後も情報交換を続けていく予定である。今後、継続して市民の方々に興味を持っていただけるような活動にしていくとともに、本学学生の参加を促していくことが課題である。

6) 国際交流に関する研究活動

他大学の国際交流活動の現状や留学生支援システム等を把握し、本学の独自性のある国際交流活動を企画するうえでの参考資料とすることを目的とした調査研究の計画を立案し、2012年度の看護学部共同研究費にて、実施した。

研究テーマは「日本私立看護系大学の看護学教育における国際交流活動に関する実態調査」であった。2012年6月末に日本私立看護系大学協会のホームページに掲載されている加盟校を本研究の対象校とした。調査期間は、2012年8月7日～8月31日とした。調査方法は郵送による自記式質問紙法であった。委員会メンバーが先行文献を参考に質問紙を作成した。

結果、回収率は32.6%であった。8割弱の大学は公式な国際交流を担当する組織を設置しており、「学生の海外留学・研修」「教員の海外留学・研修」「留学生の受け入れ」等国際交流活動が実施されている。国際交流活動を実施する際に、《人的資源の限界》《資金の乏しさ》《言葉の問題》《カリキュラム上の制限》《不十分な体制づくり》《環境的限界》といった課題が存在していることが明らかになった。

今後の打開策として①国際的視点をもって対象理解に関する教育ができる教員と外国語能力のある教職員の確保；②教職員の外国語の学習環境づくり；③全教職員の国際交流への意識向上、スキル向上のためのFDの実施および各種の研修会への参加の支援；④近距離の同じ伝統文化をもつアジア諸国の大学や在日外国人との交流も視野に入れたプログラムの実施等が考えられた。次年度は、看護学部の全在生を対象に、学生の国際交流に関する意識調査を行う。学生の国際交流に関する意識と今年度の研究を踏まえて、より高い教育効果が得られる国際交流活動を企画・運営する。

7) 海外の大学との大学間交流協定に向けての準備

台北医学大学看護学部（医学部は本学医学部と学部間協定を結んでいる）との交流推進に向けて活動中である。2013年2月24日～2月27日に訪台し、台北医学大学看護学部学部長を含む10名の教員と、交流の具体的内容について意見交換を行い、相互交流について概ね確認が得られた。来年度、先方の学生10名程度を受け入れる予定である。今後、学部間交流協定の締結に向けて、活動を継続していく。

2. 点検評価

1) 効果が上がっている事項

①本年度は2つの新規活動（国際交流推進セミナー、国際交流シンポジウム）が開始し、

本学部独自の国際交流推進活動が発展してきたと考える。参加者数は未だ少ないが、学生や地域住民や他大学学生・教員など参加者の輪は拡大してきており、本学の国際交流活動は徐々に浸透してきているといえる。今後も継続し、学生や地域の方々のニーズに合った活動を展開していく。

- ②台北医学大学看護学部との来年度からの交流実現に向けて、具体的な話し合いを持つことができた。今後、学部間交流協定の締結に向けて、話し合いを進めていく。

2) 改善すべき事項

国際交流推進セミナー、国際交流シンポジウム共に、学生の参加を促していくことが課題である。学生のニーズに応じた内容を検討するとともに、参加しやすい日程の調整や広報活動を検討していく。

3. 将来に向けた発展方策

国際交流推進セミナーおよび国際交流シンポジウムを定期的に行い、活動を定着させていく。また、国際交流推進セミナーに関しては、将来的には学生主体の国際交流活動として発展していけるよう学生を巻き込んだ活動を行っていく。

海外の大学との交流協定に関しては、台北医学大学との協定締結を実現させるべく準備を進めていくと同時に、今後も継続してその他の大学との交流に向けての情報収集を行っていく。

4. 今後の課題

引き続き、中山国際医学医療センターとの連携を密に行いながら、看護学部国際交流活動推進のための環境を整える。本年度活動開始した国際交流推進セミナーや国際交流シンポジウムについては来年度以降も継続し、参加しやすい日程の配慮や広報活動を検討していく。

看護研究雑誌編集委員会

1. 現状の説明

目的

おもに大阪医科大学看護学部の教員がその研究業績を発表する雑誌である「大阪医科大学看護研究雑誌」の論文受稿・査読、編集、出版等に関わる業務を行う。

メンバー

泊祐子、○矢野貴人、草野恵美子、西菌貞子

2012年度の活動内容

- ・委員会：計9回の委員会を開催し、下記活動についての審議・調整等を行った。
- ・編集委員会としてのメールアドレスの取得・運用：昨年度までは委員長の個人アドレスを論文の受稿等に使用していたが、委員会業務の円滑化のために、全委員がアクセス可能なアドレスを取得し、第3巻の編集業務に用いた。
- ・投稿規定・執筆要領の変更・修正：雑誌の編集業務等を改善するため、投稿規定の変更（提出部数、提出媒体等）を行った。論文投稿時におけるスタイル統一を図るために、執筆要領に本文・図表のスタイル等につきより具体的に明記した。
- ・「大阪医科大学看護研究雑誌」第3巻の発行：総説1編、原著5編、研究報告10編、実践報告3編、資料5編の計24編の論文を掲載した。

2. 点検評価

1) 効果が上がっている事項

「大阪医科大学看護研究雑誌」第3巻の掲載論文数が24編と、第2巻の12編から倍増した。また、委員会の全委員がアクセスできるメールアドレスの導入は、各委員の編集担当論文の査読・編集業務に大いに役立った。投稿論文のスタイルも徐々に統一され、編集委員会によるグラ刷り原稿の校正作業が軽減されつつある。

2) 改善すべき事項

題目登録および論文投稿には期限が設けられているが、投稿者全員に期限を守ってもらうことが困難な状況が続いている。投稿者の意思を尊重することと編集・印刷に要する時間の兼ね合いで、論文ごとに編集委員の判断にゆだねられているのが現状であるが、今後改善すべき点であろう。また、査読者により「査読の厳しさ」の差が大きいという問題点も委員会で提起され、この問題への対処も必要である。

3. 将来に向けた発展方策

第3巻には本学部以外の研究者が筆頭著者の論文も掲載された。将来的には、著者や査読者をより広く学部外にも求めることが重要であろう。

4. 今後の課題

前述の査読者による差異を少しでも軽減するため、ほとんどコメントがないまま「掲載可」とされた論文については、担当編集者がその論文を精読しコメントを補足する等の対策を講じる必要がある。また、論文査読に関するFD等も委員会として提案したい。

備品管理委員会

1. 現状の説明

目的

備品（授業に関する物品）の維持および管理を行う。

メンバー

○道重文子、川北敬美、山地亜希、原明子

2012年度の活動内容

計7回の委員会を開催し、下記活動についての審議・調整等を行った。また、適宜実習室での備品管理作業を行った。

- ・委員会内規を作成し、本委員会の目的や所掌事項を確認した。
- ・物品の授業以外での使用に関する取り決めについて見直しを行い、看護学部教員に関しては申請書類なしで使用できるよう簡略化した。学部外者に関しては、使用手順を図示し手続きを明確にした。
- ・備品の定数および管理状況を確認し、取り扱い説明書の整理・保管作業を行った。
- ・実習室改修工事に伴い、セルフトレーニングルーム・実習室・壁面収納庫内備品の移動・整理および不要物品を廃棄した。
- ・各領域の次年度予算を取りまとめ、重複して要求のあった物品を「共通物品」として定め、購入の一元化をはかった。
- ・8月、3月に各実習室のリネン類クリーニングを行った。
- ・全授業終了後に倉庫および壁面収納庫備品定数チェックを行い、備品の定数および管理状況を確認した。最新の状況を共有フォルダにて管理している。
- ・学生の授業以外での実習室1・2の使用状況を集計し、自主練習の状況を把握した。

2. 点検評価

1) 効果が上がっている事項

- ・学内教員の授業以外での物品使用の手続き簡略化を行い、負担の軽減につながった。学部外者の使用手順も、図示することで手続き方法が明確になった。
- ・各備品の取り扱い説明書のコピーを原本とともにファイリングし、看護学部事務室へ保管したことで、取り扱い説明書の紛失防止になり、今後の物品管理・修理依頼等がしやすくなった。
- ・予算の運用に関して、各領域から重複して要求のあった物品を「共通物品」として、同一製品・規格で発注することにより、安価に購入し無駄なく使用できる。

2) 改善すべき事項

- ・壁面収納庫に保管されている物品について、2つの棚を一括して表示しているため、細分化し収納位置や配置をわかりやすく表示する必要がある。また、実習室改修に伴い、移動・再配置した物品に関して全教員が配置場所を共有できるように一覧を作成する必要がある。

- ・倉庫の物品管理に関しても、高額機器モデルが多いため、配置および管理の徹底を行う必要がある。

3. 将来に向けた発展方策

- ・来年度、実習室内の収納棚設置の完了に伴い、収納スペースが確定するため、授業時の物品準備の利便性なども考慮し各領域ごとの収納スペースを検討していく。
- ・共通フォルダ内に物品修理に関するフォルダを作成し、物品修理に関する履歴を残しておく。(修理が頻回に出されているものは、買い替え検討が必要になってくる)

4. 今後の課題

- ・今年度の実習室改修工事に伴って、暫定的に収納されている物品の把握、および、来年度実習室内に収納棚が設置されることに伴い、物品の再配置が必要である。
- ・物品の再配置後、収納場所を教員間で共有する必要がある。

就職支援委員会

1. 現状の説明

目的) 大阪医科大学看護学部の学生の就職や進路の支援

期間) 2012年4月～2013年3月

メンバー) 田中克子、○土手友太郎、竹村淳子、谷水名美、原明子

本年度から新規に当委員会が発足し、キャリアサポートルームが学部棟1階に設置された。同室内に、全国から配送された保健福祉医療施設の就職案内冊子を保管している。2012年5月30日、3年生を対象に就職支援委員会への要望のアンケートを実施した。2012年7月4日、3および2年生を対象に附属病院説明会・個別相談および同アンケート結果の報告、2013年3月6日、全学年を対象に附属病院説明会・個別相談および(株)マイナビによる看護学生の進路決定講座、3月13日、3年生を対象に(株)マイナビによる履歴書・作文講座・面接講座・マナー講座を開催した。2年後の卒業生のために、17施設から就職説明のため来校頂き、応接した。

2. 点検評価

1) 効果が上がっている事項

就職支援のためのアンケート調査から、学生の具体的な意向や要望を収集できた。配送はなかったが学生からの希望があった施設の就職情報も収集した。本学附属病院奨学金受給者が内定した。就職説明担当者から現場の生の声を拝聴し実情を推察できた。看護職者による在学生への就職への啓発や業者による就職試験対策・指導(後述)のための人件費

が今年度予算として計上された。

2) 改善すべき事項

就職担当者や合同説明会など施設側からの説明は一方的である。従って今後は、施設内部の看護職者としての本音に関する情報を得たいと考えている。また就職についての情報収集や検討は直近の学業に追われ、時間や人間交流の制約を受けざるを得ないのが現状である。よって、学生が独力で行うか、あるいは学生と担当ゼミ教員という狭い人間関係に相談の多くを依存しがちである。従って就職支援委員会および委員の存在の影が薄く、一層の有効活用の方策が望ましい。

3. 将来に向けた発展方策

より良い就職に向けて、社会人・医療人としての心構えを啓発する。そのため全在生を対象に講演を依頼する。講師として、今年度は、年代の近い現役看護職者を、また来年度以降は卒業生などに、「私の就職体験談」を講演してもらうことも検討する。さらに業者による就職試験対策・指導の依頼を検討する。医療系以外の大学の一般総合学部では、就職支援室が就職支援活動の中心的役割を担い、学生と支援室の二人三脚で就職に向かい協働している場合が多い。一方、本学を含む看護系の学校では就職支援委員会は、単に既成の就職情報の収集と保管の役割が多く、就職先は各学生の判断に任せることが多い。今後は、内部情報や人的資源を徐々に充実させて、各学生に最適な就職先の決定のためのブレイン的役割を担いたいと考えている。2013年の学部改修工事により、キャリアサポートルームが事務室内の入り口付近に移転する予定である。同所は前所に比し、動線的に学生がアクセスしやすい上、PC2台設置でネット使用可となったため、就職関連の電子情報の収集、保管、検索に活用できる。

4. 今後の課題

就職説明に来校される担当者の方々の意向からの本学出身の看護職者の需要はとても高いと感じている。しかし、新人看護職の離職率をどう減少させるかが、どの施設でも重大な課題となっているようである。一方、学生は就職先への自宅通勤志向が以前より強い傾向があるとの意見も多い。これは一般的に女性の場合、就職後の家族と仕事の両立が男性に比し難しい現状も影響していることが示唆される。従って職種としての興味や生きがいだけでなく、近未来的にほぼ必然となる子育てや介護などの支援状況なども選択条件として思案しておくことが、定着率の向上につながることを希望される。

国家試験対策委員会

1. 現状の説明

1) 目的

本委員会は、大阪医科大学看護学部（以下、「本学部」という）の保健師・助産師・看護師国家試験受験者をサポートすることを目的としている。

2) メンバー

○道重文子、矢野貴人（2012年10月～）、草野恵美子（2012年10月～）、真継和子、西頭知子

3) 活動内容

委員会は、5月15日、7月17日、9月20日、10月10日、11月14日、1月23日、3月6日、3月27日の計8回開催した。

(1) 看護学部国家試験対策委員会内規の作成

4月の教授会で審議後、承認された。

(2) 武田看護教育研究所（T I N）との共同指導

2年生と3年生を対象に2012年4月11日にT I N専門基礎力確認テストを実施し、T I N講師による解説講座と再試験を実施した。

3年生に対しては、2013年1月9日に、人体・疾病・状況設定のT I N模試を実施した。2013年3月8日に東京アカデミーの模試（3年生）を実施し、2013年4月10日にT I N講師による解説講座を実施予定である。

(3) 国家試験対策勉強会の開催

前期の模試の結果および学習の取り組み状況から、3年生に対する学習強化が必要と考え、後期「看護実践と理論の統合」科目が実施される週の水曜日午前中に自由参加で開催した。開催日と参加者は下記の表のとおりである。模試に関しては当日参加できなかった学生には、後日試験問題を配布した。

日 時	担当教員	参加者	日 時	担当教員	参加者
9月26日(水)1・2限	西頭	36名	1月9日(水)1・2限	草野 (模試)	72名
10月31日(水)1・2限	真継	7名	2月20日(水)1・2限	草野 (保健師模試)	84名
12月26日(水)1・2限	道重	26名	2月27日(水)1・2限	草野	3名

(4) 次年度に向けての計画立案

次年度は、1期生の受験を控えていることから、模擬試験の日程と内容、勉強会の進め方、成績不良学生に対する指導対策について等を検討した。

2. 点検評価

1) 効果が上がっている事項

国家試験対策として模試を入れたことから、学生は現在の自分のレベルを知ることができ、チューターとの面接時に学習計画を立案するようになった。

2) 改善すべき事項

3年生後期の自由時間に勉強会を企画したが、自由参加にしたため、参加者が少なかった。学生が主体的に取り組める対策が必要である。

3. 将来に向けた発展方策

学生が主体的に国家試験対策を検討していくように、学生らがつくる国家試験対策委員会の設立と運営をサポートする。

4. 今後の課題

TNIとの国試対策共同指導は、指導方針及び予算の関係から本年度限りとした。

4年生に対しては、3月に実施した全国模試の結果を踏まえ、本学学生の特徴を把握し、学習達成度別の対策を検討することである。

看護学部年報編集委員会

1. 現状の説明

メンバー：○泊祐子、林優子、小林道太郎、月野木ルミ、黒川博史

本委員会は、看護学部年報の編集を行うことを目的として、2012年度から設置された委員会である。2011年度の年報編集を早期に行うため、初回の委員会を2012年度に入る前の3月15日に開催し、年報作成の項目及び内容の検討を行うとともに、学部内各センター、委員会、領域への原稿依頼の内容を決めた。2012年度委員会は6回開催し、その他に数回年報原稿編集の事務作業を行った。

年報は、基本的には電子媒体(CD)での発行とし、冊子媒体は10冊とした。CD及び冊子表紙を看護学部写真とした。編集作業は本委員会委員及び看護学部事務室で行い、印刷は知人社に依頼した。年報は2013年1月に完成した。冊子は、学長、学部長、附属病院看護部長、学務部長及び看護実践研究センターに配布し、1冊は年報編集委員会として委員長が保管した。CDは看護学部教員に1枚ずつ配布した。

2012年度年報については、原稿締め切りを2月末として、項目、フォーム等マニュアルを作成、原稿形式が徹底できるように学部内に周知し、提出先をサーバーの共有フォルダとした。

2. 点検評価

1) 効果が上がっている事項

年報をまとめることにより、自己点検評価の効果があつた。この記録により大学基準協会に提出する自己点検・評価の資料とすることができた。また学部内教員同士の、教育・

研究・社会活動状況を共有することができた。

2) 改善すべき事項

本年度は初年度であったため、看護実践センター等はすでにセンターの年報として記録作成にかかっていた。フォームは規定したが紙面量は規定しなかったため、量的バランスがとれているとは限らなかった。また、見出しのフォントや形式、西暦か元号かなどの点が揃っていなかったため編集作業に手間取り、発行に約10か月を要した。

2012年度年報のための報告書提出については、作成マニュアルを提示したため、編集作業が短縮されると思われる。

3. 将来に向けた発展方策

年報が自己点検・評価につながる資料として利用されるほか、教員同士の活動が一目瞭然となり、共同研究等のきっかけとなる可能性がある。また、情報共有自体が互いの刺激となり、FDとなりうる。看護学部の活動が理解しやすく他委員会活動の資料として活用されることを狙う。

4. 今後の課題

編集作業の省エネ化をどのようにすればスムーズに行えるのか、早い時期の完成ができるようにすることが課題である。

本委員会は本年度できた委員会であり、まだ規程等が定まっていないので、その作成が必要と思われる。

VI. 教育活動

VI 教育活動

基礎科目（担当：小林道太郎）

1. 現状の説明

- ・国際言語文化：1年生前期選択科目（15回）。受講者は34名であった。主に入門ドイツ語の学習と、国際社会における言語と文化の諸問題に関する講義を行った。毎授業時のドイツ語小テストと、言語・文化に関する期末レポートによって評価を行った。
- ・くらしの中の倫理と法律：1年生前期選択科目（8回）。これまで非常勤講師であったが、2012年度より小林道の担当となった。受講者は17名であった。家族、労働など身近な法の基礎知識と、功利主義等の倫理学説について入門講義を行った。毎授業時の提出物と期末レポートによって評価を行った。
- ・哲学：1年生後期選択科目（8回）。受講者は11名であった。哲学の基本を知り、それによって自分で考える態度を養うということを目的として、哲学の諸問題に関する講義を行った。出席と期末レポートによって評価を行った。

2. 点検評価

1) 効果が上がっている事項

国際言語文化、くらしの中の倫理と法律、哲学では、期末レポートのテーマを各自設定させており、学生がそれぞれ自分の関心を深める機会となっている。

くらしの中の倫理と法律では、毎回授業の終わりに、学生に感想・意見等を書かせて提出させている。これによって、考えながら講義を聞くこと、それらに対する自分の考えを述べることを促している。

哲学では、毎回授業の終わりに、何人かの学生に質問や意見等を言ってもらい、わかりづらかった部分についての補足や関連する議論等を行った。

2) 改善すべき事項

哲学で授業の終わりに質問・意見と議論の時間を設けたことは効果的であると考えているが、まだ不慣れな部分があるため、さらに活発な議論ができるよう工夫する必要がある。

3. 将来に向けた発展方策

くらしの中の倫理と法律は、担当初年度であったため、今年度の学生の反応や関心を踏まえながら、次年度授業内容を調整する。

国際言語文化の中の、文化に関する講義は、今後さらに内容を広げることを目指す。

4. 今後の課題

他の科目との無駄な重複をなくすとともに、上記担当科目で指導することが望ましい事項を確認するため、他の教員とも授業内容の検討・調整を行う。

専門基礎科目（担当：瀧井道明）

1. 現状の説明

必修科目として、第1学年後期「フィジカルエグザミネーション」、第2学年前期「病気の診断」、第2学年後期「病気の治療」の各15コマを担当している。

「フィジカルエグザミネーション」では診察総論、循環器、呼吸器、消化器、神経、小児科の各領域の講義を計8コマ行っている。その後、演習としては、脈拍・血圧測定、モデル人形フィジコでの心音聴取、モデル人形ラングでの呼吸音聴取、神経診察、腹部診察の実技指導を行っている。評価方法は、脈拍・血圧測定、呼吸音聴取の実技試験と、講義内容は筆記試験を行い、総合評価を行っている。「病気の診断」では診断学を中心とした講義を行っている。領域としては、内科学各領域のほか、耳鼻咽喉科、眼科、整形外科、皮膚科、産婦人科、小児科の広範囲である。評価方法は筆記試験である。「病気の治療」では治療学を中心とした講義を行っている。領域としては、内科の代表的疾患の治療概論の他に、放射線科、リハビリテーション、消化器外科、麻酔科の範囲も含み広範囲である。評価方法は筆記試験である。

2. 点検評価

1) 効果が上がっている事項

昨年度と異なり本年度からは瀧井が医学部兼任教員との連絡・調整を行なった。瀧井は他科の講義にも参加して内容把握した上で試験問題の作成を行った。3科目ともに専任教員がカリキュラム、内容を総括している点では教育的効果が上がっていると思われる。また、本年度の演習への取り組みや実技試験の評価は昨年度と比較すると良好であった。

2) 改善すべき事項

瀧井の担当講義ではスライドに基づくが、学生の反応としては内容がやや細かく詳しくすぎるようである。今後は内容としてもう少し的を絞ったプリントにすべきかと考えている。診療科教室からの兼任教員の方々はスライドのみの講義もあり、できるだけ講義に沿ったプリントを準備してもらおう方が良いと思う。

3. 将来に向けた発展方策

各疾患に診断（前期）と治療（後期）が分かれた講義カリキュラムであるという問題点があった。来年度は前後期を通じて、各領域の診断・治療を連続して講義してもらうカリキュラムの予定である。フィジカルエグザミネーション演習での配布資料は昨年度

のものを少々改訂した。腹部診察の項目などは内容を追加した、来年度は脈拍・血圧測定項目なども記載内容を追加して資料を充実させていきたい。

4. 今後の課題

講義の約半分程度は医学部診療科からの兼任教員に依頼しているのが現状です。臨床系の医系専任教員を1名増員してもらえないかと希望する。医学生との比較においても、看護学生にはどのくらいのレベルまで教授すべきなのかは今後の長期的な課題である。

専門基礎科目（担当：土手友太郎）

1. 現状の説明

学生は教科書に基づく授業を要望しているため、すべての授業を同書に準じた。さらに紙面をスキャンし、パワーポイントを用い要所にアニメーションを挿入した。スライドは計50枚程度を提示した。さらに資料としてスライドの中から特に重要な計9～18枚をA4で1～2枚をPDF化しユニバーサル・パスポート上にアップし、毎回配布した。資料の重要箇所は空欄にし、授業中に学生に正解を埋めさせた。また授業への集中力を落とさないよう、毎回授業終了20分前から、当該テーマのレポートを作成させ、授業時間内に提出させている。以下、担当各科について略記する。

- ・1年前期（選択科目）くらしと社会：2年で必須となる公衆衛生学の入門的教科書を使用した。追加資料としてマスコミやスポーツのニュースなど身近な情報源を参照し、社会医学の全般的で基本的な知識や考え方のみを概説した。
- ・1年前期（選択科目）健康科学概論（科目担当者：林優子、土手は講義（医療がめざすクオリティ・オブ・ライフ）1コマを担当）
- ・1年後期（必須科目）統計学：授業の冒頭では、前回の授業を簡潔に振り返り、理解度を確認しながら、次の内容に導入した。また数式などの説明は最小限度とし、統計学が必要である理由や学習する意味などの解説を中心とした。講義中、授業のテーマとなる情報を学生に記入させ、全員のデータに基づき親近感のある統計指標を検討させた。
- ・1年後期（必須科目）保健医療福祉概論：学習内容を臨床現場の視点から捉え、それらが医療現場への理解の架け橋となることを目的とした。そのため専門的用語の理解が必要な場合があったが、記憶より理解を目標として解説した。
- ・1年後期（必須科目）フィジカルエグザミネーション（科目担当者：瀧井道明、土手は神経系診察の演習担当）講義は瀧井道明と医学部の専門臨床医が担当した。演習は同臨床医が導入し、主たる指導は看護学部の基礎看護学教員および医系専門基礎教員が実施した。実技試験は血圧測定と胸部聴診、筆記試験は科目担当者が客観試験問題を作成した。
- ・2年前期（必須科目）公衆衛生・疫学：同分野の膨大な情報量から、満遍なく要点のみ抜

粹し、重要かつ基本的事項に限定して講義した。これは 1 年前期の選択科目であったくらしと社会・環境の授業内容の理解を深め、さらに 2 年後の国試対策の際に、全体像とポイントの把握を容易にさせる目的がある。

2. 点検評価

1) 効果が上がっている事項

授業時間内にレポートを提出するため、授業中の集中力が高まった。毎授業時に実施したため科目期間内において形式的に知識が蓄積された。要約は字数制限を設け、多くの授業内容から重要ポイントを選別し優先順位を考え簡潔に要点をまとめる力をつけさせた。

2) 改善すべき事項

講義については毎回の提出物は直ちに段階的評価をつけ、可能な限りコメントを添付する。しかし、それらは全講義終了後に一括返却するため、タイムリーな対応にはなっていない。

3. 将来に向けた発展方策

毎回のレポート返却は手間であるため、前回の授業レポートの評価後、次回の授業の初めに、注意すべきことを指摘する。レポート評価で授業内容の理解が全体的に不十分と判断された場合や欠席が多い場合、試験期間に筆記試験による再評価を実施し、同授業範囲の勉強の機会を与える。

4. 今後の課題

教科書を出来るだけ活用したが内容的に不十分な項目に関しては他書などの引用が必要になる。しかし教科書以外の多くの配布資料は学生にとって管理が容易でなく、学習の意欲や効率が低下する。教科書と配布資料の有効な両立が課題である。

専門基礎科目（担当：元村直靖）

1. 現状の説明

現在担当している本学における授業科目は、「心理学」、「健康科学概論」、「大阪を学ぶ」と「医療倫理学」である。

「心理学」は 1 年生前期必修科目（15 回）。受講者は 88 名であった。「健康科学概論」はオムニバスで、1 時間のみの講義で、ストレスと健康の講義を行った。

「大阪を学ぶ」は 1 年生後期選択科目（8 回）であった。

「医療倫理学」は 3 年生前期必修科目（8 回）であった。

2. 点検評価

1) 効果が上がっている事項

面白い授業を心掛けているせいか学生は、いずれの授業も興味深く聞いている。授業は、原則、パワーポイントを用い、ハンドアウトも渡し、わかりやすく説明している。さらに、毎週小テストをして学生の動機づけを向上させる努力をしている。

2) 改善すべき事項

広汎な知識を必要とするため、予習と復習をすることが好ましい。そのためテキストも指定しているが、分量の調節が必要である。受講人数が多すぎるので、目が届きにくい。

3. 将来に向けた発展方策

「大阪を学ぶ」はユニークな授業であるが、実際に体験学習を行うために、将来的には演習とし、野外活動や遠足、青空教室なども検討してみたい。受講人数を減らし、より充実した授業を行う可能性を検討する。

4. 今後の課題

心理学などで得られた知識を臨床に応用できるような方策が今後の課題である。また、もう少し板書を多くし、筆記してもらうのもよいかも考えている。

本年後期から、リスクマネジメントの講義が始まるが、受講生とすると、もっと下の学年で受講を望むのではないだろうか。

専門基礎科目（担当：矢野貴人）

1. 現状の説明

- ・「化学」（講義、30 時間、第 1 学年、選択）：高校での化学習得が不十分な学生を対象に、化学の領域の中でも、特に人体理解や看護学学習に不可欠な事項について講義を行う。
- ・「情報リテラシー」（演習、30 時間、第 1 学年、必須）：学生みずからテーマを選び、それに関して情報収集し、レポートを作成し、プレゼンテーションを行う。それにより、大学入学後の早い時期に、学生全員が基本的なソフトウェアの操作を習得する。
- ・「からだと栄養」（講義、30 時間、第 1 学年、必須）：さまざまな生体構成成分の体内での役割や代謝について、特に生理現象や病態との関わりを重視した講義を行う。
- ・「からだとくすりの働き」（講義、30 時間、第 2 学年、必須）の各論を担当：疾患の病態生理と薬物の作用機序を中心に、おもな薬物の作用・副作用などについて講義を行う。

2. 点検評価

1) 効果が上がっている事項

昨年度に引き続き、教科書を指定している科目でも、毎時間配布するプリントにしたがって講義を進めている。また、学期の終盤では、学生の自主学習のためのポイント整理として、全講義内容の中で重要な点を「学習項目」として列記したものを配布している。

演習においては、全学生がプレゼンテーションを行えるよう十分な時間数を確保した。

2) 改善すべき事項

従来からの課題であるが、依然として講義内容が全体的に多すぎると考えられる。さらに内容の絞り込みが必要である。また、各講義時間内での論点整理をより効果的に行い、学生による講義内容の咀嚼を容易にするための工夫が必要であろう。

演習においては、学生が選んだテーマについてみずから進んでより深く探求するための動機づけが必要と考える。

3. 将来に向けた発展方策

担当する講義はいずれも化学・化学物質に関連した内容である。「化学が苦手」という学生が多く、そういった学生に対する動機づけ、理解を促すための工夫がさらに必要である。実例や実験的な要素を取り入れることが有用であろうが、大教室、教員 1 名という条件で効果的に行うためには、独自の教材の開発を試みることも不可欠であろう。

4. 今後の課題

今年度、看護専門領域の演習の一つを見学させていただいた。1 コマあたりで学生に習得させる内容が量的にも絞り込まれており参考になった。学部開設からこれまでの 3 年間で漸次的に講義内容の見直しを行ってきたが、客観的に講義内容を評価・分析し、根本的な変更を行うことを今後の課題としたい。

専門科目：基礎看護学領域

1. 現状の説明

2012 年度は、教授 1 名、講師 2 名、助教 2 名の 5 名で、基盤となる基礎看護の講義、演習、実習に取り組んだ。

1 年生科目の「看護学概論」では、看護の基本概念である「人間」「環境」「健康」「看護」の関係性が理解できるように、看護理論発展の基本となったナイチンゲールの「看護覚書」、ヘンダーソンの「看護の基本となるもの」を使用し、看護援助内容について考えさせた。

「キャリアマネジメント」では、社会人基礎力を養うため、マナーに関しての DVD を視聴し、社会におけるマナーについて考えるとともに、主体性を高めるため「働くとは」

「学ぶとは」等、グループディスカッションや発表から自分を知る機会を多く設けた。

「基礎看護学実習Ⅰ」では、医療の場の実際を理解するため、後期毎週木曜日の午前中に大阪医科大学附属病院の病棟をはじめ、外来、診療・検査部門等において見学実習を行った。

「日常生活援助技術」では、療養者の日常生活を支援するための基礎的な看護の知識・技術の習得を目的として講義演習を行った。科学的根拠にもとづいた実践ができるために、測定器などを用いて定量的な評価を行うことで、それぞれの基礎技術の意味、根拠の理解を深めた。

2年生科目の「看護アセスメント」では、大腿骨転子部骨折の事例を用い、アセスメント、看護診断、計画、実施、評価の5段階について講義・演習後、各グループに立案した計画の1場面を発表させ、他のグループ発表と比較することにより具体的な計画を立案することや評価の必要性の理解を深めることができた。

「治療過程に伴う援助技術」では、検査や治療過程における看護師の役割や内容を知るとともに、形態機能学の視点に基づいた、看護技術の習得を目指して実施した。また、従来の看護技術に加え、臨床での新しい看護の技術を体験できるように、演習に組み込んだ。

「基礎看護学実習Ⅱ」では、9月末と2月末の各1週間、前半後半2グループに分け大阪医科大学附属病院の8病棟において1人の患者を受け持ち、看護過程の展開を行う実習をした。本年度は、基礎看護学領域5名の教員で、1名の教員が1～2病棟を担当し、臨床実習指導者と連携をとりながら指導をおこなった。

2. 点検評価

1) 効果が上がっている事項

概論の講義、看護技術演習、臨地実習が発展的にまた同時期に進めることにより、理論と実践のつながりについての理解を深めることができている。

「日常生活援助」「治療過程に伴う援助技術」では、科学的根拠を知るための定量的評価や画像を用いて形態機能から理解することで、講義内容と演習を結び付けて考える能力が身につけてきている。

2) 改善すべき事項

基礎看護学実習Ⅰにおいては、療養環境調査後の評価・考察の視点を、実習より帰学時に指導し、理解を深めるようにしていく。実習への基本的態度についてさらに強化して指導を行っていく。

基礎看護学実習Ⅱにおいては、看護ケアの実践時、学内で体験していないにもかかわらず、実際に患者に行う（指導の元で）ために、事前の主体的練習が不足していたため、事前練習の必要性と技術練習を指導強化していく。

3. 将来に向けた発展方策

講義・演習・実習は連動しているため、学内での知識獲得や思考力を高めるために実習での学びを活用する。また、臨床指導者の協力を得ながら、基礎技術の習得のために学内演習を共同で指導し、臨床と学内の学びを結びつける力を身につけられる方法を検討する。

4. 今後の課題

看護アセスメント能力を高めるために、「気づく力」を養うための方策を検討する。

専門科目：母性看護学・助産学領域

1. 現状の説明

1) 「母性看護学概論」

本科目は、性と生殖の概念、母性看護の対象、対象を支援する社会の仕組み、母性看護の展開について学び、母性看護学の現代社会における役割と課題について考えることを目的とした。母性看護学の概念理解を促進するために、次回授業のキーワード等をテーマに事前課題を課し、予め思考するよう促した。その上で、対話型の講義を中心に、学生のグループディスカッションなどを取り入れ、参加型の講義を展開した。

2) 「母性看護学援助論」

本科目は、特に、妊娠期、分娩期、産褥期、新生児期における母子とその家族に生じる生理的、心理的、社会的変化について理解し、周産期の母子とその家族の健康な生活を援助できる看護実践能力の基礎を養うことを目的とした。基礎的知識の教授を基本に、現在の周産期医療における最新知見の紹介を行った。また、基本的知識の獲得を促進するために、各回授業に関する小試験を実施した。さらに、学生の希望に応え補講を実施した。

3) 「セクシュアリティと看護」

本科目は、人間の性と生殖についての理解と、セクシュアリティに関する洞察を深め、性の健康と性教育について広い視野から考えることができ、あらゆる人々のセクシュアリティへの援助の必要性と支援の方法について学ぶことを目的とした。講義によってライフステージごとのセクシュアリティの発達について理解し、事例を参照することで看護におけるセクシュアリティの重要性に気づくことができていた。また、思春期のセクシュアリティに関する自己決定についてグループディスカッションを行うことによって、セクシュアリティの看護について具体的に考えることができた。

2. 点検評価

1) 効果が上がっている事項

学生による授業評価では、3科目とも概ね良い評価が得られていた。対話型講義は、学生の思考を促すとともに発言する能力を開発することに寄与できたと考える。グループディ

スカッションは、深く思考することに加え、多様な意見を理解することにつながったと考
える。学生の希望に応え、補講を行ったことは、基本的知識の定着に効果があった。

2) 改善すべき事項

「母性看護学概論」では、抽象的な概念は理解していたが、母子保健施策、法律、統計
等の基本事項の習得が不十分であった。「母性看護学援助方法」では、本年度は補講を実施
したが、知識の習得のためには、補講によらず自己学習によって知識習得を促すための課
題を課すことも検討する。

3. 将来に向けた発展方策

母性看護学の科目間の連携を強め、効率的で効果的な授業展開方法を検討する。特に、「母
性看護学援助方法」と「母性看護学援助方法論」では、共通の模擬事例を活用し、実際の
看護活動を具体的にイメージできるよう構成し、「母性看護学実習」へつながる教授方法を
模索している。

4. 今後の課題

母性看護学の科目のみならず、関連科目で獲得した知識を統合できる教授方法の検討。

専門科目：小児看護学領域

1. 現状の説明

2012年度は、前期科目に「小児看護学概論（2年生）」、「小児看護学援助方法（3年生）」、
「家族看護学（3年生）」、後期科目に「小児看護学援助論（2年生）」、「小児看護学実習（3
年生）」を開講した。現在教員は、教授・准教授・助教の3名である。

「小児看護学概論」では、学生の興味関心が湧くことを狙い、授業内容の教授順を小児
とは、小児を取り巻く社会の変貌から小児の成長と発達、最後に小児看護の目的、役割機
能に変更した。昨年度より多くの視聴覚教材（DVDや写真）を用いて、子どもの運動機能や
成長発達の実際をわかりやすく工夫した。また昨年度同様、子どもへの関心を深める目的
で、社会で生活している子どもと家族を観察する課題（フィールドワーク）を出した。今
年度は院内保育室の協力が得られ、9割以上の学生が院内保育室での観察を実施できた。各
自のワークを持ち寄り討論することで、より観察内容を深められるように展開した。

「小児看護学援助論」では、①小児特有の症状・健康障害の理解を図ること、②小児の
健康障害の種類やレベルに適した看護ケアを理解すること、③小児への対応の仕方や成長
発達を適切にアセスメントできることを目的に、「抱っこ」「身体計測」「着脱衣」を組み合
わせた演習を組み入れたり、小児特有の疾患について、それぞれの専門分野の医師による

講義を取り入れた。

「小児看護学援助方法」では、健康障がいのある子どもと家族への具体的な看護の方法について教授した。子どもに多い状況を設定し、「バイタルサイン」「吸入」「与薬」「輸液」「採尿」「腰椎穿刺」の演習を行った。演習では事前学習および事後レポートを課し、知識・技術の定着を図った。また、事例を設定して看護過程の展開を行い、臨床における看護の実際について理解を深めることができたようにした。

「家族看護学」では、家族の捉え方や基本概念、諸理論、アセスメント方法の基礎を教授し、事例を用いて家族看護過程の理解を図った。家族面接のロールプレイを取り入れることで、健康問題のある家族への関わり方を学生間でディスカッションできた。

各科目とも 85 名以上での履修であり、授業中に一人一人との対話が困難であるため、毎回、その日の授業内容への感想質問、およびその日の授業内容への問いで構成した授業カードを授業終了約 5 分前に配布し、記述を求めた。それにより、学生たち個々の学びの確認、授業に向かう姿勢の把握、間違った理解の修正ができた。

「小児看護学実習」では、附属病院小児病棟・外来および小中学校で 2 週間の実習を行った。病棟では原則 1 名の受け持ち患児を担当し、必要とされる看護を展開できるよう指導した。外来では様々な目的で来院する子どもと家族への対応や看護師の役割について、学校では学校保健活動について学ぶなど、様々な場においてあらゆる健康レベルの子どもへの看護に対する理解が深まるような構成とした。

2. 点検評価

1) 効果が上がっている事項

5 科目ともに、目的及び目標は、学生の評点から、概ね達成できていると考える。特に、視聴覚教材の利用は小児の成長発達の理解および、健康障害の理解には効果が上がっているといえる。また、開講期間の中間に小テストを設けるなど、学生の理解度を把握して授業を進めることができたと考える。授業カードの利用は学生個々の質問や授業内容への理解不足を把握でき、次回の授業当初にコメントができたので、授業内容の理解を促すために効果的であったといえる。

2) 改善すべき事項

「家族看護学」では、授業の理解のしやすさや興味関心において、他の科目より学生の評点が低かった。事例の家族を通してのディスカッションを行ったが、臨地実習前であることもあり、学生にとっては実際の家族の状況と家族へ必要な支援が想像しにくかったことも要因の一つとして挙げられる。個人に焦点を当てた看護と、家族を含めた看護との相違について、丁寧に押さえていく必要がある。また、学生が想像しやすい事例の選択が必要である。

「小児看護学実習」では、病態生理の理解がやや乏しかった傾向にある。また、子どもへのアプローチ方法に戸惑い、援助関係を形成するのに日数を要することもあり、実習前の課題の設定に工夫が必要である。特に、発達障がいのある子どもとの関わりに学生が困

難を感じている場面も多く、対応方法について事前に教授することも効果的ではないかと思われる。

3. 将来に向けた発展方策

臨地実習前の授業で用いる事例は、学生がより想像しやすい状況を設定する。また、実際の子どもの様子を想像できない学生も多いため、視聴覚教材を用いたり、適宜教員が補足説明するなどして、リアリティーを持たせるような工夫が必要である。

4. 今後の課題

演習では学生のより主体的な取り組みを望むが、学生が子ども役になりきることは困難であり、どのようにすれば子どもと家族に対する看護を実感することができるのか、その方策を検討していく必要がある。

専門科目：急性期成人看護学領域

1. 現状の説明

急性期成人看護学領域では、旧カリキュラムの第2年次配当科目「成人看護学概論」と「急性期成人看護学援助論」、第3年次配当科目「急性期成人看護学援助方法」と「急性期成人看護学実習」、新カリキュラムの1年時配当科目の「成人看護学概論」の計5科目を開講している。「成人看護学概論」は、慢性期成人看護学領域教員とオムニバス形式の授業を行っており、詳細は慢性期成人看護学領域の項を参照とする。「急性期成人看護学援助論」は、学生が既習の体のしくみやはたらき、病気の成り立ち、基礎看護技術等と関連づけながら、生命の危機的状況の患者の特徴と回復過程及び周手術期の患者の特徴と周手術過程に応じた看護援助について必要な知識を習得することを目的に、教員3名のオムニバス形式で、研究知見、視聴覚教材や事例を活用した授業を展開している。「急性期成人看護学援助方法」は、学生が周手術期患者の身体的・心理社会的特徴をふまえた上で模擬事例に対する術前・術中・術後の各時期に必要な一連の援助を習得することを目的に、教員3名が全授業に参加し、紙上事例の看護過程の展開と高機能シミュレータを用いたシナリオベースのシミュレーション教育を組み合わせた授業を展開している。「急性期成人看護学実習」は、周手術期患者に対して術前・術中・術後の各時期に一連の看護を実践することを通して、手術の患者への影響・周手術期患者の特性・周手術期看護の特徴を学ぶこと、手術療法や患者の違いによる看護の特異性と共通性を理解することによって多種多様な手術を受ける個々の患者の看護に応用する力を身につけること、及び周手術期看護に関する自己の看護観を養うことを目的に、教員3名が実習グループを担当し、術前から術後の一連の看護実践と看護現象の考察を重視した実習を展開している。

2. 点検評価

1) 効果が上がっている事項

各科目ともに、学生の評点及び授業評価から、効果的な授業を展開し、目的及び目標を概ね達成できたと考える。新規開講した「急性期成人看護学援助方法」と「急性期成人看護学実習」を連動させた授業としたが、実習状況やレポート等から、学生が演習での体験を活用して展開の早い周手術期看護において適切な援助を自信をもって実践すること、それらを通して患者や看護への理解を深めることについて一定の効果があつたと考える。

2) 改善すべき事項

「急性期成人看護学援助論」は、昨年同様、学生の学習への主体性が低い。また、「急性期成人看護学援助方法」は、演習の事前準備・事後の片づけや事前・事後指導が必要で教員負担が大きく、また新規採用の授業方法であるため教員の教授力も未熟である。

3. 将来に向けた発展方策

「急性期成人看護学援助方法」は、教員負担を軽減するとともに学生の模擬体験による学習効果をあげるために、ITを利用した教育方法を新規に開発する予定である。学生の主体性や思考力を強化するために、他科目でもシミュレーション教育を取り入れていく。

4. 今後の課題

強化した科目間の繋がりについて評価し、「急性期成人看護学援助論」、「急性期成人看護学援助方法」、「急性期成人看護学実習」の授業内容に反映させる必要がある。

専門科目：慢性期成人看護学領域

1. 現状の説明

「成人看護学概論」は、学年配置が1年次生後期となり、急性期成人看護学領域、慢性期成人看護学領域の教員が講義を担当した。内容は、後続する援助論、援助方法、実習に連動できるように健康レベルに対応した成人看護の概要を組み入れた。7回目の授業では、授業の振り返りと理解の確認を行った。教授方法は、講義、グループワークを行った。

「慢性期成人看護学援助論」は、慢性の病気をもちながら生活している人の特徴を理解するために病期の特徴と発症頻度を考慮して代表的な病気を例に挙げて講義を行った。限られた講義時間の中で学生が理解できるように事前学習や事後学習も課し、資料も丁寧に作成した。病気をもつ人の看護援助を理解するために、授業中は、関連図を書いて病気の成因と看護援助の関係が理解できるように工夫した。「慢性期成人看護学援助方法」は援助

論の学習をさらに発展させて、慢性の病気をもつ人の看護援助を理解できるように、慢性期成人看護学領域担当教員が作成した事例展開と看護援助方法の演習資料を用いた。その演習資料を基に、講義、演習を行った。事例展開に関して、学生自身が看護過程の展開の考え方が理解できるように、考え方の基本を丁寧に講義し、グループワークを行った。演習では、演習資料を基に複数の技術を組み合わせて、対象者の健康レベルに合わせて自分自身で援助方法を考え実施し評価できるように演習した。さらに技術演習では、できるだけ授業時間内に各学生が体験できるように3人ひと組のグループとした。また、技術演習の試験はロールモデルの実技とした。「実習」は代謝・内分泌系、循環器系、内科系混合の4つの病棟で2週間実習を行った。1グループ5～6名に対して実習施設の指導者と教員がともに指導を行った。学生は原則として一人の受け持ち患者を担当し、系統的な看護過程の展開を通じて、看護援助の方法を学ぶ。

2. 点検評価

1) 効果が上がっている事項

「概論」においては、学習内容を健康レベルに応じた課題としたことで、概要の導入として広くとらえることができたと考える。また、授業の7回目に学習の振り返りと確認をすることによって、学生の学習の理解の程度を把握して、程度に応じて補足することができたと考える。「援助論」では、一週間に2回の授業にしたこと、必要に応じて学習課題を課すことによって授業内容の理解を深めたと考える。限られた授業回数の中で、内容を精選して授業を行ったことは、理解を深めるには効果があったと考える。「援助方法」では独自に作成した演習資料に基づき、学習課題、講義、実技演習と体系化したことは学習を深める上で効果があったと考える。実技試験は、原理・原則を理解したうえで、患者の個別性を考慮し看護援助を工夫できるようにしたことは、学生の看護実践能力を育成するには効果があったと考える。実習は最初の3日間は、受け持ち看護師の看護実践の見学を通じて情報を収集することは、看護課題の方向性を見出すことに効果的であった。

2) 改善すべき事項

「概論」は、他領域との調整をさらに行い健康教育の学習課題を減らして他職種との連携に関しての学習項目を増やした。学年配置が1年次生となり、講義の理解を深めるためにできるだけわかりやすい言葉や例を用いる必要があると考える。「援助論」は授業回数が少ないために、ターミナル期と健康の再構築に向けての看護援助の学習課題が十分とは言えない。「援助方法」は、援助論の専門知識と連動するように技術項目は対象者の健康レベルに対応させた演習項目に精選したが、リハビリテーション、セクシュアリティ関連の技術項目に関しては、学生自身主体的に参加できるようにさらに工夫する必要があると考える。「実習」において学生の習熟度に見合った実習を行うには実習の進め方、において臨床指導者、スタッフとなお一層の連携の強化が必要と考える。

3. 将来に向けた発展方策

「概論」、「援助論」、「援助方法」、「実習」が連携するように授業展開することが望ましいと考える。事例展開を授業で行うことは、関連領域の理解も深まり自ら考える能力を高めるには効果的と考えるが、限られた授業時間で行うには、学習課題を焦点化する等工夫が必要と考える。実技の試験の実施に関しても、学生が主体的に取り組み、工夫された複合的な技術を評価できるように今後も考える。

4. 今後の課題

関連知識・技術を統合的に活用して、病気をもつ人とその家族の看護援助について系統的に思考を深めるようにする。

専門科目：老年看護学領域

1. 現状の説明

老年看護学領域は、小林貴子、横山浩誉、北村有香の3名体制である。実習2科目3単位、講義・演習3科目4単位を開講実施した。また教授は3年次必修科目「チーム医療論」1単位を担当している。2年次生「老年看護学概論」「老年看護学援助論」「老年看護学地域実習」、3年次生「老年看護学援助方法」「老年看護学実習」を受講し、受験資格を得た学生は全員単位を修得した。また、カリキュラム変更により「老年看護学地域実習」の履修の機会を失った学生1名に対し教授会の議を経て承認された「老年看護学地域実習」の追実習を2月に実施した。追実習にあたり未受講の「老年看護学概論」の個別指導のうえ実習を行った。学生は学習に真摯に取り組み実習内容を満たし単位を修得した。

「老年看護学概論」では、昨年からの要望を踏まえ講義と教科書との関連を示し、学生にも自学自習により講義と教科書を整理・活用する「ノートづくり」という課題を示しながら講義を行った。また高齢者理解を様々な視点から捉えるよう、講義だけではなく、資料・文献提示を行い個人課題やグループ討議を取り入れた授業展開も行い、出来るだけ学生参加型講義を試みた。例えば「身近な高齢者の生活史」を対話により聴き、時代のなかで生活されてきた高齢者像の理解を試みた。高齢者の生きてこられた時代を理解しつつ、加齢による心身の変化を本来機能の理解を基盤にし統合して理解する事、環境への適応力の変化と生活の変調と関係、更には高齢者の個別性の理解、価値観や希望を尊重することの意義等を共に考える機会を提供するよう配慮した。

「老年看護学地域実習」では病院及び外部施設での各2日間の実習を行い、見学・一部実践のなかで高齢者理解及び看護機能について理解する事を目標とした。施設の特徴や対象の健康レベルの違いや他職種との協働等については、学内でのグループ学習及び全体発表により共有した。本実習は前期の「老年看護学概論」を後期の「老年看護学援助論」へと発展・継続させる役割を果たしている。新カリキュラムでは3年次での4単位実習に変更

となるので本年度が最後の実習となった。

「老年看護学援助論」では、実習での場面を例に挙げながら高齢者との対話や観察からの気づきを想起するよう促しつつ、高齢者への援助とその根拠を考える授業となるよう配慮した。視聴覚教材を取り入れたり、学生自身の身体を使って確認する演習を織り込みながら進める等の工夫をした。また科目のまとめとして、「他者への生活援助の実践」を課題とし、実際に学生の身近な他者（高齢者含む）に生活援助を行い、選択した援助の根拠と実施過程、対象の反応を記述することを課した。学生は、実践を通し多くの気づきと学びを報告した。「相手が安心して委ねることができる為の援助技術」の基本には、対象理解と確実な援助技術、そのための学習や準備を挙げており、意義ある課題であったと考察した。

「老年看護学援助方法」は、学生が高齢者の身体的・精神的・社会的特徴を踏まえた上で、高齢者疑似体験や移動・移乗の援助、高齢者とその家族を対象とした2事例を用いた看護過程の展開を行い、個別学習を経てグループ学習、全体での発表と意見交換を行った。紙上事例の展開では情報に限りがあることから、展開の過程で確認したい事項をより多く抽出していくことの必要性に気づいて貰う事に限界があり課題とした。

「老年看護学実習」は、附属病院の4つの病棟を実習場として、受け持ち高齢者を通して、高齢者の疾患や障がいによる身体的特徴、老性の自覚や知的機能の変化などの心理・精神的特徴、家族関係や役割機能の変化といった社会的特徴等を学び、高齢者およびその家族について総合的に理解することを目的に、教員3名が実習グループを担当し行った。学生は、老年期にある対象と家族への看護過程の展開を行うとともに、日々の実践を通して高齢者の価値観や信念、家族の特徴、入院前の生活等についても理解を深めることで、健康レベルや個別性に応じた看護を計画し、概ね実施・評価することができていた。また、老年看護における看護基本技術および生活支援ともに、学生ができるだけ体験できるよう病棟側のご配慮も頂くことができた。さらに、退院支援やケースカンファレンスを通して、他職種との連携に関わることもできた学生もおり、この貴重な学びは、学生カンファレンスを通して共有することができた。また「看護実践と理論の統合」により、他のグループの学生の学びをも共有することができた。

2. 点検評価

1) 効果が上がっている事項

第2年次配当科目「老年看護学概論」、「老年看護学援助論」では、昨年の学生からの要望を踏まえ、教科書に準じながら重要な点は資料に空欄を作り、講義を聞きながら記入できるようにした結果、学生の集中度が高まった。また、昨年と同様に動画を教材として、意見交換を行い教員および学生との双方向の講義により学生の関心や考えの確認を行うことができた。

2) 改善すべき事項

教科書に準じながら、不足する内容は資料配布を行なっている。学生は資料のみを持参しノートをとることが少ない傾向がある。学生自身が自分の学習ノートを作成できるよう改善する必要がある。また提出させた課題の全体的なコメントは次回に行なっているが、課題返却を出来るだけ早く行うよう改善する。

3. 将来に向けた発展方策

老いや高齢者への理解は難解である。教科書はもどるべきところとして確保しつつ、様々な教材や機会を使って、老年看護学領域、看護学への学生の関心を高めることができるような課外活動への参加も視野に入れた学習方略へと発展させたい。学生が大学という高等教育機関で看護学を学び老年看護学に関心をもってもらえるよう地域の活用を含め上級学年での実習に展開させたい。

4. 今後の課題

2012年度入学生からは、老年看護学実習の4単位を3学年次に行う事になる。病院及び外部施設での実習を同時期に行う。現在老年看護学領域の教員は教授1名、助教2名の合計3名体制であり、実習指導及び同時に開講している講義科目と併せ、実習指導にあたる非常勤雇用の採用が課題である。

専門科目：精神看護学領域

1. 現状の説明

1) 人間関係論（第1学年次前期配当科目）

人間関係や対人関係の概念を押さえた上で、集団の中での人間関係の特徴、対人コミュニケーションに関する基礎知識について教授した。また、よりよい人間関係を形成できる過程を経験できるように、毎回、構成メンバーを変えて演習を行った。

2) 精神看護学概論（第2学年次前期配当科目）

これから精神看護学を学ぶにあたって、精神看護の基本概念、精神疾患患者に対する看護への導入、リエゾン精神看護の基礎的な考え方を教授することを目的とした。精神看護学の必要性が理解でき、関心が高められるように授業を工夫した。

3) 精神看護学援助論（第2学年次後期配当科目）

精神医療看護に対する理解を深めることを目的とし、予防から社会復帰まで、さまざまな段階における精神疾患患者への看護の方法について教授した。具体的には、精神科での外来看護、病院における急性期および慢性期の精神疾患患者に対する看護、社会復帰した

患者に対する看護について、それぞれ事例を用いながら教授した。

4) 精神看護学援助方法 (第3学年次前期担当科目)

精神疾患患者の看護に対する理解を深めることを目的として、授業を展開した。また、オレム-アンダーウツのセルフケアモデルの6領域に沿って、精神疾患の治療に伴う副作用や精神疾患患者が起こしやすい身体合併症と、それらに対する看護について教授した。

5) 精神看護学実習 (第3学年次後期担当科目)

精神看護を行う上での基礎的能力の養成を目的とし、実習を通じて看護師の様々な機能と役割について教授した。具体的には、対人関係理論、セルフケア理論に基づいて、受け持ち患者との援助関係の構築、健康問題が生活に与える影響のアセスメント、具体策の実践と看護計画の立案ができるように教授した。

2. 点検評価

1) 効果が上がっている事項

人間関係論では学生が人間関係の作り方の幅を広げ、学生自身の行動を振り返る機会を提供できた。精神看護学概論では、イメージのつきにくかった精神看護学に関する動機づけをもたせることができた。同援助論では、外来、入院、社会復帰に至る精神医療看護について、各段階における精神疾患患者への看護の方法の理解を広げさせることができた。同援助方法では、演習(セルフケアモデルを用いた看護過程の展開やプロセスレコード)を取り入れたり、教材を工夫(摘便・浣腸モデルの使用)したりすることによって、体験をとおして、精神疾患患者への看護について理解を深めさせることができた。精神看護学実習では、継続して一人の患者を受け持つことに加えて、デイケア施設での実習を組み入れることで、地域社会で生活する上での諸問題や必要な援助についても考察することができた。

2) 改善すべき事項

精神看護学援助論・援助方法で演習を行った折、一部の演習について目的や進め方の意図が十分に伝わらず、学生より、分かりやすい説明をしてほしいとの要望があったり、時間が不足してしまうことがあったりしたので、今後は資料を用いて意図を十分に説明する、時間配分について再考するなどして、演習の効果が一層発揮されるような配慮を行う必要がある。

3. 将来に向けた発展方策

精神看護学は、精神のみを取り扱う看護学であるとの誤解を招かないように、他の領域の看護学での学びをできる限り反映させた講義や演習を展開させていきたいと考えている。

4. 今後の課題

精神看護学の導入にあたる概論、精神疾患患者への看護援助の方法を教授する援助論、精神看護学で対象となる患者に対して、事例の検討や学内での演習を行って、具体的かつ総合的に援助の方法について理解を深める援助方法、体験を通して精神看護における看護師の機能と役割を学ぶ実習、これら 4 つの授業が独立かつ有機的に展開されるように、今後とも努力していきたいと考える。

専門科目：在宅看護学領域

1. 現状の説明

在宅看護学領域では、健康課題や障害を持ち、医療と何らかの関連をもちつつ社会の中で生活者として生きる人々の尊厳の保持、自律および自立に向けた支援を通して人々の QOL を高めることをめざし、「対象理解」、「在宅ケアを支える社会資源」、「在宅ケアを支えるための連携とマネジメント」の 3 つの柱をもとに授業構成を考えた。本年度前期では、「在宅看護学概論（2 年生）」、「在宅看護学援助論演習（3 年生）」、後期では「在宅看護学援助概論（2 年生）」、「在宅看護学実習（3 年生）」を開講した。教員組織は准教授 1 名と定員数を満たしておらず、「在宅看護学援助論」および「在宅看護学援助論演習」では演習補助員として 1 名を起用した。さらに、「在宅看護学実習」では 2 名の実習補助員を起用した。

「在宅看護学概論」、「在宅看護学援助論」では独自に資料を作成した。資料は、①単元に関連した事前課題（既習知識の確認や生活の振り返り）、②単元に関する内容、③まとめの 3 部構成とし、授業 1 週間前に配布し事前学習を位置づけた。

「在宅看護学概論」では、特に学生が苦手とする在宅看護が必要とされるようになった背景について社会状況や医療施策の変遷を通して理解すること、在宅看護の法的基盤とシステムについて理解することを強化する内容とした。さらに、在宅看護の場や特徴をよりイメージしやすいように具体的事例や映像を取り入れた。在宅看護の場は、療養者とその家族の日常生活の場であることから、まず学生個々の生活体験や社会体験からの学びを学習の場に持ち込めるよう、授業時間中の問いかけやディスカッションを取り入れ展開した。

「在宅看護学援助論」では、在宅看護の場の特性を踏まえ在宅療養者とその家族に対する生活支援、医療的管理を必要とする人への看護、在宅におけるターミナルケアについての内容とした。本科目の配当年次が 2 年生であることを考慮し一般的な在宅での事例を設定し、演習を行った。演習補助員との 2 名体制での展開であり、学生 40 名前後の 2 クラス編成と同じ授業を 2 回実施した。ディスカッションを取り入れ学生間でのリフレクションを促すとともに、事前学習および事後レポートを課し知識・技術の定着を図った。

「在宅看護学援助方法」では、事例を設定し看護過程の展開を行った。1 グループ 6～7

名編成とし、具体的な訪問看護計画を立案、計画をもとにロールプレイを実施、評価につなげた。看護展開におけるアセスメントでは、演習補助員 1 名とともに学生の個人指導を実施し、知識の確認とともに対象理解と健康課題の明確化が強化できるようかわった。当初、3 事例の展開を考えていたが、学生の理解と進捗状況により 2 事例のみとなった。

各講義科目終了後に毎回小レポートを課し、授業を通し考えたこと、質問等を提出させた。授業の冒頭では学びの共有と質問に対しての補足説明を行い、学生へフィードバックは実施できたが、個々の小レポートにコメントを記入し返却することには限界があった。

「在宅看護学実習」では、本学附属病院広域医療連携センターおよび高槻市内における訪問看護ステーション 9 カ所で 2 週間の実習を行った。広域医療連携センターでは、社会資源の活用や他職種との連携・協働の実際を学ぶことを目的とし展開した。訪問看護ステーションでは、看護師や理学療法士などの訪問に同行するとともにケアに参加し、在宅療養者とその家族への具体的な対応や看護師の役割、協働のあり方について理解が深まる内容とした。さらに、1 名の受持療養者を担当し、主体的に看護が展開できるよう設定した。

2. 点検評価

1) 効果が上がっている事項

4 科目ともに目的および目標はほぼ達成できているものとする。

制度などの法的基盤や社会資源の活用など、学生が理解しにくい単元の明確化および内容の精選を行い授業展開したことで、学生の理解を深めることができた。さらに、祖父母などの身近な人たちがどのような制度のもとで、どのようなサービスを受けているのか、主体的に探索するという姿勢もみられた。また、事例や映像を活用することによって在宅看護をイメージしやすくなっており、学生からも好評を得ている。また、毎回小レポートを課しているため教員が学生の理解度を把握しやすい。同時にフィードバックすることによって、学生間での学びの共有と考え方の拡がりが見られている点においては、非常に効果的であったと考える。

また、「在宅看護学実習」により学生の在宅看護への関心の高まりがうかがえた。これは実習施設の学習環境が整っていたこと、看護師—学生の 1 対 1 での丁寧な指導を受けたこと、実際の看護の場面に遭遇したことが大きな要因と考える。

2) 改善すべき事項

「在宅看護学援助論」および「在宅看護学援助方法」では教員配置数の関係上、学生個々の技術演習への指導、また学生からの質問に対する十分な対応が困難であった。授業内容にあわせたグループ編成、教育方法の検討、さらには人員の確保を検討する必要がある。

「在宅看護学実習」では、学生は病態生理の理解に困難を要するとともに、特に実習初期においては「生活」や「家族」も視るということに戸惑いを感じていた学生が見られた。

「在宅看護学援助方法」と連動させながら、在宅の場でよく遭遇する事例を用いた看護展開の実施と学生間での共有をさらに図っていき、実習につなげていけるよう展開していき

たい。また、人をケアするというものの意味や看護を展開するにあたっての視点を身につけることができるよう強化していきたいと考えている。また、学習環境という点では、訪問看護ステーションによって学生の訪問回数の差が大きく、学びに違いが生じている。管理者への理解を求めるとともに、新規の実習施設の確保も検討する必要がある。また、広域医療連携センターでは病院全体への周知徹底と、学習内容の精選および実習方法の検討が課題である。

3. 将来に向けた発展方策

在宅看護学に対する学生のイメージは非常に乏しい。可能な限り視聴覚教材を活用するとともに、実際の看護の場面の体験を考えていきたい。療養者や家族の生活、援助の実際を理解するため、昨年度から検討していた IT 技術を活用した授業展開もしていく予定である。

4. 今後の課題

次年度は 4 年目になるため各科目に対する多面的な評価を実施し、概論、援助論、援助方法、実習との有機的なつながりを明確にしていく。また、在宅看護の理解を深めるため、特に実習における学習環境を整えていく必要がある。

専門科目：地域看護学領域

1. 現状の説明

- ・地域看護学概論：2 年生を対象に、地域看護活動を支える理念と主要な概念や地域で働く看護職の活動分野、対象と方法と活動の根拠となる法制度や個人・家族・集団・コミュニティの展開方法の基礎となる理論を教授した。DVD 等を使用し、学生が保健師活動をイメージしやすくなるように取り入れた。
- ・地域看護学援助論：2 年生を対象に、母子・成人・高齢者等発達段階別の健康課題と保健活動と、公衆衛生の基本となる健康危機管理や人権に関わる虐待問題に関しての理念と看護職の役割を教授した。各教員の専門職域を活かし、オムニバスで講義を行った。個別保健指導の演習をアセスメント、計画立案、ロールプレイ、評価における一連の展開を教授した。また、家庭訪問の技術をロールプレイ等の演習を通じて教授した。
- ・地域看護学援助方法：3 年生を対象に、地域保健活動の対象である個人・家族に対する健康相談や家庭訪問の技術をロールプレイ等の演習を通じて教授した。また、母子・成人・高齢者に対する健康教育の計画をたて、プログラムを実施、評価を行うことで、集団的対応技術の展開方法を教授した。地域看護学領域の教員 4 名で演習を行った。
- ・地域看護管理：3 年生を対象に、地域看護活動の基本である地域診断に関するモデルと一

連の過程を教授し、実際に高槻市の情報収集・分析・健康課題の抽出まで演習として行った。グループ作業であったが、報告会で健康課題を共有することができた。

- ・ヘルスプロモーション：3年生を対象の選択科目であったが、全員選択していた。地域におけるヘルスプロモーションの現状を通して、展開方法を教授した。産業衛生や行政の具体的な取り組みを提示した。
- ・地域看護学実習Ⅰ：3年生を対象に1単位実習した。地域看護の対象であるあらゆる発達段階の人々の健康生活と地域のつながりや様々な機関や職種と協働して活動する地域看護職の役割を学ぶことを目的に、健康科学クリニックや保育所、子育て総合支援センター、社会福祉協議会などで実施している事業に参加した。

2. 点検評価

1) 効果が上がっている事項

地域看護学の基礎である地域看護学概論や地域看護に必要な知識、技術を地域看護学援助論では、DVD を利用し学生の理解を促した。3年生の地域看護学援助方法では、保健指導技術において演習を取り入れ、具体的に展開し、評価まで実践した。地域看護管理論では、地域で働く看護職に必要な地域アセスメントの技術の演習を通して習得し、臨地実習につながるよう展開してきた。地域看護学実習Ⅰにおいて、実習施設が多岐にわたったが、指導者と教員の連携によって、目的に沿った実習を行うことができた。演習や実習の学びは、成果を発表し討議することで共有し、深めることができたと考える。

2) 改善すべき事項

地域看護学援助論や地域看護学援助方法、地域看護管理の演習は、グループ作業となったが取り組み方に差ができた。今後、演習の進み具合を学生と教員で確認し合い、演習効果が上がるような取り組みを行う必要がある。地域看護学実習Ⅰにおいて、実習施設の特徴的な内容が体験できるように更に、実習指導者と連携を深めていく必要がある。

3. 将来に向けた発展方策

完成年度を迎え、すべての教育課程を実施し、評価することができる。このことを踏まえて、限られた教員数の中で、学生の学びにつながるような内容や教授方法をさらに吟味、精選する。保健師国家試験対策の充実を図る必要がある。

4. 今後の課題

平成 25 年度には、4年生の地域看護学実習Ⅰ、地域看護学実習Ⅱ、総合実習と保健所や保健センター、検疫所および事業場での実習が新しく始まる。実習場が広域かつ他機関になるため、実習指導者と教員との連携を積極的にとり、実習が効果的に行われるように配慮が必要となる。4年生の実習には、厳しい条件があり、4年生の実習が6、7、9月と集中するため、学内演習等に工夫が必要となる。

VII. 研究活動

VII 研究活動

基礎：小林道太郎

1. 学会発表

小林道太郎 (2012): フッサール現象学は質的研究とどう関わるのか, 第35回臨床実践の現象学研究会, 2012年6月, 大阪大学.

小林道太郎, 山内栄子, 竹村淳子他 (2012): 看護学教科書の記述分析からみたチーム医療の体制, 第38回日本看護研究学会学術集会, 2012年7月, 沖縄コンベンションセンター, 日本看護研究学会雑誌 35(3), 363.

小林道太郎, 岩佐宣明, 斉藤安潔 (2012): 日本のES細胞研究指針策定の考え方について, 第30回ドイツ応用倫理学研究会「尊厳概念の日独比較へ向けて」, 2012年9月, 一橋大学.

小林道太郎 (2012): 原発の諸問題と私たちの価値観, 名古屋哲学研究会 シンポジウム「震災以前からあったが震災以後可視化されたことについて考える」, 2012年9月, 名古屋市立大学.

小林道太郎 (2012): 経験を伝える一現象学からみた経験の複雑さについて, 第17回日本糖尿病教育・看護学会学術集会 シンポジウム1「実践力を高める一学び、経験、再考へ」, 2012年9月, 京都国際会館, 日本糖尿病教育・看護学会誌 16(特別号), 64.

小林道太郎 (2012): 他者の経験を現象学的に記述するとはどのようなことなのか, 第II期第2回「ケアの現象学」研究会, 2012年12月, せんだいメディアテーク.

専門基礎：瀧井道明

1. 論文

瀧井道明, 増田大介, 小倉 健, 井元 章, 樋口和秀 (2012) : 再発性膵炎における膵液粘稠性亢進の関与とその対策. 胆と膵, 33(4) : 315-322.

Takii M, Masuda D, Ogura T, Imoto A, Kojima Y, Narabayashi K, Nouda S, Yoda Y, Ishida K, Abe Y, Takeuchi T, Ioue T, Tokioka S, Umegaki E, Hayashi Y, Higuchi K (2012) : Study of Validity and Usefulness of ¹³C Trioctanoin Breath Test as Pancreatic Exocrine Function Test in Patients with Chronic Pancreatitis-Using Small Intestinal Lipase Activity as a Parameter-. Bulletin of Osaka Medical College 58 (1,2), 1-8.

Ogura T, Masuda D, Kurisu Y, Ohama H, Imoto A, Takii M, Takeuchi T, Inoue T, Tokioka S, Umegaki E, Higuchi K (2012) : Splenic artery aneurysm masquerading as a pancreatic tumor - diagnosis by contrast-enhanced endoscopic ultrasound. Endoscopy 44, E428-E429.

小倉 健, 有坂好史, 増田大介, 井元 章, 瀧井道明, 林 道廣, 江頭由太郎, 梅垣英次, 樋口和秀 (2012) : 十二指腸への広範な表層拡大進展と胆管, 膵管内進展を認めた乳頭部癌の1例. Gastroenterological Endoscopy 54(9) : 3156-3164.

小倉 健, 有坂好史, 瀧井道明, 増田大介, 井元 章, 内山和久, 江頭由太郎, 梅垣英次, 樋口和秀 (2012) : 主膵管狭窄を合併した微小な非機能性膵内分泌腫瘍の1例. 膵臓 27 : 701-709.

2. 学会発表

平井あい, 増田大介, 井元 章, 小嶋融一, 榎林 健, 能田貞治, 依田有紀子, 石田久美, 阿部洋介, 竹内利寿, 井上拓也, 時岡 聡, 瀧井道明, 梅垣英次, 林 道廣, 内山和久, 栗栖義賢, 江頭由太郎, 樋口和秀 (2012) : EUS-FNAが診断に有用であった膵転移性平滑筋肉腫の1例. 第88回日本消化器内視鏡学会近畿地方会プログラム・抄録集, 68.

佐野達志, 小嶋融一, 能田貞治, 依田有紀子, 竹内利寿, 時岡 聡, 梅垣英次, 榎林 賢, 井元 章, 能田貞治, 石田久美, 阿部洋介, 増田大介, 井上拓也, 瀧井道明, 樋口和秀 (2012) : ダブルバルーン小腸内視鏡で止血しえた小腸angioecatsiaの1例. 第88回日本消化器内視鏡学会近畿地方会プログラム・抄録集, 76.

井元 章, 増田大介, 小倉 健, 瀧井道明, 樋口和秀 (2012) : シンポジウム1「IPMNの画像と手術適応と病理」当科におけるIPMN切除症例の検討—特に再発癌症例について—. 膵臓 27(3), 第43回日本膵臓学会大会プログラム, 308.

小倉 健, 井元 章, 増田大介, 瀧井道明, 梅垣英次, 樋口和秀 (2012) : 主膵管型IPMNの自然史. 膵臓 27(3), 第43回日本膵臓学会大会プログラム, 443.

塚原彰弘, 井元 章, 小倉 健, 増田大介, 瀧井道明, 梅垣英次, 栗栖義賢, 樋口和秀 (2012) :

膵漿液性嚢胞腫瘍類似の画像所見を呈した浸潤性膵管癌の一例. 第 97 回日本消化器病学会近畿支部例会プログラム・抄録集, 64.

寺西真章, 小倉 健, 増田大介, 井元 章, 瀧井道明, 竹内利寿, 井上拓也, 時岡 聡, 梅垣英次, 樋口和秀 (2012): 主膵管型IPMNの自然史. 第 97 回日本消化器病学会近畿支部例会プログラム・抄録集, 84.

瀧井道明, 増田大介, 樋口和秀 (2012): ワークショップ6「病態栄養からみた肝・胆・膵疾患—治療への応用—」¹³C長鎖脂肪酸呼気試験による小腸吸収能評価からみた胆管閉塞に対する胆管ステント留置の意義. 日本消化器病学会雑誌 109 (Suppl), A615.

増田大介, 井元 章, 小倉 健, 榎林 賢, 能田貞治, 石田久美, 阿部洋介, 竹内利寿, 井上拓也, 時岡 聡, 瀧井道明, 梅垣英次, 樋口和秀 (2012): 当科における膵癌早期診断の取り組み. 日本消化器病学会雑誌 109 (Suppl), A759.

小倉 健, 井本 章, 増田大介, 瀧井道明, 梅垣英次, 樋口和秀 (2012): ERCP関連手技における Bispectral index monitoring を用いた安全な sedation の比較検討. Gastroenterological Endoscopy 54 (Suppl 2), 2784.

清水裕平, 井元 章, 小倉 健, 増田大介, 瀧井道明, 梅垣英次, 樋口和秀, 栗栖義賢 (2012): 著明な乳頭状増殖を示す結節が観察された主膵管方IPMAの一例. 第 89 回日本消化器内視鏡学会近畿地方会プログラム・抄録集, 40.

寺西真実, 小倉 健, 増田大介, 井元 章, 瀧井道明, 江戸川祥子, 榎林 賢, 能田貞治, 石田久美, 阿部洋介, 竹内利寿, 井上拓也, 時岡 聡, 梅垣英次, 樋口和秀 (2012): EUS-guided hepaticogastrostomy (EUS-HGS) がQOL向上に有用であった胃癌再発による閉塞性黄疸の1例. 第 89 回日本消化器内視鏡学会近畿地方会プログラム・抄録集, 41.

専門基礎：土手 友太郎

1. 著書

河野公一 編集 土手友太郎他(2013):研修医・指導医のための地域医療・地域保健 第 2 章 予防医療・地域保健の現場 VI.各種検診・健診の実施設 金芳堂出版p244-248

2. 論文

今西将史, 土手友太郎, 林江美 他 (2012):フッ酸吸入曝露事故モデルラットの急性肺障害の早期回復過程およびフッ素の肺および血中動態の検討, Biomedical Research on Trace Elements 23(3), 202-7.

Shin Nakayama, Tomotaro Dote, Emi Hayashi et al. (2012):Longitudinal relationships between stages of changes in the transtheoretical model and annual data changes in

mandatory routine health checkups of university faculty, Japanese Journal of Occupational Medicine and Traumatology 60, 165-174.

中山紳, 土手友太郎, 林江美 他 (2012):職域健診における腹囲と内臓脂肪量基準による行動変容意思および健診結果の検討, 成人病と生活習慣病 42, 622-3.

Emi Hayashi, Tomotaro Dote, Shin Nakayama et al. (2012):Cross-sectional research for two consecutive years about stage of change, request for health counseling and good lifestyle in mandatory routine, Bulletin of Osaka Medical College 58, 17-25.

佐々木綾子, 西頭知子, 佐々木くみ子, 土手友太郎, 波崎由美子 (2012):育児期母親の子宮頸がん検診率向上をめざした看護介入プログラムの効果, 大阪医科大学 看護研究雑誌 3, 213-219.

土手友太郎, 吉田 久美子, 瀧井道明 他 (2012):大学教職員におけるメタボリックシンドローム発症状況と業務内容および生活習慣による影響, 大阪医科大学 看護研究雑誌 3, 138-146.

3. 学会発表

土手友太郎, 林江美, 中山紳他 (2012):特健におけるMetS判定、内臓脂肪量、行動変容、労働状況等と保健指導希望との関連性, 第 85 回日本産業衛生学会講演集 54, 409.

土手友太郎, 林江美, 中山紳他 (2012):効率的な保健指導計画のための保健指導の希望状況および行動変容のステージの視点からの検討, 第 53 回日本人間ドック学会プログラム・抄録集 27 (2),147.

土手友太郎, 小見山麻紀 (2012):メタボリックシンドロームのわが国と世界統一基準による該当者割合と内臓脂肪量等の比較検討, 第 33 回日本肥満学会プログラム・抄録集 18(S),194.

土手友太郎, 林江美, 中山紳他(2012): わが国と世界統一基準によるメタボリックシンドロームの判定結果と脂肪量等の比較検討, 第 71 回日本公衆衛生学会総会抄録集 59(10),252.

林 江美, 土手友太郎, 中山紳他(2012):効率的な保健指導計画のための保健指導の希望状況および行動変容のステージと生活習慣の検討, 第 60 回日本職業災害医学会誌 60,別 214.

小見山麻紀, 土手友太郎, 林江美他(2012): 特定健康診査結果の 2 年間の縦断的变化における行動変容ステージの観点からの検討, 第 60 回日本職業災害医学会誌 60,別 215.

土手友太郎, 中山 紳, 林江美他(2012): わが国と世界基準によるメタボリックシンドロームの判定結果と内臓・皮下脂肪量等の比較検討, 第 60 回日本職業災害医学会誌 60,別 247.

土手友太郎, 中山 紳, 林江美他(2013):メタボリックシンドロームのわが国および世界統一の判定基準による該当者の比較検討, 第 47 回日本成人病 (生活習慣病) 学会プログラム・抄録集 39,70.

専門基礎：元村直靖

1. 著書

Handbook of PTSD: Science and practice. Friedman MJ, Kean, TM, Resik, PA Vol.13
The prevalence and impact of child traumatic stress Guilford press 2007, PTSD ハ
ンドブック：科学と実用 第13章 子どもの外傷性ストレスの頻度とその衝撃(印刷中)

2. 論文

元村直靖 (2012)：医療・保健・教育現場のリスクコミュニケーション，日本保健医療行動
科学学会年報，27， 1-9.

石川信一，元村直靖 (2012)：心理士による児童青年のうつ病性障害に対する認知行動療
法の実施—3事例の報告，行動療法，38， 203-213.

元村直靖，川端康雄 (2012)：子どもの不安障害に対する認知行動療法，20， 520-524.

元村直靖 (2012)：子どものストレス障害，小児科，53， 567-574.

亀岡智美，斎藤梓，野坂祐子，岩切昌弘，瀧野揚三，田中究，元村直靖，飛鳥井望 (2013)：
トラウマ焦点化認知行動療法 (TF-CBT) —我が国での実施可能性についての検討—日本
児童青年精神医学とその近接領域，54(1)，68-80.

元村直靖 (2012)：トラウマ焦点化認知行動療法 サイコセラピー学会.

川端康雄，元村直靖他 (2013)：動機づけ面接によりウエイトコントロールの効果が認めら
れた肥満症の一例，大阪医科大学看護研究雑誌，3， 157-167.

山之内由美，元村直靖 (2013)：看護学生のうつに対する認知行動療法プログラムの開発と
有効性の検討，学校危機とメンタルケア 5， 69-77.

3. 学会発表

Motomura N, Kawabata Y, Ishikawa S(2012):11th annual international conference
「Cognitive behavioral therapy for Japanese children and adolescents with anxiety
disorders」 H24.8.22～25, Bangkok.

川端康雄，元村直靖，若林暁子他 (2012)：交通事故後のPTSDに対する長時間曝露療法
効果，第38回日本行動療法学会，京都.

楠無我，元村直靖，川端康雄他 (2012)：さまざまな不安症状によって透谷が困難になった
中学生に対してCBTプログラムを適応した一例，第38回日本行動療法学会，京都.

黒田健治，元村直靖，関隆晴他 (2012)：脳損傷後に注意障害を呈した患者の回復経過の検
討，第36回日本高次脳障害学会，H24.11，埼玉.

4. 報告書

元村直靖, 石川信一, 川端康雄 (2012) : 平成 24 年度厚生労働科学研究費助成金 (こころの健康科学研究事業) 総合研究報告書 : 「精神療法の有効性の確立と普及に関する研究」
児童の不安障害に対する認知行動療法の有効性の検討.

専門基礎 : 矢野貴人

1. 学会発表

石井誠志, 矢野貴人, 岡本明弘他 (2012) : *Streptococcus mutans* の ComAヌクレオチド結合ドメインの立体構造, 第 85 回 日本生化学会大会, 福岡 (生化学, 第 84 巻, 号外 臨時増刊号, p103).

基礎看護学領域

1. 著書

松尾淳子 (2013) : 褥瘡リスクの高い患者のシーツは「ピンと張らない」、看護手技のここが変わった, エキスパートナース, 第 29 巻 2 号, 照林社, 41-42, 東京.

2. 論文

西菌貞子 (2013) : 看護大学生における自己学習力の変化の検討, 大阪医科大学看護研究雑誌, 3, 90-99.

AKAZAWA Chiharu, NISHIZONO Teiko, YAMAMOTO Masae (2013) : Investigation of a actual daily lifestyle leading to continuous self-management after living-donor liver transplantation : More than 5 years living with living donor liver transplantation and emotions of recipients, Japan Journal of Nursing Science, Vol.10(1).

Masaki N, Sugama J, Okuwa M, Inagaki M, Matsuo J, Nakatani T, Sanada T. (2012) : Heel Blood Flow During Loading and Off-Loading in Bedridden Older Adults With Low and Normal Ankle-Brachial Pressure Index A Quasi-Experimental Study, Biological Research for Nursing, Epub ahead of print 2012 DOI:10.1177/1099800412437929.

松尾淳子, 福田守良, 井内映美, 西澤知江, 大桑麻由美, 須釜淳子, 紺家千津子, 真田弘美 (2013) : ベッドメイキングの違いがエアマットレスの圧再分配機能に及ぼす影響, 日本創傷・オストミー・失禁ケア研究会誌, 17 (1), 33-39.

原明子, 川北敬美, 松尾淳子, 西菌貞子, 道重文子 (2013) : 看護師のクリティカルシンキング志向性と看護実践能力との関係, 大阪医科大学看護研究雑誌, 第 3 巻, 58-68.

3. 学会発表

道重文子, 原明子, 仲前美由紀 (2013) : 医療療養型病院に入院中の高齢者の口腔状態と口腔ケアの課題, 日本看護研究学会第 26 回近畿・北陸地方会学術集会, 58, 和歌山.

西菌貞子, 原明子, 松尾淳子, 道重文子 (2012) : 看護学教育における初学習者の自己学習力の志向性の検討, 第 38 回日本看護研究学会学術集会, 241, 沖縄.

西澤知子, 松尾淳子, 稲垣美佐子, 須釜淳子, 真田弘美, 仲上豪二郎, 大江真琴, 紺家千津子, 大桑麻由美, 松井優子, 繁田佳映 (2012) : 地域医療における褥瘡管理成功に至る要因・プロセスに関する研究, 第 14 回日本褥瘡学会学術集会, 438, 横浜.

Fukuda M, Nishizawa T, Iuchi T, Matsuo J, Sugama J (2012) : Interaction of sheet stretch with bedmakin methosa alters the pressure redistribution of an air mattress. 4th Congress of the World Union of Wound Healing Societies, Yokohama, Japan.

Matsumoto M, Kurokawa A, Kon Y, Shimizu A, Kanaoka M, Hishida A, Matsuo J, Inagaki M, Shigeta Y, Sugama J (2012) : Influence of differnces in washing methods

on skin texture and color. 4th Congress of the World Union of Wound Healing Societies, Yokohama, Japan.

Supriadi A, Pakundus, Ernanda Y, Stephani, Namsin, Sugama J, Okuwa M, Matsuo J, Nishizawa T, Nakatani T (2012) : Interface pressure and pressure gradient with pressure ulcer development, shape of morphological of pressure ulcers, and pressure ulcer incidence in intensive care units in Pontianak, Indonesia. 4th Congress of the World Union of Wound Healing Societies, Yokohama, Japan.

Kon Y, Kurokawa A, Matsumoto M, Shimizu A, Kanaoka M, Hishida A, Matsuo J, Inagaki M, Shigeta Y, Sugama J (2012) : Influence of differences in washing method on skin barrier function, 4th Congress of the World Union of Wound Healing Societies, Yokohama, Japan.

藪中幸一, 仲上豪二郎, 松尾淳子, 須釜淳子, 小柳礼恵, 真田弘美 (2012) : 高齢者の便秘における画像的評価の検討, 第 11 回日本看護技術学会学術集会, 78, 福岡.

松尾淳子, 原明子, 道重文子, 藪中幸一, 中谷壽男 (2012) : 静脈穿刺時における肘窩の神経と動脈の位置関係について—超音波画像による検討— (第 2 報), 第 11 回日本看護技術学会学術集会, 108, 福岡.

橋本美香, 西山順子, 田中良, 松尾淳子 (2013) : マットレスのへたりの現状調査と体圧分散に及ぼす影響, 第 10 回日本褥瘡学会学術集会近畿地方会, 16, 大阪.

川北敬美, 青山ヒフミ, 撫養真紀子 (2012) : 子育て中のパート看護師の仕事への認識, 第 16 回日本看護管理学会年次大会, 188, 札幌.

原明子, 松尾淳子, 西園貞子, 道重文子 (2012) : 看護師の看護実践能力とクリティカルシンキング志向性との関係, 第 38 回日本看護研究学会学術集会, 261, 沖縄.

原明子, 松尾淳子, 道重文子他 (2012) : 静脈穿刺時における肘窩の神経と動脈の位置関係について—超音波画像による検討— (第 1 報), 第 11 回日本看護技術学会学術集会, 107, 福岡.

老年看護学領域

1. 著書

北村有香(2012): メディカコンクール 2013 年受験者対象第 1 回看護師国家試験対策テスト 解答・解説, 老年看護学, メディカ出版, 大阪

北村有香 (2012) : メディカコンクール 2013 年受験者対象第 2 回看護師国家試験対策テスト 解答・解説, 老年看護学, メディカ出版, 大阪

2. 論文

- 中山紳, 土手友太郎, 横山浩誉他(2012): 大学職員を対象とした行動変容ステージと特定健康診査との縦断的な関連 (Longitudinal Relationships between Stages of Changes in the Transtheoretical Model and Annual Data Changes in Mandatory Routine Health Checkups of University Faculty), 日本職業・災害医学会会誌, 60(3), 165-175.
- 中山紳, 土手友太郎, 横山浩誉他 (2012): 職域健診における腹囲と内臓脂肪量基準による行動変容意思および健診結果の検討, 成人病と生活習慣病, 42(3), 622-623.
- 北村有香, 白井みどり, 佐々木八千代他(2012): 施設入所高齢者の車いす座位姿勢における下肢周径の経時的変化, 日本老年看護学会誌「老年看護学」, 17(1), 91-97.
- 北村有香, 白井みどり(2012): 原因・症状別高齢者の浮腫ケア (前篇), 臨床老年看護, 19(6), 42-46.
- 北村有香, 佐々木八千代, 白井キミカ(2012): 日常的なケアに生かす椅子・車いすの選択と調整方法, コミュニティケア, 14(13), 20-23.
- 北村有香, 白井みどり(2012): 原因・症状別高齢者の浮腫ケア (後篇), 臨床老年看護, 20(1), 110-113.
- 横山浩誉, 北村有香, 小林貴子他 (2013): 看護職のメンタルヘルス対策に関する実態調査, 大阪医科大学看護研究雑誌, 3, 201-207.
- 土手友太郎, 吉田久美子, 横山浩誉他 (2013): 大学教職員におけるメタボリックシンドローム発症状況と業務内容および生活習慣による影響, 大阪医科大学看護研究雑誌, 3, 138-146
- カルデナス暁東, 西頭知子, 月野木ルミ, 小林貴子 (2013): 日本私立看護系大学の看護学教育における国際交流活動に関する実態調査, 大阪医科大学看護研究雑誌, 3, 147-156

3. 学会発表

- 仁科聖子, 北村有香, 松尾淳子, 小林貴子: 介護保険施設における高齢者ケアの看護・介護の協働と連携に関する文献検討, 第17回日本保健医療行動科学会学術大会抄録集, 54.
- 北村有香, 白井みどり: 施設入所高齢者の下肢浮腫軽減に向けた臥床休養の試み, 第17回日本老年看護学会抄録集, 175.
- 土手友太郎, 林江美, 横山浩誉 (2012): 効率的な保健指導計画のための保健指導の希望状況および行動変容のステージの視点からの検討, 第53回日本人間ドック学会学術大会抄録集 27 (2), 293.
- 白田寛, 河野公一, 横山浩誉 (2012): 病院職員の勤務環境改善・向上に関する調査研究, 第71回日本公衆衛生学会総会抄録集, 570.
- 林江美, 土手友太郎, 横山浩誉 (2012): 病院職員の勤務環境改善・向上に関する調査研究, 第71回日本公衆衛生学会総会抄録集, 570.
- 白田寛, 横山浩誉, 北村有香他 (2012): 勤務環境ならびに心の健康に関するアンケート調査2011医療従事者のメンタルヘルスケア～より喜ばれる医療を目指して～調査結果報告, 第36回大阪府医師会医学会総会抄録集, 59.

小見山麻紀, 土手友太郎, 横山浩誉他 (2012): 特定健康診査結果の2年間の縦断的变化における行動変容ステージの観点からの検討, 第60回日本職業・災害医学会会誌 60, 215.

林江美, 土手友太郎, 横山浩誉他 (2012): 効率的な保健指導計画のための保健指導の希望状況および行動変容のステージと生活習慣の検討, 第60回日本職業・災害医学会会誌 60, 214.

母性看護学・助産学領域

1. 著書

横尾京子, 常盤洋子, 岡永真由美, 井村真澄, 佐々木綾子他 (2012): 助産師基礎教育新テキスト 第6巻, 横尾京子(編), 99-120頁, 日本看護協会出版会.

佐山光子, 関島香代子, 佐藤悦, 安藤真由美, 定方美恵子, 佐々木綾子他 (2012), ナーシング・グラフィカ母性看護技術, 横尾京子・中込さと子(編), 42-81頁, メディカ出版.

林ひろみ, 峰馨, 大平光子, 井上尚美, 石走知子, 佐々木くみ子, 大月恵理子, 長谷川ともみ (2012): 母性看護学Ⅱマタニティサイクル(看護学テキストNICE), 第1版, 220~132頁, 236~244頁, 250~297頁, 南江堂.

西頭知子, 佐々木綾子, カルデナス暁東他 (2012): メディカコンクール 2013年受験者対象第1回看護師国家試験対策テスト(解答・解説)母性看護学領域出題, 45頁, 111~112頁, メディカ出版.

西頭知子, 佐々木綾子, 佐々木くみ子他 (2012): メディカコンクール 2013年受験者対象第2回看護師国家試験対策テスト(解答・解説), 母性看護学領域出題, 18, 49, 51頁, メディカ出版.

西頭知子, 佐々木綾子, 佐々木くみ子他 (2012): メディカコンクール 2013年受験者対象第3回看護師国家試験対策テスト(解答・解説), 母性看護学領域出題, 120, 44頁, メディカ出版.

2. 論文

久保田遥香, 波崎由美子, 佐々木綾子 (2012): 看護系と教育系女子大生における子宮頸がん検診・HPVワクチン接種に関する実態と認識, 福井県小児保健協会会報, 15, 21-24.

佐々木綾子, 波崎由美子, 瀬戸知恵 (2012): 子ども・母親世代・教育担当者がリンクする子宮頸がん検診とHPVワクチンに関する健康教育プログラムの開発と評価 (2012) ⇨, 福井県小児保健協会会報, 15, 17-20.

佐々木綾子, 西頭知子, 佐々木くみ子他 (2013): 助産所における垂直位分娩が母児に及ぼす影響, 大阪医科大学看護研究雑誌, 3, 178-185.

佐々木綾子, 西頭知子, 佐々木くみ子他 (2013): 日英における助産師の会陰裂傷縫合の現状からみたわが国の課題, 大阪医科大学看護研究雑誌, 3, 194-200.

佐々木綾子, 西頭知子, 佐々木くみ子他 (2013): 育児期母親に対する子宮頸がん検診意識の向

- 上をめざしたセミナーの評価, 大阪医科大学看護研究雑誌, 3, 213-219.
- 西頭知子, 佐々木くみ子, 佐々木綾子(2013): 過疎地中学校の性教育の現状分析から過疎地中学校のセクシュアリティ教育構築への提言, 大阪医科大学看護研究雑誌, 3, 109-119.
- 西頭知子, 佐々木くみ子, 末原紀美代(2012): 過疎地に住む中学生の性行動と性意識に関する調査研究, 母性衛生, 53(1), 81-88.
- 古山美穂, 佐保美奈子, 西頭知子他(2012): 養育期にある母親及び父親が認知する健康な家族機能を支える要因, 子ども家庭福祉学, 12, 45-55.
- 西頭知子, 佐々木くみ子, 佐々木綾子(2013): 過疎地中学校教師のセクシュアリティに関する教育への取り組み, 大阪医科大学看護研究雑誌, 3, 18-28.
- カルデナス暁東, 西頭知子, 月野ホルミ他(2013): 日本私立看護系大学の看護学教育における国際交流活動に関する実態調査, 大阪医科大学看護研究雑誌, 3, 147-156.
- 佐々木くみ子, 竹岡千尋, 田口真里, 倉本真悠, 吉田真理子, 丹治恵美, 西頭知子, 佐々木綾子(2013): 胎児付属物の娩出後の観察項目および観察基準に関する検討, 大阪医科大学看護研究雑誌, 3, 37-46.
- 佐々木くみ子, 倉本真悠, 吉田真理子, 田口真里, 竹岡千尋, 丹治恵美, 西頭知子, 佐々木綾子(2013): 胎児付属物の分娩後の観察方法に関する検討, 大阪医科大学看護研究雑誌, 3, 47-57.

3. 学会発表

- 瀬戸知恵, 佐々木綾子, 波崎由美子(2012): 分娩後のシャワー浴及び入浴開始時期に関する研究, 第14回日本母性看護学会抄録集, 神戸市.
- 笹下優姫, 笹下愛海, 笹下弘子, 波崎由美子, 佐々木綾子(2012): 立産が会陰裂傷に及ぼす影響, 第25回福井県母性衛生学会抄録集, 16, 福井市.
- 古屋汐梨, 瀬戸知恵, 波崎由美子, 山田須美恵, 佐々木綾子(2012): HPVワクチン接種対象の娘を持つ母親の子宮頸がん検診及びワクチン接種に関する認識, 第25回福井県母性衛生学会抄録集, 22, 福井市.
- Ayako Sasaki, Hiroataka Kimiyo Suehara, Michiko, et al(2012): Basic research on the Development of Parenthood: Comparison of the Brain Activation Effects of Caring for Infants in Mothers and Fathers. The 9th International Conference of the Global Network of WHO Collaborating Centres for Nursing and Midwifery, 114, Kobe.
- 佐々木綾子, 小坂浩隆, 波崎由美子他(2012): 育児期母親における母性意識の高低と局所脳活動の関係, 第4回日本子ども虐待医学研究会学術集会抄録集, 18, 大阪市.
- 佐々木綾子, 小坂浩隆, 岡沢秀彦(2012): 青年期男女の親性レベルの違いが乳児の泣きに対する局所の活動へ及ぼす影響, 第31回日本思春期学会総会・学術集会抄録集, 91, 軽井沢町
- Haruka Kubota, Ayako Sasaki, Yumiko Namizaki (2012): Implementation and Evaluation of a Cervical and Breast Cancer Awareness Education Program for Non-Medical Female University Students ICOWHI 19th International Congress on

“Women’s Health 2012, Thailand

Yumiko Namizaki Chie Seto, Ayako Sasaki (2012): Knowledge and awareness regarding cervical cancer, cervical cancer screening and HPV vaccination: comparison of female university students majoring in medical and non-medical fields ICOWHI 19th International Congress on “Women’s Health 2013, Thailand

宇佐美知世子, 蒔田侑子, 畑奈瑠美, 玉崎有香, 安野高子, 小寺美智子, 佐々木綾子(2012): 切迫早産妊婦に対するアロマ芳香浴のリラクゼーション効果に関する検討, 第43回日本看護学会 母性看護抄録集, 甲府市.

佐々木綾子, 波崎由美子(2012): 育児期母親における母性意識の高低と局所脳活動の関係, 第32回日本看護科学学会学術集会 日本看護学術集会講演集, 538, 東京.

佐々木くみ子, 西頭知子, 佐々木綾子(2012): 看護職による分娩前後の胎児付属物の観察とアセスメントに関する研究, 第32回日本看護科学学会学術集会 日本看護学術集会講演集 32, 538, 東京.

西頭知子, 佐々木くみ子, 佐々木綾子(2012): 過疎地中学校におけるセクシュアリティ教育の実態調査, 第32回日本看護科学学会学術集会 第32回日本看護科学学会学術集会講演集, 58, 東京.

急性期成人看護学領域

1. 著書

山内栄子 (2013): がん手術患者に対するリハビリテーション看護 喉頭がんで喉頭全摘術を受けた患者の看護, 雄西智恵美・秋元典子編, がん看護 1・2月増刊号 手術をめぐるがん看護 意思決定支援から術後リハビリテーション看護まで, 240-242, 南江堂, 東京.

山内栄子 (2013): がん手術患者に対するリハビリテーション看護 舌がんで舌切除術を受けた患者の看護, 雄西智恵美・秋元典子編, がん看護 1・2月増刊号 手術をめぐるがん看護 意思決定支援から術後リハビリテーション看護まで, 271-273, 南江堂, 東京.

2. 論文

山内栄子, 秋元典子 (2012): 喉頭全摘術を受ける頭頸部がん患者の術前から退院後1年間の他者とのコミュニケーションを通じたコミュニケーション方法の再構築過程, 日本がん看護学会誌, 26 (1), 12-21.

林優子, 谷水(太田)名美, 赤澤千春他 (2012): 臓器移植における倫理的な看護場面での看護師の苦悩～1事例の分析を通して～, 大阪医科大学看護研究雑誌, 3, 129-137.

3. 学会発表

林優子, 谷水(太田)名美, 赤澤千春 (2012): 臓器移植における看護場面での看護師の苦悩, 第8回日本移植・再生医療看護学会学術集会, (京都), 2012. 日本移植・再生医療看護学会誌, 8(1), 42.

小林道太郎, 山内栄子, 竹村淳子他 (2012): 看護学教科書の記述分析からみたチーム医療の体制, 第38回日本看護研究学会学術集会, (沖縄), 363.

竹村淳子, 小林道太郎, 山内栄子他 (2013): 看護職からみたチーム医療の実態-1 看護師のインタビューから-, 日本看護研究学会 第26回近畿・北陸地方会学術集会, (三重), 55.

慢性成人看護学領域

1. 著書

カルデナス暁東: メディカコンクール 2013年受験者対象第3回看護師国家試験対策テスト, 39頁, 103頁, 105頁の成人看護学部分を担当, 株式会社メディカ出版.

2. 論文

田中克子 (2012): 1型糖尿病女性が妊娠・出産に臨むための教育プログラムの開発と検証, 大阪医科大学雑誌, 71(3), 27-38.

斉藤早苗, 辻本裕子, カルデナス暁東, 田中克子, 吉田和枝, 兼子加寿子, 末原紀美代: 中国山西省における母子保健学術交流および医療施設の視察からリプロダクティブヘルス推進への一考察, 梅花女子大学看護学部紀要, 3, 13-18.

カルデナス暁東, 西尾ゆかり, 福井奈央, 田中克子, 森脇真一, 末原紀美代: わが国の医療現場におけるメイクセラピーの応用に関する文献的研究, 大阪医科大学看護研究雑誌, 3, 69-77.

カルデナス暁東, 西頭知子, 月野木ルミ他: 日本私立看護系大学の看護学教育における国際交流活動に関する実態調査, 大阪医科大学看護研究雑誌, 3, 147-156.

西尾ゆかり, カルデナス暁東, 田中克子: 糖尿病患者支援におけるチーム医療を推進するための看護師の役割-他職種から期待される役割-, 大阪医科大学看護研究雑誌, 3, 208-212.

3. 学会発表

田中克子, カルデナス暁東, 西尾ゆかり他 (2012): 1型糖尿病女性の安全・安心な妊娠・出産を支援する教育プログラムの開発と評価-実施前後における誤回答の変化の分析-, 平成24年11月, 第28回日本糖尿病・妊娠学会年次学術集会プログラム・講演集 (東京) S-69

4. 報告書

田中克子 (2012) : 糖尿病女性が安全に安心して妊娠・出産・育児に臨めるためのケアプログラムの開発と評価 科研課題番号 17592257 基盤研究 (C) (1) 研究期間 : 平成 20 年度～平成 24 年度 6 月

小児看護学領域

1. 論文

泊祐子, 竹村淳子, 松倉とよ美他 (2012) : 家族の力を引き出す、子どもの力を引き出す看護の技, 日本看護研究学会雑誌, 35(1), 48-52.

若山志ほみ, 泊祐子(2012): 小児看護アセスメントツールの作成と実施における教育的支援, 日本小児看護学会誌, 21(3), 52-58.

泊祐子, 増尾美帆, 大西文子, 竹村淳子, 神道那実, 山地亜希 (2013) : 学士課程教育における「実践と理論の統合」に焦点をあてた看護学実習のストラテジーの検討, 大阪医科大学看護学部研究雑誌, 3, 186-193.

川端康雄, 元村直靖, 泊祐子, 山内栄子, 真継和子, 竹村淳子, 任和子, 宮田郁, 荒木里美, 米田博(2013) : 動機づけ面接によりウェイトコントロールの効果が認められた肥満症の 1 例, 大阪医科大学看護学部研究雑誌, 3, 157-167.

山地亜希, 桑田弘美(2013) : 小児がん患児の退院後の日常生活管理に対する母親の迷いとケアの実際, 大阪医科大学看護学部研究雑誌, 3, 78-89.

竹村淳子, 津島ひろ江(2013) : 健康障害のある子どもとその家族のレジリエンスの特徴と援助に関する文献検討, 医学と生物学, 157(3), 298-306.

2. 学会発表

泊祐子, 竹村淳子, 古株ひろみ他 (2012) : 特別支援学校において医療的ケアを担う看護師の雇用形態により生じた問題とその対策, 日本看護研究学会第 38 回学術集会 (沖縄), 168.

此島由紀, 泊祐子(2012) : 祖父母・孫関係の視点を踏まえた高齢者介護にかかわる対する文献検討, 日本看護研究学会第 38 回学術集会 (沖縄), 158.

小林道太郎, 山内栄子, 竹村淳子他(2012) : 看護学教科書の記述分析からみたチーム医療の体制, 日本看護研究学会第 38 回学術集会 (沖縄), 363.

馬場恵子, 泊祐子(2012) : 医療的ケアが必要な子どもをもつ養育者が在宅療養を受け入れるプロセス, 日本小児看護学会第 22 回学術集会 (盛岡) 208.

泊祐子, 竹村淳子, 古株ひろみ(2012) : 特別支援学校に勤務する看護師が医療的ケアを実施

- する上で感じる問題, 日本小児看護学会第 22 回学術集会 (盛岡) 116.
- 山地亜希, 桑田弘美(2012): 小児がん患児と家族への退院指導と在宅ケアマネジメントの実
際, 日本小児看護学会第 22 回学術集会 (盛岡) 131.
- 秋元典子, 泊祐子(2012): 理事会企画 学会投稿を通して研究能力を向上させよう! -採択
される論文を書くために-, 日本看護学教育学会第 22 回学術集会 (熊本) 119.
- 泊祐子, 竹村淳子, 山地亜希他 (2012): 学士課程教育における小児看護学実習の内容とス
トラテジーの検討. 日本看護学教育学会第 22 回学術集会 (熊本) 158.
- 馬場恵子, 古株ひろみ, 泊祐子(2012): 医療的ケアが必要な子どもをもつ養育者が在宅療養
を受け入れるプロセスにおける看護支援の検討, 日本家族看護学会第 19 回学術集会 (東
京) 141.
- 竹村淳子, 津島ひろ江(2012): 健康問題のある子どもとその家族のレジリエンスに関する文
献検討, 日本家族看護学会第 19 回学術集会 (東京) 132.
- 山地亜希, 桑田弘美(2012): 退院後の小児がんの子どもが日常生活を拡大する際の母親のケ
ア, 日本家族看護学会第 19 回学術集会 (東京) 116.
- 桑田弘美, 山地亜希(2012): FOP (進行性骨化性線維異形成症) 患児の異所性骨化に伴う
家族の体験, 日本家族看護学会第 19 回学術集会 (東京) 119.
- 山地亜希, 桑田弘美(2012): 幼児期と学童期にある小児がん患児の家族が行う退院後の日常
生活管理の実際, 第 59 回日本小児保健協会学術集会 (岡山) 172.
- 山地亜希, 桑田弘美(2012): 小児がん患児の退院後に家族が遭遇するジレンマ, 第 27 回
滋賀県小児保健学会 (草津) 16-17.
- Yamaji Aki, Soga Hiroyoshi, Shirasaka Maki, Tomari Yuko, Kitawaki Tomomi, Kuwata
Hiromi (2013): THE ACTUAL SITUATION OF HOME CARE MANAGEMENT OF
CHILDREN WITH CANCER AND THEIR FAMILIES, 16th EAST ASIAN FORUM
OF NURSING SCHOLARS (タイ, バンコク) 157.
- Kitawaki Tomomi, Soga Hiroyoshi, Shirasaka Maki, Yamaji Aki, Kuwata Hiromi
(2013): TRANSMISSION OF NURSING KNOWLEDGE AND SKILLS BETWEEN
NURSES IN OPERATION ROOM, 16th EAST ASIAN FORUM OF NURSING
SCHOLARS (タイ, バンコク) 266.
- 竹村淳子, 小林道太郎, 山内栄子他 (2013): 看護師からみたチーム医療の実態 - 1 看護
師のインタビューから-. 日本看護研究学会第 26 回近畿・北陸地方会学術集会 (和歌山)
55.

精神看護学領域

1. 論文

荒木孝治, 瓜崎貴雄, 岡部英子他 (2013) : 精神科看護師の自律性についての検討と身体合併症看護への不安との関連, 大阪医科大学看護研究雑誌, 3, 29-36.

荒木孝治, 瓜崎貴雄, 正岡洋子他 (2013) : 精神科病院で勤務する看護師の身体合併症看護への不安に関する検討, 大阪医科大学看護研究雑誌, 3, 100-108.

在宅看護学領域

1. 論文

真継和子 (2012) : 地域を基盤とした子育て支援—子育ての当事者である親をケアするつながりの構築は可能なのか—, 日本保健医療行動科学会年報 Vol.27, 97-104.

真継 和子, 岡本 里香, 峯森 好美他 (2013) : 住民参加と協働によるコミュニティサロンを拠点とする健康づくりへの取り組み—「あいあいサロン」の活動と評価—, 大阪医科大学看護学部研究雑誌, 3, 168-177.

川端 康雄, 元村 直靖, 泊 祐子, 山内 栄子, 真継 和子, 竹村 淳子, 任 和子, 宮田 郁, 荒木 里美, 米田 博 (2013) : 動機づけ面接によりウェイトコントロールの効果が認められた肥満症の1例, 大阪医科大学看護学部研究雑誌Vol3, 157-167.

2. 学会発表

真継和子 (2012) : 配偶者を介護する介護者にとって介護を継続する上での重要他者とその相互作用, 第38回日本看護研究学会学術集会, 319. (沖縄市)

小林道太郎, 山内栄子, 竹村淳子, 真継和子 (2012) 看護学教科書の記述分析からみたチーム医療の体制, 第38回日本看護研究学会学術集会, 363. (沖縄市)

Kazuko Matsugi, Chijiyo Ito, Rika Okamoto, Yoshimi Minemori (2013) : Significance of A Salon for Elderly Participants in Japan, The 16th East Asian Forum of Nursing Scholars, 334. (Bangkok, Thai)

竹村淳子, 小林道太郎, 山内栄子, 真継和子 (2013) : 看護職からみたチーム医療の実態—1看護師のインタビューから—, 日本看護研究学会 第26回近畿・北陸地方会学術集会, 55. (和歌山市)

公衆衛生看護学領域

1. 論文

谷垣静子, 岡本玲子, 小寺さやか, 俵志江, 岩本里織, 草野恵美子, 鳩野洋子(2012) : 大学

- 院における保健師等のコンピテンシーを高める学習成果創出型プログラムの検討ー保健師等の経験 10 年以上の受講生の学習過程を通してー, 保健の科学, 54 (9), 641-646.
- Tsukinoki R, Murakami Y, Huxley R, Ohkubo T, et al; Asia Pacific Cohort Studies Collaboration (2012): Does body mass index impact on the relationship between systolic blood pressure and cardiovascular disease?: meta-analysis of 419 488 individuals from the Asia pacific cohort studies collaboration. Stroke. 43(6):1478-83.
- Murakami Y, Huxley RR, Lam TH, Tsukinoki R, et al; Asia Pacific Cohort Studies Collaboration (2012): Diabetes, body mass index and the excess risk of coronary heart disease, ischemic and hemorrhagic stroke in the Asia Pacific Cohort Studies Collaboration. Prev Med. 54(1):38-41.
- 月野木 ルミ, 村上 義孝(2012): アジア太平洋地域における全死亡に占める脳卒中病型別死亡割合の動向 政府統計に基づく検討, 厚生学の指標, 59(12), 1-6.
- 村上 義孝, 月野木 ルミ, 上島 弘嗣(2012): APCSC(Asia Pacific Cohort Studies Collaboration). メタアナリシスの紹介と臨床に与えたImpact, 動脈硬化予防, 11(2), 13-19.
- 中山 紳, 土手 友太郎, 林 江美, 岡本 里香, 黒川 博史, 横山 浩誉, 河野 公一(2012): 大学職員を対象とした行動変容ステージと特定健康診査との縦断的な関連(Longitudinal Relationships between Stages of Changes in the Transtheoretical Model and Annual Data Changes in Mandatory Routine Health Checkups of University Faculty), 日本職業・災害医学会会誌, 60(3), 165-175.
- Tomotaro DOTE, Emi Hayashi, Shin NAKAYAMA, Maki KOMIYAMA, Ichishi HAYASHIDA, Aiko Fujita, Toshiyuki KUSABIRAKI, Yoshimi TANIMOTO, Misuzu WATANABE, Koichi KONO, Hirofumi KUROKAWA, Michiaki TAKII ,Hiroataka Yokoyama, Kumiko YOSHIDA, Emiko KUSANO, Rumi TSUKINOKI (2012): Association between request for health counseling and mandatory routine health checkup parameters in middle-aged Japanese men with metabolic syndrome. Bulletin of Osaka Medical College.
- 土手 友太郎, 吉田 久美子, 瀧井 道明, 草野 恵美子, 月野木 ルミ, 黒川 博史, 横山 浩誉, 中山 紳, 林 江美(2013): 大学教職員におけるメタボリックシンドローム発症状況と業務内容および生活習慣による影響, 大阪医科大学看護研究雑誌, 3, 138-146.
- Michie Nomura, Reiko Okamoto, Minori Tanaka, Mie Okuda, Keiko Koide, Saori Iwamoto, Emiko Kusano, Miki Saito, Masumi Nishida, Noriko Jojima, Emiko Kishi, Yoko Sakai, Chie Teramoto, Toshiko Tada, Ruriko Suzuki, Sachiyo Murashima (2013): Community Profile of the Tohoku Earthquake, 2011: Affected Areas as Perceived by External PHNs, Journal of Shikoku Public Health Society, 58 (1), 119-125.
- Michie Nomura, Reiko Okamoto, Keiko Koide, Saori Iwamoto, Emiko Kusano, Miki

Saito, Masumi Nishida, Takako Sao, Tomoko Kurata, Reiko Kan, Noriko Jojima, Emiko Kishi, Yoko Sakai, Chie Teramoto, Toshiko Tada, Ruriko Suzuki, Sachiyo Murashima (2013) : Health Concerns in Tsunami-Affected Areas as Perceived by External PHNs in Japan 2011, *Journal of Shikoku Public Health Society*, 58 (1), 126-133.

Toshiko Tada, Reiko Okamoto, Sachiyo Murashima, Ruriko Suzuki, Yoko Sakai, Emiko Kishi, Michie Nomura, Noriko Jojima, Masumi Nishida, Keiko Koide, Chie Teramoto, Emiko Kusano, Saori Iwamoto, Miki Saito (2013) : The Health and Livelihood of Seniors Affected by the Tsunami after the Great East Japan Earthquake, *Journal of Shikoku Public Health Society*, 58 (1), 134-140.

草野 恵美子, 奥野 ゆかり, 佐藤 文子, 和木 明日香, 浅見 恵梨子, 上田 恵子, 吉田 久美子(2013) : 乳幼児を育てる母親の「近所づきあいの程度」がその地域における「子育てのしやすさ感」に及ぼす影響, *大阪医科大学看護研究雑誌*, 3, 10-17.

草野 恵美子, 大浦 まり子, 野村 美千江 他 (2013) : 東日本大震災で被災した医療・福祉施設が遭遇した困難と活かされた強みおよび今後の課題, *大阪医科大学看護研究雑誌*, 3, 120-128.

カルデナス 暁東, 西頭 知子, 月野 木ルミ, 小林 貴子(2013) : 日本私立看護系大学の看護学教育における国際交流活動に関する実態調査, *大阪医科大学看護研究雑誌*, 3, 147-156.

黒川 博史(2013) : 若年成人男性におけるメタボリックシンドローム予防のための運動の行動変容に関する文献学的考察, *大阪医科大学看護研究雑誌*, 3, 3-9.

2. 学会発表

小出 恵子, 岡本 玲子, 草野 恵美子 他(2012) : 生活習慣病予防のための行動変容を促す保健指導における保健師のコア技術項目—モデルファイ調査を実施して—, *日本地域看護学会第15回学術集会講演集*, 72.

岡本 玲子, 岩本 里織, 多田 敏子, 西田 真寿美, 小出 恵子, 野村 美千江, 城島 哲子, 酒井 陽子, 草野 恵美子, 齋藤 美紀, 鈴木 るり子, 岸 恵美子, 寺本 千恵, 村嶋 幸代(2012) : 津波災害を受けた自治体職員の印象に残った被災後の業務, *日本地域看護学会第15回学術集会講演集*, 76.

岩本 里織, 岡本 玲子, 多田 敏子, 小出 恵子, 西田 真寿美, 鈴木 るり子, 野村 美千江, 酒井 陽子, 岸 恵美子, 城島 哲子, 草野 恵美子, 齋藤 美紀, 皿海 二子, 寺本 千恵, 村嶋 幸代(2012) : 東北大震災により被災を受けた自治体職員の被災後の身体的心理的苦悩—半年後の語りから—, *日本地域看護学会第15回学術集会講演集*, 77.

野村 美千江, 田中 美延里, 奥田 美恵, 岡本 玲子, 岸 恵美子, 鈴木 るり子, 酒井 陽子, 城島 哲子, 草野 恵美子, 岩本 里織, 小出 恵子, 齋藤 美紀, 西田 真寿美, 寺本 千恵, 多田 敏子, 村嶋 幸代(2012) : 津波災害被災地における外部支援保健師の対応, *日本地域看護学会第15回学術集会講演集*, 78.

- 齋藤美紀, 岩本里織, 城島哲子, 岡本玲子, 西田真寿美, 小出恵子, 野村美千江, 酒井陽子, 草野恵美子, 多田敏子, 鈴木るり子, 岸恵美子, 村嶋幸代, 寺本千恵(2012): 災害に備える保健師の平常時の情報管理, 日本地域看護学会第15回学術集会講演集, 79.
- Emiko Kusano, Keiko Koide, Michie Nomura, et al. (2012): .Public Health Nursing Activities Required in Normal Times for Disaster Prevention and Reduction: Based on Experience of PHNs following the Great East Japan Earthquake, The 9th International Conference of the Global Network of WHO Collaborating Centres, 75.
- 草野恵美子, 大浦まり子, 野村美千江他(2012): 被災地の医療福祉機関が遭遇した困難と活かされた強み、今後の課題, 第71回日本公衆衛生学会総会抄録集, 59(10), 485.
- 小出恵子, 草野恵美子, 野村美千江他(2012): 津波災害を経験した住民等が必要と考えた平時の防災・減災教育, 第71回日本公衆衛生学会総会抄録集, 59(10), 485.
- 小出恵子, 岡本玲子, 草野恵美子他(2012): 特定保健指導を実施している保健師に対する「保健指導技術向上プログラム」の試行と評価, 第1回日本公衆衛生看護学会学術集会抄録集, 154.
- 月野木ルミ, 岡村智教, 渡邊至他 (2012): The joint impacts of blood pressure and low-density lipoprotein cholesterol on cardiovascular disease in a 13-year cohort of urban Japanese: The Suita Study, 第44回日本動脈硬化学会総会・学術集会抄録集, 269.
- 月野木ルミ, 村上 義孝(2012): 甘味飲料摂取と肥満、高血圧、循環器疾患との関連 システムティック・レビュー, 第71回日本公衆衛生学会総会抄録集, 290.
- 中山 紳, 林 江美, 三井 剛, 谷本 芳美, 渡辺 美鈴, 河野 公一, 土手 友太郎, 岡本 里香, 黒川 博史, 横山 浩誉(2012): 職域健診における腹囲と内臓脂肪量基準による行動変容意思および健診結果の検討, 成人病と生活習慣病, 42(5), 622-623.
- 土手 友太郎, 林 江美, 中山 紳, 小見山 麻紀, 吉田 久美子, 瀧井 道明, 草野 恵美子, 月野木ルミ, 黒川 博史, 横山 浩誉(2012): 効率的な保健指導計画のための保健指導の希望状況および行動変容のステージの視点からの検討, 人間ドック, 27(2), 293.
- 林 江美, 土手 友太郎, 中山 紳, 小見山 麻紀, 黒川 博史, 横山 浩誉(2012): 効率的な保健指導計画のための保健指導の希望状況および行動変容のステージと生活習慣の検討, 日本職業・災害医学会会誌, 60 臨増, 214.
- 小見山 麻紀, 土手 友太郎, 林 江美, 中山 紳, 黒川 博史, 横山 浩誉, 河野 公一(2012): 特定健康診査結果の2年間の縦断的变化における行動変容ステージの観点からの検討, 日本職業・災害医学会会誌, 60 臨増, 215.
- 村上義孝, 月野木ルミ(2013): 国民生活基礎調査匿名データによる単独世帯と主観的健康観との関連－匿名データの学術活用(第一報)－第22回日本疫学会学術総会抄録集, 23(sup.1), 140.
- 月野木ルミ, 村上義孝(2013): 国民生活基礎調査匿名データによる単独世帯と内分泌代謝疾患通院との関連－匿名データの学術活用(第二報)－第22回日本疫学会学術総会抄録集,

23(sup.1), 140, 優秀ポスター賞.

Tsukinoki R, Murakami Y (2013): Association between employment and ambulatory treatment of cardiovascular disease and metabolic disease in Japan: the Comprehensive Survey of Living Conditions, Sixth ICOH International Conference on Work and Cardiovascular diseases, Tokyo, Japan.

土手 友太郎, 林 江美, 中山 紳, 小見山 麻紀, 草開 俊之, 林田 一志, 藤田 愛子, 谷本 芳美, 渡辺 美鈴, 瀧井 道明, 草野 恵美子, 月野木 ルミ, 黒川 博史, 横山 浩誉, 吉田 久美子(2013) : メタボリックシンドロームのわが国および世界統一の判定基準による該当者の比較検討, 日本成人病(生活習慣病)学会会誌, 39, 70.

Ryoko Gasawa, Reiko Okamoto, Keiko Koide, Saori Iwamoto, Emiko Kusano, Yoko Hatono, Maki Nakagawa (2013): The scales of expertise, occupational factors, and learning factors related to the hope of going to a graduate school for public health nurses, The 5th International Conference on Community Health Nursing Research, 9.

Yoko Hatono, Reiko Okamoto, Fusami Nagano, Saori Iwamoto, Emiko Kusano, Keiko Koide (2013): The development of an action evaluation scale for showing results in healthcare activity and the examination of its related factors, The 5th International Conference on Community Health Nursing Research, 20.

Emiko Kusano, Reiko Okamoto, Yoko Hatono, et al. (2013): Professional competency and learning behavior associated with the use of theory in public health nurse activity, The 5th International Conference on Community Health Nursing Research, 24.

Reiko Okamoto, Yoko Hatono, Fusami Nagano, Saori Iwamoto, Emiko Kusano, Keiko Koide (2013): Creation of an action evaluation scale for showing the necessity of health care projects and examination of related factors, The 5th International Conference on Community Health Nursing Research, 25.

VIII. 社会活動

Ⅷ 社会活動

専門基礎：瀧井 道明

日本消化器病学会評議員

日本消化器病学会近畿支部評議員

日本内科学会近畿地方会評議員

日本消化器内視鏡学会近畿支部評議員

日本消化吸収学会評議員

¹³C法消化吸収能&肝代謝能検査標準化に向けた検討委員会委員

専門基礎：土手 友太郎

日本衛生学会評議委員

日本産業衛生学会近畿地方会幹事

日本産業衛生学会近畿地方会代議員

厚生労働省/医員（関西空港検疫所）

高槻市役所/産業医

大阪医科大学附属病院看護部，研究研修，講師，「統計処理ソフト(JMP；ジャンプ ver. 9.0)による量的データ分析データ入力統計処理演習， 2012

大阪医科大学看護学部，看護研究セミナー，講師，「分析の方法とデータ収集・質問紙法」，2012

専門基礎：元村 直靖

日本トラウマティックストレス学会理事

日本神経心理学会評議員

日本高次脳機能障害学会評議員

日本保健医療行動科学会評議員

日本神経心理学会雑誌編集委員

日本行動療法学会誌編集委員

International Journal of child development and Mental Health, Editorial board

Raganagarindre research center, Honorary adviser , Thailand

基礎看護学領域

道重 文子

日本看護研究学会監事

日本口腔ケア学会評議員

日本看護診断学会評議員

第13回日本看護技術学会学術集会企画運営委員

第18回日本看護診断学会学術集会企画実行委員

第33回日本看護科学学会学術集会企画委員

第39回日本看護研究学会学術集会査読委員

大阪府看護協会救急看護認定看護師教育課程，「看護過程」，2012

大阪府看護協会認定看護師教育課程（がん性疼痛），講師，「がん性疼痛を有する患者への看護援助技術：清潔ケア（口腔ケア）」，2012

大阪府看護協会認定看護管理者教育課程セカンドレベル，講師，「看護管理実践計画書作成」，2012

滋賀県看護協会認定看護管理者教育課程セカンドレベル，講師，「情報テクノロジー（根拠に基づく看護実践＜EBN＞の考え方）」

大阪医科大学附属病院看護部研修，講師，「NANDA・NOC・NICの基礎とリンケージ」，2012

大阪医科大学附属病院看護部研修，講師，「看護実践と理論」，2012

市立池田病院看護部，スーパーバイザー

西園 貞子

日本移植・再生医療看護学会選挙管理委員

日本移植・再生医療看護学会評議員

日本看護研究学会近畿・北陸地方会，ニュースレター担当委員

第32回日本看護科学学会学術集会実行委員

第33回日本看護科学学会学術集会企画委員

第8回日本移植・再生医療看護学会学術集会，座長

第22回関西教育学会学術集会，座長

日本精神科看護技術協会看護教育課程研修会，講師，「看護教育計画、実習指導計画」2012

京都府看護協会，京都市看護職能力向上・定着確保研修会，講師，「共に育む能動的学習能力」，2012.10

大学コンソーシアム京都，第18回FDフォーラム，シンポジスト，「学生間の協同的学習を促す授業方法」，2013.3

松尾 淳子

日本褥瘡学会評議員

第 14 回日本褥瘡学会学術集会ランチョンセミナー，講師，「一步踏み込んだ褥瘡予防ケア～ベッドメイキングと圧再分配の関係～」，2012

パラマウンドベッド 褥瘡対策パワーアップセミナー，講師，「褥瘡対策における看護師の役割 ～私たちに何ができるか～」，2012

第 10 回日本褥瘡学会学術集会近畿地方会スポンサーDシンポジウム，講師，「一步進んだ褥瘡予防ケア～体圧分散寝具管理の方法～」，2012

パラマウンドベッド株式会社受託研究，圧力再分配を目的とするマットレス及び、背上時の圧力再分配機能付きエアマットレスの評価と検証

第一東和会病院褥瘡研修，講師

第二東和会病院褥瘡研修，講師

原 明子

第 8 回日本移植・再生医療看護学会学術集会実行委員

第 18 回日本看護診断学会学術集会実行委員

第 32 回日本看護科学学会学術集会実行委員

母性看護学・助産学領域

佐々木 綾子

日本母性看護学会研究促進理事

日本看護科学学会社会貢献委員

第 32 回日本看護科学学会実行委員

第 14 回日本母性看護学会査読委員

The 9th International Conference of the Global Network of WHO Collaborating Centres for Nursing and Midwifery,kobe, 査読委員

第 27 回日本助産学会査読委員

福井愛育病院看護研究セミナー，講師，「もっと気軽に看護研究！研究プロセスのポイントとコツをつかみましよう」，2012

福井県永平寺町 子宮頸がん啓発セミナー，講師，「育児期女性のためのちょっとホットな情報 大切な育児期女性の健康を守る子宮頸がん検診と予防ワクチンのおはなし」，2012

日本助産師会福井県支部研修会，講師，「子宮頸がん検診と HPV ワクチンの啓発について」，2012

佐々木 くみ子

日本母性看護学会幹事

大阪府看護協会開催看護学会査読委員

第 14 回日本母性看護学会査読委員

第 38 回日本看護研究学会査読委員
市立柏原病院看護部看護研究，講師，研究指導

西頭 知子

第 32 回日本看護科学学会実行委員

小児看護学領域

泊 祐子

日本看護研究学会理事（涉外担当）
日本看護研究学会専任査読委員
日本看護学教育学会評議員、編集委員会委員
日本看護学教育学会編集委員会委員
日本家族看護学会理事（広報涉外担当）
日本家族看護学会評議員
第 33 回日本看護科学学会学術集会企画委員（事務統括）
大阪府看護協会実習指導者講習会，講師，「看護大学教育」，2012

竹村 淳子

第 33 回日本看護科学学会学術集会企画委員（編集）

山地 亜希

第 32 回日本看護科学学会学術集会実行委員

急性期成人看護学領域

林 優子

日本移植・再生医療看護学会理事長・事務局
日本移植・再生医療看護学会看護倫理検討委員
日本慢性看護学会理事
日本慢性看護学会政策委員会委員長
公益法人日本看護科学学会代議員
第 32 回日本看護科学学会学術集会企画委員
看護系学会等社会保険連合看護技術検討委員
一般社団法人日本移植学会 認定レシピエント移植コーディネーター認定合同委員
公益社団法人日本看護協会 認定看護師認定実行委員会（透析看護）委員長
公益社団法人日本看護協会 認定看護師認定委員

公益社団法人日本看護協会 認定看護師カリキュラム検討ワーキンググループ（透析看護）委員長
医道審議会専門委員（保健師助産師看護師分科会員）
日本看護教育学会誌専任査読委員
日本慢性看護学会誌専任査読委員

山内 栄子

第 33 回日本看護科学学会学術集会企画委員

谷水（太田） 名美

日本移植・再生医療看護学会事務局
日本移植・再生医療看護学会広報委員
日本移植・再生医療看護学会看護倫理検討委員
第 8 回日本移植・再生医療看護学術集会企画実行委員
日本移植・再生医療看護学会評議員
看護質的統合法（KJ 法）研究会世話人

慢性期成人看護学領域

田中克子

「糖尿病と妊娠」学会評議員
第 33 回日本看護科学学会学術集会企画委員
大阪医科大学看護学部看護実践研究セミナー，講師，「看護研究の進め方」2012
中国山西省中医学院看護学部臨床看護学術交流会，講師，「アトピー性皮膚炎女性患者のスキンケアのあり方」，2012

カルデナス暁東

第 33 回日本看護科学学会学術集会企画委員
中国山西省中医学院看護学部臨床看護学術交流会，講師，「アトピー性皮膚炎女性患者のスキンケアのあり方」，2012
大阪医科大学看護学部第 1 回国際交流シンポジウム，講師，「看護学教育における異文化理解」，2012

西尾ゆかり

第 32 回日本看護科学学会学術集会実行委員
中国山西省中医学院看護学部臨床看護学術交流会，講師，「アトピー性皮膚炎女性患者のスキンケアのあり方」，2012

老年看護学領域

小林貴子

日本糖尿病教育・看護学会研修推進委員会委員

第 27 回日本保健医療行動科学学会実行委員

第 33 回日本看護科学学会学術集会企画委員

第 17 回日本糖尿病教育・看護学会学術集会企画運営委員及び座長，シンポジウム I 「実践力を高める一学び、経験、再考へー」，2012

平成 24 年度日本糖尿病教育・看護学会，「糖尿病重症化予防フットケア研修会」企画運営

平成 24 年度日本糖尿病教育・看護学会，「糖尿病重症化予防腎症予防研修会」企画運営

認知症を理解し地域で支える会専門委員

認知症を理解し地域で支える会「認知症家族・関わる人の情報交換・相談会」企画運営，総合司会

認知症を理解し地域で支える会「認知症サポーターフォローアップ研修」企画

「木曜事例会」運営

北村有香

第 33 回日本看護科学学会学術集会企画委員

認知症を理解し地域で支える会の専門委員

認知症を理解し地域で支える会「認知症家族・関わる人の情報交換・相談会」企画

「木曜事例会」運営

横山浩誉

大阪府医師会勤務医部会第 2 ブロック研修会，講師，「看護職者のメンタルヘルスケア」，2012

医療法人社団八洲会袋井みつかわ病院看護部教育委員会研修会，講師，「高齢者看護」「認知症」他，2012

認知症を理解し地域で支える会の専門委員

認知症を理解し地域で支える会「認知症家族・関わる人の情報交換・相談会」企画運営，相談員

認知症を理解し地域で支える会主催「認知症サポーターフォローアップ研修」企画

「木曜事例会」運営

精神看護学領域

荒木孝治

日本精神保健看護学会誌専任査読委員

日本移植・再生医療看護学会誌専任査読委員

大阪府立精神医療センター治験審査委員会外部委員
大阪府立精神医療センター臨床研究倫理審査委員会外部委員
医療法人稲門会いわくら病院看護研究研修会，講師，「ケースレポートへの取り組み」，
2012

瓜崎貴雄

日本精神科看護技術協会大阪支部看護研究発表会評価委員

在宅看護学領域

真継和子

日本看護研究学会近畿・北陸地方会世話人
日本看護学教育学会専任査読委員
第33回日本看護科学学会学術大会企画委員
社団法人大阪府看護協会教育委員会教育委員長
NPO法人SEAN役員（監事）
ケアコミュニティ「あいあいサロン」企画・運営責任者
特定医療法人西陣健康会堀川病院看護部研修「看護倫理事例検討会」企画・運営責任者
大阪府看護協会大阪府看護教員養成講習会，講師，「看護論演習」，2012
京都私立病院協会 看護中間管理者研修Ⅰ，講師，「看護倫理と看護専門職としての法的責務」2012
京都私立病院協会看護部長会相互研修，講師，「管理者としての倫理」，2012
京都府看護協会3地区合同看護研修会，講師，「看護倫理を考えよう」，2012
生きがい工房 元気いっぱいサロン健康講座，講師，「お口の機能とそのケア」，2012
生きがい工房 元気いっぱいサロン健康講座，講師，「転ばない身体づくり」，2012

公衆衛生看護学領域

吉田久美子

日本看護医療学会評議委員
日本看護医療学会査読委員
滋賀県彦根市要保護児童対策協議会副会長
名古屋市高齢者虐待相談センター スーパーバイズ
滋賀県彦根市児童虐待防止シンポジウム，座長，「児童虐待はなぜおこるのか」，2012
愛知県一宮保健所，講師「母子保健推進事業評価」2012
愛知県半田保健所，講師「児童虐待事例検討会」2012
愛知県西尾保健所，講師「ハイリスク母子事例検討会」2012

愛知県新城保健所，講師「今後の地域母子保健—周産期からのネットワークづくり」2012

愛知県南知多町，講師「子どもの虐待予防ネットワークづくり」2012

愛知県幸田町，講師「乳児全戸訪問養成講座、家庭訪問」2013

滋賀県近江八幡市市民公開講座，講師，「児童虐待予防—私たちにできること」2013

草野 恵美子

日本地域看護学会広報委員

交野市立地域子育て支援センター指定管理者候補者選定委員

交野市次世代育成支援行動計画推進委員会委員

交野市基本構想審議会委員

社団法人大阪府看護協会調査研究倫理審査会委員

第33回日本看護科学学会学術集会企画委員

大阪市鶴見区保健福祉センター，研究指導協力

大阪市中央区保健福祉センター，研究指導協力

こども未来財団・NPO 法人 NALC 共催 子育て支援者向け研修事業，講師，「少子高齢社会における地域での子育て支援」，2012.12

交野市子育て支援課主催，子育て支援活動をつなぐ交流会，講師，「事例検討～お互いの活動を知り，顔の見える関係づくりを目指す～」，2013.2

月野木ルミ

第33回日本看護科学学会学術集会 企画委員（広報渉外）

大阪医科大学看護学部第1回国際交流シンポジウム「医療分野における異文化理解」，企画および司会. 2013.2.16

月野木ルミ：LDL-C 高値と高血圧をあわせもつと冠動脈疾患リスクがさらに増加. 循環器疫学サイト epi-c.jp, ライフサイエンス社/報道記事

月野木ルミ：LDL-C 高値と高血圧の合併による冠動脈疾患，脳卒中リスクへの影響. 循環器疫学サイト epi-c.jp, ライフサイエンス社/報道記事

黒川博史

第32回日本看護科学学会学術集会実行委員

編集後記

本年も無事に「大阪医科大学看護学部年報 2012年度」を発刊することができました。年報を一読いただければ、本学看護学部の教育・研究活動が発展してきたことを実感できる充実した内容になっておりますので、今後の各種活動や自己点検評価等の際にお役立て頂ければ幸いです。年報編集委員会としましては、各先生方のご協力により、本年度の原稿編集作業は格段に軽減し、昨年と比較して発刊時期を大幅に早めることができ大変感謝申し上げます。今後の本委員会の課題としては、各領域の業績部分の書き方に未だ若干のばらつきあるなどの点がありましたので、来年度以降はより分かりやすい年報執筆要綱の改善を行い、より早い発刊を目指していきたいと思っております。

ご多用にもかかわらず、年報作成にご協力いただいた本学看護学部教員をはじめ関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。今後とも年報編集委員会活動へのご理解ご協力のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

大阪医科大学年報編集委員会

大阪医科大学

看護学部年報

発行日：平成 25 年 3 月 31 日

発行：学校法人 大阪医科大学看護学部

〒569-0095 大阪府高槻市八丁西町 7 - 6

編集：看護学部 年報編集委員会

泊 祐子、月野木ルミ

黒川博史、川北 敬美

制作：有限会社 知人社



OSAKA MEDICAL COLLEGE